
R.A.G Rebellion Against God

Rick.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R・A・G Rebellion Against God

【Nコード】

N5757S

【作者名】

Rick・

【あらすじ】

2005年。警察と能力者による小競り合いが続く東京都成橋区。そこに突如として現れた能力テロ組織『円卓の騎士』により総理大臣暗殺事件が発生、政府はそうした能力者による犯罪に対抗するべく『武装警察隊』を発足した。

2010年。武装警察隊の活躍により沈静化したように見えた能力者犯罪。しかし円卓の騎士が再び現れた事により、事態は思わぬ方向へと進んでいく。

001 - ある被害者の回想1（前書き）

この作品には暴力表現、残酷描写、ご都合主義、オマージュ、パロディ、厨二、半端な銃知識が含まれます。苦手な方はご注意ください。

001 - ある被害者の回想1

2010年2月25日。取調室の大川。

「で、君はその電話の相手に唆されて、こんなものを作っていた、間違いないかい？」
男が尋ねる。

「はい、おおむねその通りです」

私はそれに応じる。

「それで、だ。もう一度確認するよ」

男は眼鏡を掛けなおし、私に質問を投げかけた。

「その電話の相手の声は、どんな風に聞こえたんだい？」

唆されたなんて嘘だ。あれは天啓だった。

「はい、彼の声はまるで」

あの時私は確かに、神の声を聞いた。

遠くから銃声が聞こえる。部下であり友人でもある、それらの怒号と一緒に。

「くそつ、ガサ入れなんて聞いてねえぞ」

「馬鹿野郎！ココ入ったときからこういうことは想定してただろうが！」

「とにかく俺らだけでも逃げるしか・・・」

「裏口も固められてんだぞ！どうしろってんだ！」

銃声が止み、外から部屋のドアが勢いよく開かれた。

大川は思い返す。

どうしてこんなことになってしまったのかと。

ごく普通の家庭に生まれ、ごく普通に生きてきた。そしてごく普通の人生を望んでいた。

都会に出て就職し、安定した生活を手に入れる。

休日には遊ぶために時間を使い、好きなものを買ひ、眠る。

要は楽しく暮らせればそれで良かったのだ。

すべては順調だった。

工場勤務の内定を貰った。地元に比べると格段に賃金が高く、定時に帰宅できる。作業は機械の点検と、ライン管理。難しいことは何一つ無い。

1年も経つと、業務を一通り覚え、ほとんどの仕事をこなせるようになっていた。

そして、一本の電話があった。

上層部の役員から、昇進を含めた仕事先の変更通知。

大川の地元にある古い金属工場を再利用し、精密部品を作り、組み立てる。今までの仕事と相違なかった。

仕事の手土産に地元に戻り、久方ぶりの後輩たちと晩酌を交わす。

「へー、大川さんも出世したなあ。大したもんだ」

横谷は素直に尊敬の眼差しを向け、タバコをふかしている。

「マジパねえな大川さん！俺らもあやかりてえ」

軽口を叩く高居。酒のペースが早い。かなりアルコールが回っているようだ。

「いやね、わざわざこっちに戻ってきたのは、もう一つ理由があるんだ」

「理由？へまして飛ばされちゃったんスか？」

武田は首を傾げる。こいつは酒が入っていなくても話を聞かない。

大川の居た工場は元々人手が足りなかったため、地方に回す人員が不足していた。

足りない人員分の仕事は簡単なものだからバイト感覚でやってもらって構わない、と上から聞かされていた。

そこで仕事探し真っ最中の後輩に声をかけ、人員不足を何とかしようという算段である。

「マジすか！？雇ってくれんすか！？」

「ほんと大川さんは頼りになりますわぁ」

「あ、足りない分は小野と山上と・・・あと長谷川にも声かけましよう！きつと飛びつきますよ！」

3人はそれぞれに電話を掛け、全員からすぐさま了承の返事が返ってくる。

ヘリウム並のノリで人員不足は解消された。

目の前で口論が起きている。

高居が吼えた。

「おい！大川さんにまで手出すんじゃないやねえ！！大川さんはなあ！」

眼下の男は心底退屈そうな表情で、

「あーあー、そういうのは後で別のヤツが聞くから。俺に感情ぶつけないよ鬱陶しい」

「ざけんなてめえ！ぶっ飛ばして・・・」

高居が殴りかかる。彼は確かボクシングをやっていた。素早い動作で放たれた拳は、間違いないく男の顔面に喰らいつく。筈だった。男はそれを首を捻るだけで難なく避け、懐からベレッタを取り出す。銃声が聞こえた。

「わりいな。俺には未来が見えてンだわ」

大川は思い返す。

引き返すべきだったのだろうか。

工場の再稼働から1ヶ月後、追加人員を含めた23人は順調に仕事をこなしていた。ラインの管理と、施設の見回り。部品の組み立て、それに正面入り口と裏口の警備。最初こそ退屈そうだったが、上層部に直接仕事の文句を言った1人がいなくなつてからは、皆黙々と作業していた。

機械が何の部品を作り、それを組み上げると何になるのか。皆正しく理解していた。

でも誰も文句を言わなかった。友人である大川の言葉を信じていたからだ。

大川が電話の声を信じたように。

大川の仕事。それは工場全体の管理と、

「大川さん・・・これヤバいんじゃない？」

「大丈夫だ。きちんと手続きを取って生産していると聞いている」

「聞いているって・・・直接証明できるもの無いとマジでまずいんじゃないっすか？」

「・・・大丈夫だ。何も問題ない」

嘘をつく事。この2つ。

眼の前では恐らく気絶している横谷と、足から血を流して倒れている高居。

そして黒い丈長のコートを羽織った小柄な男。

「大川だな」

「ああ」

「眼エ座ってンぞ。大丈夫かオマエ」

「覚悟はしていたよ」

「そオかい。それじゃあおやすみ、工場長」

すまない。

誰にでもなく、うわ言のよつに、そう呟いた。

002 - ある被害者の回想2

2月24日、21時38分。

「終わったぞ」

「ヤス君、お疲れ様」

ヤスと呼ばれた男はシガーケースから煙草を取り出し火を点けた。

「つーかジヨニーよお」

ヤスは不満そうに話す。

「わざわざ俺まで出る必要なかったんじゃないの？ひよこと武信だけだとオになつたる」

「ひよこ君は制圧担当だし、武信君があんなになつちやつたからね。直毅君でもよかつたんだけど、彼は・・・ね？」

「ッチ」

軽く舌打ちをして、さっきまでの出来事を振り返る。

市街地を1台のトラックが走り抜ける。

トラックには運転手が一人、荷台は会議室のようになっており、テーブルを囲むようにして5人の男が座っていた。

「作戦内容をもう一度確認するよ」

この場の指揮官であるジョニーは、ずれた眼鏡をなおしつつ喋り始めた。

「今回の作戦は、銃を密造してる工場の制圧、従業員の保護だ」

「またお巡りさんごっこだもんな。いい加減『本筋』の仕事を貰いたいね」

男のうちの一人、ひよこが悪態をつく。

「1人でも殺したらまずいんだろ？」

髪を適当に切りそろえた金髪の男、直毅が口を挟む。

「駄目だ。恐らく従業員は密造してるなんて思っていないだろうし、そこまで重い罪にもならない」

長身で切れ目の優輝がそれに応じた。

車は市街地を抜け、海に面した工場地帯へと入る。

「……でも発砲に関しては制限されてないよね。そのあたりはどうなの？」

「さすがに従業員全員が丸腰ってわけじゃねえんだろうさ。そこで

俺らの出番なんだから」

茶髪のショートカット、童顔の武信の問いに、ひよこが答えた。

「そういうことだ。まずひよこ君が陽動のために正面から進入、武信君は裏口の確保の後、1課と2課の応援を待つて従業員の武装解除、後に保護だね」

「相手が発砲してきたら？」

「させないのが一番だけど、もしされちゃったら黙らせるくらいはやっても構わない」

「撃つていいのに殺しちゃダメってか。そりゃ俺には無理だわな」
直毅が笑う。

「もう着く。車は手前で待機させッから2人とも降りろ」
ヤスが到着を知らせ、作戦が開始される。

「さて行くか。一応気をつけるよ武信」

ひよこがギターケースを肩に担ぎ、車から降りる。

「・・・お互いに」

続けて武信も降り、走り出した。

「ひよこ、聞こえてるか？」

優輝がインカムの動作確認も含めた通信を飛ばした。

「バツチリ聞こえるけど少し黙って。今サビなんだよ」

「お前またインカムで音楽聴きやがって！遊びじゃねえんだぞ」

「くそ、武信はどうだ、聞こえるか？」

「らーらーあああああああ」

「テーマもかよクソ野朗共！！おい直毅、こいつらのインカムいじったのお前だろ！！」

優輝が声を荒げる。

「……なんだってえ？よく聞こえねえ」

インカムに音楽プレイヤーを仕込んだ張本人は絶賛電波垂れ流し中である。

「……ジヨニー俺帰るわ」

「みんな真面目にやってくれ。優輝君スネちゃったよ」

「ごめんごめん。悪かったよ」

悪びれる様子も無く答えられたが、この場は流す。あまり時間が無い。

「それじゃあひよこ君、レーダーお願い」

「あいよ。ちょい待っててな・・・」

ひよこは目を閉じ、正面の建物に意識を集中させた。

見たことも入ったことも無い建物だったが、頭の中に鮮明なイメージが流れ込んでくる。ドアが開く様子、機械が稼働している様子、配管から滴り落ちる水の一滴に至るまで。もちろん人間の動きも例外ではない。

「正面に1人、中に・・・20人。うち3人は1部屋に固まってる、あとはお仕事中かな・・・んで裏に1人」

「調査報告より1人少ないね。終わりがい？」

「終わり。休みかなんかかな。もう行っついていいかい？」

「行こうか。カウントを合わせよう」

「現在時刻21時23分。15分で片付けてくれ。3・・・2・・・1・・・GO」

「行ってきまーす」

「らららああああああああああ！！！！！」

21時24分。

工場の正面玄関の見張り当番、山上は困惑していた。

「・・・なんだって？」

「いや、だから道をお尋ねしたいんですよ・・・迷っちゃって・・・」

市街地の方向から突然でかいアタツシユケースを持ったボサボサの黒い長髪の男がやってきたのだ。どう見ても浮浪者にしか見えない。そもそも道に迷うにしても限度がある。このあたりには倉庫くらいしかない。普通は海が見えたあたりで引き返すはずだ。

「で、あなたはどこに向かってんだ？」

「大川製鉄所つてとこ探してるんですけどね」

「そりゃココの事だ。んで何の用だ」

「工場見学を・・・」

「おもむろに入ろうとすんじゃないやねえよ。何の用だって聞いてんだ」

「いやね、この荷物をお届けにあがりました」

「中には何が入ってる」

「・・・見たいですか？」

男が尋ねる。

「ああすごい見たいね。だからさっさと開ける」

「実はこれね、そうなんですよ」

「は？」

「だから、そうなんです」

「からかってんのかテメエ！」

「真面目です。そうなんです!!!!!」

男の目は真剣そのものである。

「もういい、はやく開ける」

山上は強引に荷物を奪った。いや、奪おうとした。

「わかんねえ野朗だなお前」

瞬間、山上は目の前が暗くなった。

「だから分隊支援火器だつ^{S A W}つってんだろつが」

ギターケースで思い切り殴られた男は、床に伸びていた。

「んじゃまあ、始めるかね」

ひよこはギターケースを開け、中身を取り出す。M249MINI
MI。軽機関銃である。

ひよこはMINIMIを構え動作確認を済ませると、懐に手を伸ばした。

「さてと」

「みなさん！！ガサ入れですよー！！！！」

懐から取り出したガバメントで監視カメラをぶち抜き、続けざまに入り口に向かってMINIMIを乱射した。

003 - ある被害者の回想3

21時27分、工場内。

「襲撃だ！」

「なんなんだよ！警察のガサ入れか！？」

「ガサ入れにしてもやりすぎだろあいつ！」

「手空いてる奴は武器持って逃げる！！」

大混乱だった。なにせ入り口から男がマシンガンを乱射しながら近づいてきているのである。

大川が見あたららないので、現場責任者代理の武田と小野が指揮を執り、避難を促していた。

銃声とともに声が聞こえる。こっちに近づいてきている。

「こつなつたら俺等も迎え撃つしか・・・」

残った2人は意を決して侵入者を迎え撃とうとしたが、

「オラア！わざわざ弾当てないように気遣ってやってんだ！射線に出てくんなテメエ等ア！！」

入り口側の通路には既にマシンガン乱射魔が辿り着いていた。

「銃声が近づいてくるウウウツ！！！！」

「いいから裏口に逃げるんだよオオオオオッ！！！！！！！！」

同時刻、裏口。

男は携帯を耳にあて、

「正面に襲撃！？お祭りなんだけどマジで！！」

「んでお前は正面のヤツの仲間かぁ？」

「いや・・・あの・・・」

「答えねえと脳天ブチ抜くぞ」

武信は今、頭にトカレフを押し付けられている。
進入に失敗し、見張りに捕まった拳銃、近い将来人質にジョブチエ
ンジするだろう。

「・・・仲間です」

「よしわかった。まず銃出せや」

武信は懐からベレッタを取り出し、床に置く。同時に内ポケットか
ら紙切れが舞い、裏口の見張り、長谷部の目の前に落ちた。

「なんだこれ、写真？」

「あ、あの・・・それは・・・」

「いいからお前は手あげてる！ブツ殺すぞ！！」

「ごめんなさい！撃たないで！！」

「なんだこの汚ねえ写真」

男は写真を拾い上げる。

写真はところどころ擦り切れて、色褪せていた。

被写体は武信と、長い黒髪の女性。柔和な笑みを浮かべている。

「・・・」

「ああわかった、お前の彼女だろこれ。大事そうに持ってやがって」

「・・・返せ」

今までの態度からは想像出来ない声が発せられる。

「ああ？」

「それを返せ」

武信の顔がみるみるうちに怒りの色に染め上げられていく。

男は歪んだ笑顔をその顔に貼り付け、写真を地面に落とす、片足を振り上げた。

「お前自分の立場わかってんのかあ！？」

「!!」

武信は長谷川の上に馬乗りになり、顔面を拳で殴打していた。長谷部は最初の一撃で気絶していたが、そんなことはお構い無しに武信は長谷川を殴り続ける。

「おい武信!」

自分を呼ぶ声がある。武信は本能の赴くまま、左に振り返る。それと同時に、優輝の放った右フックが、武信の顔面に突き刺さった。武信は空中で見事なトリプルアクセルを決め、そのまま重力に身を任せ、地面に倒れ動かなくなった。

21時33分。裏口通路。

「おい武田、全員ついてきてるか?」

「来てるよ小野。あ、でも高居と横谷、それに大川さんが居ない」

「あいつらは勝手に逃げてるだろ。俺等はまず自分の心配しようぜ」

「そうだね。外出たらみんなバラバラに逃げよう!」

「オーケー。行くぞ!」

外に出た瞬間、フラッシュライトの光と、多数の銃口に迎えられた。

同時刻、裏口。

「オーケーじゃねえよ。全員動くな」

外に待機していた優輝とヤスは、裏口から出てきた連中をまとめて縛り上げ、警察に引き渡した。

「おかしいな。3人足りない」

「オイオイ。トチったかひよこオ？」

ヤスはひよこに問いかける。

「なーんか最初の3人がずっと管理室から出てこないんだよねえ。ヤス頼める？」

「ツチ、高くつくぞ」

ヤスは裏口から管理室へと向かった。

以上が事の成り行きである。

「いつから俺等は警察の真似事させられてんだっつうの。つまんねえ」

煙草をふかしながら悪態をつく。

「仕方ないさ。定期的にこつこつ仕事もしないと信用無くなっちゃうからね」

「ツたく、ガキの使いじゃ・・・ん？」

「うう・・・」

ふと目線を下にやると、先程気絶させた大川が目を覚ましていた。

「オマエなかなかガツツあんじゃないかねえか」

「こんな・・・こんなはずじゃなかったんだ・・・」

大川は呟く。

「自業自得、ツてヤツだなあ。一生かけて後悔すると良い」

「絶対に失敗しないと思っていた・・・彼の言葉はそれ程に・・・」

「彼？」

ヤスが飛びついた。

「オマエ、なんでこの工場長やってんだ？」

「上からの指示さ……」

「業務内容は知らされなかったんか」

「こつちについてから電話で聞かされたよ……上層部のうちの一人らしいが」

大川は意識が完全に回復したようで、はっきりと話し始めた。

「オマエはこんな危険な橋渡らなきゃならねエ状況だったんかよ」

「違う。それなりに満足できる生活を送っていたさ。でも電話で仕事の内容を聞いた時、何故だかやらなきゃいけない、やって当然だと思っただ」

「なるほどねエ」

ヤスは少し考える素振りを見せ、

「おいオマエ、その電話の時、声以外の妙な『音』聞かなかったか？なんでもいい」

「『音』……？すまない、今はよく思い出せないな」

「そかい。まあ聞く時間はこれからたっぷりあるからなあ。連れてけ」

いつの間にか部屋に居た連中に指示を出す。

この集団は基本的に指示待ち人間だ。使いやすく助かる。

「・・・ジョニー、聞いてたか？」

「ああ、単に変な使命感が芽生えただけかもしれないけど、調べてみる価値はあるね」

「・・・なにが”神の啓示”だ、糞つたれのテロリスト共が」

ヤスが思考しようとする、

「ヤスー。撤収だ。車回してくれ」

ひよこがギターケースにMINIIMIを仕舞いつつ部屋に入ってくるといふ器用な真似をしていた。

「たまにはテメエが運転しろ。俺は疲れてんだ」

「俺だつて疲れてるさ。これ結構重いんだぞ？武信はダメなんか？」

ひよこはギターケースを肩に担ぐと、ヤスと共に裏口へと歩き始める。

「アイツは今頃車中で鼻治してるだろオヨ」

「まーたやらかしたかあいつ・・・」

「まあまあ、俺が代わりに運転してやっからよお」

直毅がインカム越しに伝わる程愉しそうな声で言った。

「お前は人轢きそうだからダメだ」

「オマエは海に落ちそうだから却下」

「ぐぎぎ」

結局優輝が運転を任せられ、6人は帰路についた。

case・02 end

意識を取り戻す。体中が痛い。どうやら、まだ生きているよ
うだ。

非常ベルの音。悲鳴。足音。爆発音。

暑い。いや、熱い。ここはどこだったか。

熱源から遠ざかるため、痛みを訴える体を見捨て、壁まで這いずる。

背中を壁に預ける。ここでやっと視力が回復した。

すぐ正面には、人間だったであろうものの、千切れた部品が

目覚まし時計の鳴る前に目が覚めるのは、ここに来てからほぼ毎日だった。

何か嫌な夢を見ていた気がしたが、とりあえずはこのベッドのせいにしておこう。

隊舎の備え付けのベッドは寝心地が悪すぎる。明らかに固い。そして無駄にデカイ。

自主的に起床すると脳の活性化は早いもので、カーテンを開けて冷蔵庫を漁る頃にはもうすっかり目が覚めていた。

「メシ作るうえにも材料が無いな。パンでいいや」

戸棚から食パンを2枚取り出し、コーヒーと一緒に頬張る。ジャムはつけない主義だ。

さっさと朝食を済ませ、顔を洗い、クローゼットに適当に掛けてある服を取り、着替える。

着替えを済ませながら改めて思う。部屋が広い。広すぎる。

16畳一間にキッチンと風呂、更に完全個室。隊舎とは名ばかりで、そのへんの旅館の一室のようだった。

元々6畳一間で生活していた俺にとっては、いきなりオーバースペックな部屋を与えられても対処に困る。

物が遠すぎていちいち歩かなければならないのだ。面倒な事この上ない。

そんな贅沢な悩みを抱えつつ、部屋を後にした。
先日の大川製鉄所制圧の報告会までまだ時間があるし、ゆっくり歩いていこう。

隊舎から出て朝陽を浴びる。少し肌寒いが、雲ひとつ無い青空が広がっている。
相変わらず空気はまずいけど天気はいいな。うん、いい朝だ、感動的だな。

ここから歩いて15分程の場所に武装警察本部がある。

そこらへんに生えてる高層商社ビルと見た目変わりなく、実際中也ほとんど変わらない。

表向きは財政管理の仕事だったか？そのあたり曖昧だ。
実際に財政管理の仕事もしているらしいが、部署が違つのでそのあたりは疎い。後でヤスに聞こう。

まあそんなわけでビジネスマンよろしく鞆を抱えて出勤中だ。中身は銃だけだ。

政府直轄の治安維持機関、武装警察隊。俺はその第7課所属。
組織自体は元々、立て籠もり発生の際の突入班や銃撃事件等の際に狩り出される、らしい。

でも最近荒事が発生することがほぼ無いため、俺が来た頃には既に便利屋さんみたいになっていた。

昨日みたいに出勤することは稀で、普段は本部の電気の玉を替えた

り、
社内のパソコンの点検やら修理やらをしている。決して事務員ではない。
まあ出勤したらしたで怪我人出ちゃうし、平和なら何よりだ。あんまり動きたくないし。

ちなみに7課は武装警察の中でも特殊技能を持った者が集められ、より危険な仕事、主にテロ集団殲滅に回されるため誰も入りたがらない。まあ、簡単には入れないわけだが。
その分待遇がいい。おかげで遊ぶ金には困ったためしがない。

そもそも何故ただの学生だった俺がこんな物騒な機関にいるのか。

3年前に事件があつた。その事件に巻き込まれた俺は、ジョニーに再会し、この仕事に就いた。
それだけである。まあ、細かく色々あつたのだが、そのあたりは思い出したくないので省略だ。

ビルに着き、ビルの名前を再確認する。

「東京財務管理局」、と書いてある。

15階建てのビルで、普通の仕事は10階までで行っているらしい。
俺が向かうのは14階だ。

14階に目的の会議室があるが、その前に武器保管室へと足を向ける。

世界各国の様々な武器が並べられたその部屋は、厳重な管理をされ

るわけでもなく、
ドアが開けっ放しになっていた。無用心すぎる。鍵はともかくドア
くらい閉めてほしい。

しばらく部屋で武器を眺める。

何故だか心が落ち着く。俺の密かな楽しみのも1つだった。
気がつくとも報告会の時刻ギリギリだった。我ながらアホだ。

駆け足で会議室へ向かい、ドアを開ける。

会議室とは言っても、ほぼこの部屋が7課の拠点となっている。

隊員それぞれのデスクがあり、部屋前面には馬鹿でかい液晶画面、
その前に長机が1つ。

そしてなんだかバナナの匂いがする。

「おせえぞひよこよお」

直毅が煽ってくる。普段遅刻してくる割に、自分が早いと調子がい
いようだ。

「まあ時間ピッタリだし遅くはないだろ。普段遅れるヤツが良く言
う」

言っておくが優輝、お前も遅刻魔だぞ。

「あれ、武信はどこいった？」

「ああ、アイツなら入院中だ。鼻と体の調整だよ」

ヤスがパソコンを操作しながらバタフライナイフをくるくる回す。
危なっかしい。

「おおそい」

「ああぐんま、帰ってたのか」

路地裏のチンピラにスーツを着せたような風貌のぐんまに軽く挨拶をする。

ん、なんだこれ。

見慣れない黄色いパッケージのタバコを渡される。

「キヤあプテンアーク」

「バナナの匂いはこれか。・・・結構うまいなこれ」

「みいやげ」

「そついやブラジルの方行ってたんだったか。ご苦労さん」

「ああ？ああ」

ぐんまは日本語こそ適当だが、13カ国語を使い分ける秀才だ。
そのためよく通訳として使われているようである。昨日の制圧のときは飛行機の中か。

「みんな揃ったみたいだね。それじゃあまず重要な事から話そうか」

俺が会話を終えたのを見計らい、ジョニーが眼鏡を中指で押し上げる。

「まずはこれを見てくれ。押収したうちの1丁だ」

「クリンコフかぁ。いかにもな物作ってやがる」

AKS-74U。中東のテロリストが使っていた事で不名誉な名称のついている銃だ。

「問題なのは銃の種類じゃないんだ。グリップを見てくれ」

ジョニーが写真を拡大し、銃を利き手で握る部分が大きく映し出される。

ダットボード上に、十字架が描かれたマーク。その刻印が埋め込まれていた。

これは最近流行しているマークで、Tシャツからライターまで色々なものにプリントされている。

そしてこのマークを好んで使用する犯罪者集団に、俺達は覚えがあった。

「おい、こいつぁ・・・」

「結論から言うと、アタリを引いた」

会議室の空気が変わる。

俺達の本当の仕事が始まろうとしている。

「大川から『音』についての証言が得られたよ」

本当の仕事、それは

「上層部の一人が、どうやら『円卓の騎士』の一角らしい」

『円卓の騎士』と呼ばれるテロリスト達を、そいつらの本当の目的を

「では、詳細を説明するよ」

1つ残らず潰す事。

「まず証言については、今話したとおりだ」

ジヨニーの話に、俺は真つ先に思いついた疑問を口にする。

「今回は『音』じゃなくて『声』なのかえ？」

「うん。後半は僕が直接話を聞いたからね。確かにそう言っていたよ」

「なるほどねエ。連中もなかなかやらかしてくれンじゃねえの」

ヤスは感心したように大げさに頷く。

こういうあからさまな動作をするとき、ヤスは全く感心していない。要は、何もわかってないってことだ。

ぐんまもその動作の意味に気づいたようで、

「しいったか」

「あ？言う様になったじゃねエかぐんま。その口もつと横に開くようにしてやるつかア？」

ナイフをちらつかせている。

「すみませんでした」

謝る時は流暢な日本語だなこいつ……。

「声で人間の意思を操ると考えると、電話の相手は俺等と同じ人種だな」

優輝が結論づけ、

「恐らくね。そしてその電話の主は、声帯が特殊なんだろう」

そしてジョニーが優輝の発言を裏付ける。

世の中にはいくつかの区分がある。

人種の違い、性別の違い、国籍の違い、宗教・思想の違い。挙げればキリがない。

その中で、最も大きいとされる分け方。

能力を持つものと、持たないものだ。

能力といっても、ちょっと普通の人より何かに長けているというだけだ。

例えばヤスはちょっとだけ先の『未来』が見えているし、俺は『見えないもの』が見える。それだけ。

俺に言わせれば、こんなもんより生まれ持った才能のがでかいと思うがね。

「大川製鉄所の大元は、日本中央財閥。第二次大戦後に急成長を遂げた財閥だね」

「日財かよ！？そんなところが犯罪者匿ってんのぉ！？」

直毅が驚くのも当然だった。

日本中央財閥と言えば、重工業で国内大手の財閥であり、ここが潰れればこの国も潰れると言われる程である。

それだけ下請けの企業も多くなる。特定は難しそうだ。

「うん。その下請け企業の1つに、騎士がいる」

「迅速な発見ありがたいもんだね」

「んで、俺等はなんだ、潰してくりゃいいのか」

ヤスはいつの間にかナイフをしまい、真面目に話を聞いていた。

「殺しちゃってええのー？」

ぐんまは物騒なことを口にする。

直毅はというと、黙々とP90のマガジンに弾をこめていた。こいつのが物騒だった。

「さて、指令を聞こうかジョニー」

優輝の瞳に決意の光が射す。

「デスクワークだ」

「……は？」

ジョニー以外が全員、間抜けな声を出す。

「デスクワークだ」

大事なことなので二回言ったようだ。

「……こういう場でその様な冗談はいらないぞ」

優輝が人でも殺す勢いでジョニーを見ていた。無理もない。

「いやいや、ごめんごめん。僕は嘘をつくのが苦手だ」

「その割にどっから嘘なのかわからねえぞ」

「クリンコフが押収されたあたりからだ」

「そこから!？」

思わず突っ込む。

「いやほんとにすまない。そろそろやめないと殺されてしまいそう
だ」

気づくと直毅が銃口をジョニーに向け、ヤスがナイフを投げる寸前
だった。

「真面目な話、日財ともなると調べるのに時間がかかるんだ。少
し時間がかかるが、4課が血眼になって調べている。動くのはその
後だね」

円卓の騎士の構成は、各企業や要人のトップ集団等というわかりやすいものではないらしい。

そのあたりを調べただけ、4課には頭が下がる。ご苦勞なことだ。

「だから君達は持ち場に帰って、指令を待ってくれ」

「結局デスクワークじゃねえか・・・ああやだやだ、煙草吸ってくる」

直毅はガンオイルを注すのを止め、部屋から出る。

「さアて資金調達でもすっかなア」

ヤスはパソコンと向き合った。

「俺は武信の見舞いでも行くか・・・おいぐんま、顔出しに行くぞ」

「ホッヒヒ」

2人して部屋から出て行く。こいつら仕事する気0だな。

シヨニーはどうするのだろう。

「ん、僕は4課の手伝いだ。上からの御呼びがかかってもいいようにね」

相変わらず仕事熱心だな。

俺もとりあえず病院に向かうとしよう。仕事は・・・空いた時間でいいや。

7課は基本的に、自由人の集まりだった。

3月1日、19時15分。7課会議室。非通知電話。

『今日の演出は気に入ってもらえたかな?』

「・・・君が電話の主だね?」

ジヨニーが電話の相手に問いかける。

『質問に質問で返すのは感心出来ないな。まあ、そう呼んで貰っても差し支えない』

「何故ここの番号を知っている?君達の目的は何なんだい?」

『まあそう焦ることもあるまい』

電話の主は溜息をつき、

『とりあえずその懐に仕舞っている銃で、自分の頭を撃ち抜いてみてはどうか?』

ジヨニーはその『声』を聞くと、懐からリボルバーを取り出し、自

分のこめかみに押し付けた。

case・03 - 道化師は踊る -

「で、誰が行くんだ？」

優輝が空になったソレを一瞥した。

「公平にジャンケンでいいだろこんなもん」

ヤスが気だるそうにぼやく。

「駄目だ。絶対ヤスが勝つ」

始めから出す手を見透かしている者にとって、その勝負は勝負とは言えない。

「じゃあ面倒だけどハイアンドローでもしない？」

隠しきれない笑みを浮かべたひよこが言う。

「ひよこが勝つだろ。くだらん事に能力使つなよ」

次の一手が確実にわかる賭け事は、イカサマと変わらない。

「もうポーカーやろっぜえ」

直毅は既にトランプを配り始めていた。

「誰が配ってもお前が勝つだろうが」

圧倒的な運を持ち合わせている者は、いかなる勝負も茶番に見えた。この空間では、あらゆる勝負事はアンフェアなのである。

「じゃあどおすんのお？俺が行けばええのお？」

ぐんまが支度を始める。

「なら俺が行こう」

「仕方ねえな俺が行ってヤンよ」

「いいっていいって。俺が行ってやつからよお」

「いいよ。ここは俺が行くからみんな待っててよ」

「・・・じゃあ僕go」

「」「」「どろどろどろどろどろどろ」

「ええ・・・僕まだ何m」

「いいから行けよ武信」

「・・・はい・・・」

現在この部屋には、煙草が一本も無い。

7課ではジョニーと武信以外が全員煙草を吸い、普段は会議室が雀荘のように白く煙っている。

そんな7課会議室の空気が澄み切っている事自体が異常であり、この異常事態を解決すべく1人の勇者が立ち上がらなければならなかった。

何故煙草の買出しごときで皆ここまで渋るのか。まず銘柄が面倒なのである。

優輝と直毅はマルボロソフト、ひよこはハイライト、ぐんまはパラメント。ここまではいい。

ヤスは缶入りのピース。これが厄介で、近辺のコンビニで取り扱っているところが無い。

これを買いに車を街中の煙草屋まで走らせないとならないのだが、

「あ、俺はコンビニ弁当とコーラを頼む」

「俺も弁当でいい。ああコーヒーも頼んだ」

「俺あハンバーガーな。ポテトのしも3つくらい。あとコーラな」

「俺もハンバーガー食いたいわ。シェイクはバナラでいいよ。溶けてたら怒るけど」

「たあこ焼き食いたい」

この様に昼飯もついでに買わされるのである。
最早煙草を買うほうがついでになっている気がしなくもない。

そんなわけで剣の代わりに金を持ち、馬車の代わりに自動車に乗り、勇者武信はお使いクエストをこなすために会議室を後にした。

「・・・まったく、昼食くらい食堂で済ませればいいんじゃないかな？」

会話の一部始終を聞いていたらしいジョニーが、入れ替わりに入室する。

「食堂のメシとか食ってらんねえよ。なんで社内食堂なのにあんなにたけえの？」

「メニューにサンドウィッチって書いてあるのが気にいらぬよ。サンドイッチって書けばいいだろ素直にねえ」

「米が硬いよおホヒヒ」

「難癖つけるの好きだね君達は・・・煙草だって下の自販機にあるじゃないか」

「可愛い子には旅をさせるッて言うだろオ？」

「意味が違うよ」

「まあ、武信が買出しに行くのは最早様式美だ。仕方ない」

「苦勞は買うほどの価値があつてこそなんだけど・・・あ、そうだ」

「ジヨニーは思い出したように手を叩き、

「今日の坂上利章議員さかがみとしあきの街頭演説会、テロリストに狙われるそうだ」

「そんな軽いノリで言う内容ではないだろう」

「このご時勢に街頭演説なんかやるつもりならタダじゃ済まないだろっ?」

「前総理のアホがやらかしたかな。お陰でこっちは尻拭いだ」

「テロリスト達が演説中の政治家を襲撃する事件が割と頻繁に起こっている。」

「理由は様々だが、最近では相対する思想を持った派閥が傭兵を雇い襲わせているようだ。」

「過激派のやる事はテロリストと相違ない。」

「そうだった他派閥の牽制の意味を込めて、現在の主流は立会演説会。」

苦肉の策である。

坂上議員は、歪んでしまったこの国を立て直す民主再建派の筆頭だ。変革を望む派閥にとっては目の上のたんこぶであり、狙われるのは必然であった。

更に彼は派手な演出を好むため、個人演説で済むところをわざわざ街頭演説に切り替えた。

「まあまあ。とにかく彼が安全に演説を終えるために、今回僕達は雇われた」

「雇われた？今回は上からの指令じゃないわけか」

「うん。坂上議員直々の御指名だ。それにもちゃんと理由があつてね」

ジヨニーがリモコンを操作すると、液晶画面に文章が映し出される。

「脅迫文か。奇襲じゃないだけ良心的かもね。えーっと・・・」

ひよこは長つたらしい文章を簡潔に訳した。

「わざわざ的になりにはしゃしゃり出て来るようなら射殺するので、大人しく演説中止してねこの糞野郎が、ってところかい」

「そこまで書いてないがな。まあ、ご丁寧に射殺すると書くあたり底が知れる」

優輝が率直な感想を述べる。

「まあブラフだろ。大方爆弾あたり投げ込んでドカンじゃねえのか」

「そこで僕達の出番だ。あらゆる危険を防止もしくは排除し、彼の剣となる」

「盾は下ツ端の役目だモンなあ。さて、支度すつかねエ」

各々が出動の準備を進めていると、

「・・・ただいま」

大量の袋を抱えた武信が帰ってきた。

ジヨニーは顔色ひとつ変えずに告げる。

「お帰り武信君。悪いけどその荷物抱えて駐車場にＵターンだ」

「おめえもなんだかんだパシってんじゃねえか！」

「まあ流石にアワレだからなあ。持ってやんよ」

そう言うところヤスは自分の昼食と煙草の入った袋だけを掴み、会議室を出た。

「俺等が必要な物積み込むかねえ。行こか」

「どうせ俺は今回も待機なんだろう？わかってても泣けるぜ」

「ホヒヒー」

ひよこと直毅、ぐんまがそれに続く。

「僕はたいして荷物無いからね。半分持つよ」

「……ありがとう。ところで何処に行くの？」

「仕事だ。鍵閉めておくから先に行ってる」

残り2人の退室を確認し、優輝が溜息をついた。

「片付けもしないでさっさと行くんだもんないつら」

「トランプくらいすぐ片付くだろっに……ん？」

そういえば、さっき直毅がポーカーのために手札を配っていた。

「……まあこんなもんか」

優輝の手札は2ペア。初手にしては上出来だ。

「こいつらは……大方想像通り、か」

ひよこと武信が1ペア、ぐんまは役無し。

「こいつの運も大概だな」

ヤスの手札はスペードの10から13までと、ハートのクイーン。

ロイヤルストレートフラッシュも狙えなくはない手札だ。

残りは直毅の手札だが、結果は言うまでもなかった。

「イカサマ無しだとしたら、やっぱり流石だよ直毅」

優輝は会議室に施錠し、エレベーターへ向かった。

直毅の手札には、エース4枚に挟まれ、満面の笑みを浮かべたピエロが1人。

本部から車で20分程のところにある公園。

周辺の道は既に交通規制が敷かれ、演台前の広場には既に多くの人
が押し寄せている。

現在この公園には警察の他、市民に紛れて武装警察隊の1課と2課、
7課が配置されていた。

「武装警察隊7課です。本日は宜しくお願いします」

ジヨニーが一礼し、皆もそれに倣う。

「うむ。坂上だ。今日は宜しく頼むよ」

灰色のスーツを身に纏った小太りの中年男、坂上が礼に応じた。
両脇にがっしりとした体格のSPを立たせ、ふんぞり返っている。

「君達は私の身の安全だけ考えて動いてくれ。何かあったら大事だ」

「……一つ質問いいでしょうか」

武信が自信なさげに手を挙げる。

「何だね」

「・・・7課は基本的に外から依頼を受けないんですが・・・そもそも知ってる人もあまり居ないし・・・どうして直接依頼をくれたんでしょう・・・か・・・」

坂上の偉そうな態度に萎縮しているようだ。

「船木総理から直接の推薦があつたんだよ。聞いていないかね？」

「ああ・・・船木の爺ちゃんから・・・」

「さつき車で話しただろうが。ちゃんと聞け馬鹿者」

優輝が叱責する。武信は基本的に3回くらい言わないと話を聞かない。

つい先程も昼飯のポテトが1つしかない事に腹を立てた直毅から怒られたばかりである。

「しかし君達随分と若いな。本当に大丈夫なのかね」

坂上が首を傾げるのも無理はなかった。

7課メンバーはジョニーが23歳、他が全員20歳なのである。更に全員、線が細い。坂上が両脇に抱えているSPと比べても頼りないように見える。

「問題ありません。身の安全は約束します」

優輝がはっきりと告げる。

シュコー

音がする。

「ならいいんだがね。あとスーツの上にトレンチコートとは、そろそろ暑いのではないか」

シュコー

それは、この場に似つかわしくない。

「防弾服も兼ねてますんで。暑いけど着けてないと、撃たれたら結構痛いですからねー。あ、普通の人だと衝撃で骨にビビっちゃうんですが、俺等能力者なので基本なんともないっす」

ひよこが営業スマイル全開で語る。

シュコー

まるで、獲物を狙う獣のような。

「それならいい。それで、だ。さっきからその」

坂上が純粹な疑問を口にしようとした。

シュコー

7課一同は、その音の正体を、後ろを振り返ることで確認した。

「シュコー俺のことですかシュコーここの空気はシュコー排気が多くてシュコー」

「なんでガスマスク着けてんだ馬鹿野郎！さっさと外せ！！」

ひよこが直毅からガスマスクを引っぺがした。

「ガスマスクは良い。初期型も好きだが、やはりキャニスターは左に付いていた方が」

「んな事聞いてねエよ」

「悪いねえおっちゃん。コイツあたまおっかしいからホヒヒ」

ぐんまが下卑た笑いを浮かべる。

「……本当に問題無いのかね……？」

「……後でよく言っておきます」

ジヨニーが申し訳なさそうに頭をたれた。

「もう一度言うが、何かあったらただでは済まないからな。おっと、スポンサーから電話のようだ。失礼するよ」

坂上はSPを引き連れて、演説カーへと戻っていく。

「君達は真面目に仕事する気があるのかい？」

ジヨニーがズレた眼鏡を中指で押し上げる。

「・・・すみません」

「だって暇なんでもんよお。ちょっとした遊び心も必要だろ？」

「いらないうつての。仕事なんだぞ」

ひよこが至極真つ当な意見を口にしているが、

「オマエも音楽聴きながらヘラヘラしてたじゃねえか」

「ヤスだって携帯いじってただろー！？見てたんだぞ俺は」

「ホッヒヒ」

「はぁ・・・こいつら・・・」

優輝が今日何回目かわからない溜息をついた。

「これが公園周辺の地図だ」

一同はトラックに戻り、配置を確認していた。

「ここが今いる公園。で、ここが広場だね。広場は直毅君とぐんま君、武信君に任せるよ」

「・・・怪しい行動してる人がいたら、確保すればいいの？」

「派手に暴れてえけどまあ、船木のジジイに推薦されてっからな。下手な真似はしねえ」

現総理の船木とは、メンバー全員知り合いだった。

第7課は武装警察隊の中でも特殊任務向けに、総理が直々にメンバーを選出し作られている。

「周辺2km以内に狙撃できそうなビルは5つ。そのうち一番高いビルに優輝君とヤス君」

「ヤス、観測は任せるぞ」

「言われねエでもな。オマエこそミスンなよ優輝」

ヤスと優輝は狙撃手対策のためにライフルを抱えている。

他のメンバーはアタッシュケースに仕込んだMP5。ケースに仕舞った状態で撃てるよう細工がしてある。

「まあ物騒なもの使わない状況作るのが一番だからねえ。精々ががんばるよ」

ひよこは1課と共に周辺ビルの警戒。

残る2課は私服に着替え、公園およびその周囲の警戒である。

「武信、ちゃんと聞いてた？」

「・・・えっと、確保すればいいんでしょ？」

「不審な行動をとった奴の確保だ。一言一句聞き逃すな」

「僕は残って広場の監視、指揮を執るよ。じゃあ皆、持ち場につき
うか」

「了解」

それぞれトラックを降り、指定された場所へと向かっていく。

3月1日。12時55分。公園横トラック。

「全員指定位置についたかい？」

ジョニーが確認する。

「O K E。いーい眺めだ」

ヤスが屋上から双眼鏡を覗きながら呟く。

「風も無い。狙撃するには絶好だな」

優輝が即座に通信を返した。

「・・・こっちは異常ないけど、人が多いねやっぱり・・・」

開始5分前ともなると、公園広場は既に人の洪水が押し寄せている。

「問題なしだ・・・やっぱり煙草逆につけちゃった!!」

「1人かあくほ」

ぐんまが不審人物を取り押さえたようだ。

「ぐんま君、報告を」

「爆弾ふたあつ」

「爆弾？」

「きれえなねえちゃんだよおホヒヒ」

「ナンパしてんじゃねえよ糞が！俺も混ぜろ！！」

直毅が抗議の声をあげた。

「・・・真面目にやれ。ここからはお前の頭がよく見える」

優輝の声にかなりの濃度で怒りが配合されている。ちなみに残りはやさしさではなく侮蔑だ。

「すみませんでした」

「1時には演説が始まるからね。ほんと頼むよ」

「まあリラックスしてこ。こっちも1つ目のビルは問題ないよ・・・ん？」

公園から一番近いホテルの前で、ひよこは何かを見つけたようだ。

「ひよこ君、何かあったのかい？」

「ちょっと様子見てくる」

12時56分。公園付近のホテル前。

黒いタキシードを着た男がホテルに入ろうとしている。
手には大きめのチェロのケースを持ち、急いでいるように見えた。
そのケースの中身がチェロであり、男が楽団員であれば、ひよこは
見逃していただろう。

「すみません。ちょっといいですか？」

「何だ君は。私は急いでいる」

男が応じる。

「演説はじまりますもんね。間に合わなかったら大変だ」

「そうだな。じゃあな」

「まあまあ。時間を聞こうと思ひまして」

「12時3分前だ。もういいか」

「あと一つだけよろしいですかね？」

「・・・何だ」

男が訝しげにひよこを眺める。

「レミントンM700。いいですよー。ライフルはボルトアクションに限る」

「・・・何を言ってるんだ？」

「独り言ですよ。ああそうだ、そのケース、開けてみてよろしいですか？楽器好きなんですよ」

「ふざけるな。私はもう行くぞ」

男がホテルに入ろうとするのを強引に引き止める。

周囲を確認すると、既に何人かの警官がこちらに向かっているようだった。

「あと懐のワルサーPPKSですが、ちゃんと整備しましょうね。銃に裏切られますよ？」

「くそっ・・・!!」

男は懐からサイレンサーのついたワルサーを取り出し、迷い無く発砲する。

ひよこはそれを1発左腕で受け、男に詰め寄る。次弾が発射されることはなかった。

「弾詰まりだと!？」

「だから整備してやれつつってんだよ。そりゃ銃も機嫌損ねるわ」
ひよこが顎に右ストレートを放つと、男の体から力が抜けた。

「馬鹿野郎を1人確保。やっぱりスナイパー居るみたいだわ」

「良くやったよひよこ君。他のビルはどうだい？」

「まだかかりそう。ちょっと急がないとまずいね。ヤス、頼む」

「おオよ」

13時00分。屋上。

ヤスは双眼鏡で、優輝はライフルについたスコープで、それぞれが近辺のビルを警戒していた。

「ヤスどうだ。見えるか？」

「演説が始まったみたいだなア。まだ問題はねえが」

ヤスは広場からビルに視線を戻す。

「さあて、見つけたぜエ。10時方向、最上階の奥から2番目に1人だ」

「了解・・・っと、居たな」

ビルの窓が四角く切り取られ、そこから銃口が覗いていた。優輝はPSG-1を構えなおすと、

「殺すには角度が足りないな。スマートじゃないが」

発砲する。窓から覗く銃口に向けて。

発射された弾は、まるで吸い寄せられるように銃口に直撃した。

「ヒュウ、流石だなあ優輝。シモヘイへも真ッ青だ」

「スコープ覗いてるけどな。ここから10時の方向のビルの10階に2課を突入させる」

「了解だ。2人とも引き続き警戒を頼むよ」

13時02分。公園広場脇。

公衆トイレのすぐ横で、直毅は煙草を吸っていた。

このあたりは広場に収まりきらなかった人たちがぼつぼつと立っているだけである。

「演説なんてテレビ通して聞きゃいいのにご苦労さんだなあ」

「なあ、あんたもそう思わねえか？」

直毅は誰にでもなく話しかける。

「え？すみません、もう一度言っていただけですか」

右斜め前の男がそれに反応した。

「あー、いや悪いな。聞き入ってる奴に吐くセリフじゃなかったわ」

「はい」

男は気にも留めていない様子だ。

「んー？」

直毅は額に人差し指を当て考え込み、思いついたように指を鳴らす。

「あーわかった。ピンときた。お前確保な。なんか怪しいわ」

「え？」

男が左を向くと同時、2人の私服警官に取り押さえられる。

「ちよ、なんなんですかいきなり!？」

「お前聞き入ってたの、演説じゃなくて通信かなんかだろ。あと独り言のつもりだったんだけどなあ。演説まともに聞いてたらいちいち知らん奴の言葉に反応しねえよな？まあ全部勘だからよお。悪いな」

「出鱈目だ・・・」

男は力なくそう呟くと、大人しく連行されていった。

後の調べでわかった事だが、この男はポケットに手榴弾を入れており、演台に投げこむタイミングを見計らっていたとの事だった。

13時05分。屋上。

「優輝、ヤス。そこから2時方向のビルの上から3番目、左から・
・4番目」

「見えてンぜえ。優輝」

「応よ」

優輝はライフルを構える男の額に向けて銃弾を放つ。

男と目が合った気がした。

直後窓ガラスにヒビが入り、血が付着する。

「命中だ。2課より1課の方が近いな。処理を頼む」

優輝は言い終わると、再びスコープを覗き込む。

「これで周辺は安泰かアひよこ？」

ヤスが肩を鳴らし、凝り固まった腰を捻る。ついでに周囲をもう一度見渡す。

公園の反対側に高いビルが建っている以外、周りには何も無い。いい景色だ。

その一際高いビルの屋上で、何かが光に反射した。

「うん。ここいら一帯は問題なし。俺は戻ってぐんま達のサポートを」

瞬間、ヤスの頭にイメージが過ぎる。

このままの姿勢だと、優輝は確実に、

「ツチ、間に合わねえ!!」

ヤスは突然、横にいる優輝を蹴り飛ばした。

13時07分。

いきなり横っ腹を蹴られた優輝は、体をくの字に曲げてのたうつ。

「お前つ・・・いきなり何を」

「転がれ!!」

優輝は状況を理解し横に転がり、屋上入り口の陰に隠れる。

元いた場所を見ると、コンクリートが2箇所抉れていた。

「ケツにいやがった!糞ツタレがア!!」

ヤスはPSG-1を持ち、立って構える。

しかし発砲を許す間も無く何発も弾が飛んでくる。

「踊ってやるから付き合えよ!!ホラ当ててみろってんだよオ!!」

！」

ヤスは狙撃手を狙いつつライフルを構え、銃弾を避ける。発砲はない。

ヤスを狙った弾の全てが地面に突き刺さり、その度にコンクリート片が舞い上がった。

「優輝、そっちの使え！」

「OK、持ちこたえてくれよ」

「問題ねエよ。当たる方が難しい」

そう言いながらヤスは弾を次々と避ける。

ヤスには未来が見えている。いかなる速度で弾を撃ち出したとしても、それらの撃ち出されるタイミングから当たる場所までわかる者にとって避けることは造作も無かった。

13時09分。

「重たい思いして持ってきた甲斐があつたもんだな」

優輝は一際大きなライフルを構える。M82、バレットライフル。それを軽々と持ち上げ、陰から飛び出した。

「誤射はしない。俺が狙うのは、お前の銃だ」

公園から1.5km離れたこのビル、さらに1km離れたビル

から狙撃しているようだ。

そのビルの屋上に狙撃手を発見する。

スコープを覗き、構える。手は震えない。呼吸を止める必要すらない程に。

「スナイパーというのは、一撃で仕留めてこそだ」

放たれた弾丸は、狙撃手のライフルと、ついでに頭と右半身を引き裂いた。

13時10分。同じく屋上。

「ジョニー、恐らく最後のスナイパーを仕留めた。後ろのビルに潜んでいたみたいだ」

「お疲れ様。もう演説は終わるけど、まだ気を抜いちゃダメだよ」

「わあってんよ。ああ疲れた」

ヤスはうんざりした様に煙草に火を点け、双眼鏡を覗きなおす。

「なあヤス、最後に殺したスナイパーの事だが」

「ああ、妙だな」

「あそこまで離れていると、普通の人間なら正確な射撃はほぼ不可

能だ」

広場からあのビルまで、3 km 近く離れている。通常のライフルならば有効射程はせいぜい1 km。それ以上は精度が落ちる。

余程特殊なものを使わない限り、あの位置から広場を狙撃するのは無理があつた。

「まあ今考えても答え出ねえかな。警戒しようや」

「ああ・・・」

何か引つかつた。

優輝はこれまでの狙撃手が居たポイントを思い返す。

広場から最も近い2箇所に狙撃手は無し。他2箇所に1人ずつ。そして明らかに遠い場所に1人。

その引つかかりを残したまま、優輝は演説が終わるのを見届けていた。

13時15分。公園広場内。

会場では拍手が巻き起こっている。

坂上議員は演説を終え、得意満面で拍手を浴びていた。

「・・・最後まで異常無し、だった」

「こおっちも」

「あのおっさん、台本読んだだけでどや顔しやがってよお」

「まあまあ直毅君。残りの3人は大丈夫そうかい？」

「問題ねエよ」

「異常は見当たらないな」

「異常無ーし。走り続きたったから疲れたわあ」

「よし、みんな本当にお疲れ様。これで・・・」

「待って」

武信の声色が変わる。

「坂上の様子がおかしい」

坂上はいつになっても壇上から降りることは無かった。拍手もまばらになった頃、彼は再びマイクを握る。

「この国は腐敗してしまった。取り返しの付かない程に」

会場からどよめきが起こる。

「国民が悪いと決め付ける政府、政府が悪いと言い張る国民」

坂上は続ける。

「滑稽だとは思わないか。政治家は見え透いた嘘を吐き、それを見抜けない一部の愚かな国民が、騙されているだけだというのに」

「おいおい、トチ狂ったかおっさん」

直毅が苦笑いを浮かべる程、先程の彼の発言と正反対のことを口走る。

既に報道のカメラは止められていた。規制が入ったのだろうか。

「政治家は汚れきっている。特定企業と癒着し、国民に害を与えている」

「国民はどつだ。自らに降りかかる害を受けながら、懸命に生きて
いる。その一方で、悪事を働きながら、甘い蜜を吸う者もいる。善
良な者が損をして、悪に染まった者ばかり得する。私はそれが許せ
ない」

「政治家やってるヤツが何言ってるんだ。偽善者かよ」

「しかし、この発言の変わりようはおかしい。ジョニー」

「調べてるよ。ただ見た限り、特別変わったことは無いようだ」

変わったことは無い。ジョニーはそう言った。

しかし、目に見えて変わったことが、ただ一つだけあった。
会場に居る誰もが、その言葉を黙って聞いていたのだ。

「更に能力者という存在が、それに拍車をかけている」

「人は生まれながらにして不平等だ。身分の差、育つ環境の差、色
々ある」

「今まではそれを努力で埋めてきた。しかし、能力の有無、優劣に
より、その機会は失われた。働くのに有利な能力を持った者が優先
され、他は二の次だ」

「当然だろ。能力者はそれなりに代償払ってるんだ」

ひよこが冷たく言い放つ。能力者には誰でもなることが出来る。ただし能力の覚醒には、人それぞれに条件があった。

「そのような不平等な状況にも負けず、我慢して必死に今を生きる者達よ。もう苦勞を抱え込んで生きる必要は無い」

「今こそ、革命の時だ。武器を持ち、この印を掲げ、虐げられてきた環境を一変しようではないか」

坂上が紙を掲げる。

その紙には、ダーツボードに、十字架の描かれたマークが印刷されていた。

「こいつ、騎士の1人か!？」

ひよこが坂上の元へ走り出す。

しかし人の波を掻き分けて進むには、少々の時間を要する。

「まさか・・・坂上議員が・・・」

ジヨニーは驚いたように呟く。

「ただのアナキストとは、考え難いな」

何か考え込む優輝。

「なあになあにい」

状況についていけないぐんま。

「何か・・・何かおかしい・・・」

武信は思考する。

公開演説。脅迫。緊急招集。あからさまな不審人物。
遠くのスナイパー。手の平返し演説。スポンサー。

（あのおっさん、台本読んだだけでどや顔しやがってよお）

直毅の言葉を思い返す。

彼は、演説の時、どこを向いて話していた？

「そしてこの演説が革命への第一歩となることを、私は願っている」

「以上だ。私は、舞台から退場させてもらおうとしよう」

坂上は、前を見てはつきりと話していた。
その耳につけた、インカムを頼りにして。

「・・・そうだ」

武信が顔を上げる。

「あいつは騎士じゃない！！優輝！！坂上の手を

言っが、もう遅い。

会場の静寂が、悲鳴へと変わった。

同日、19時12分。公園近くのホテルの一室。

テレビからニュースが流れる。

『今日の午後1時25分、公開演説中だった坂上利章議員が、演説

終了と同時に

拳銃で自殺を図りました。坂上議員は頭部を銃弾が貫通しており、病院に搬送中の救急車内で死亡が確認され

」

アナウンサーが言い終わる前に、テレビを消す。

「演説は大成功でしたね、坂上議員」

男は薄く笑いながら、坂上から聞き出した番号に電話をかけた。

「今日の演出は気に入ってもらえたかな？」

「完全に、してやられたね」

ジヨニーは中指で眼鏡をなおす。

坂上が拳銃で自らの頭を撃ち抜いてから、7課会議室には敗北ムードが漂っていた。

「俺があと少し早く止めてりゃなー・・・」

ひよこが悔しそうに唸る。

「シュコーまああれはシュコーなかなかシュコー予測できないだろシュコー」

「直毅、ガスマスクは外そうな・・・」

優輝の声にも元気が無い。

「お、おう・・・」

「ツチ、辛気臭えンだよオマエら。コーヒー買ってくる」

ヤスが会議室を出ると、

「おれもおれもお」

ぐんまもそれに続く。

「……今僕達に出来るのは、今日の反省じゃないよね？」

武信が真っ直ぐな瞳でジョニーを見つめる。

「そうだね。起きた事を悔やむより、どうしてそれが起こったかを考えるべきだ」

「まあ、坂上も操られてたと考えるのが妥当だろうねー」

「そうだな。武信が言っていたように、インカムから声を聞いてその指示通りに動いた、というので間違いないだろう」

優輝が結論づけた。

「まだよくわかってねえ事あるよなあ？はじめから自殺すんなら、わざわざ俺等と呼ぶ必要も無え」

「……そこなんだけど」

武信が何か言おうとした直後、電話が鳴った。ジョニーが受話器を取る。

「もしもし。こちらは……」

『今日の演出は気に入ってもらえたかな？』

「・・・君が電話の主だね？」

ジョニーが電話の相手に問いかける。

『質問に質問で返すのは感心出来ないな。まあ、そう呼んで貰っても差し支えない』

「何故この番号を知っている？君達の目的は何なんだい？」

『まあそう焦ることもあるまい』

電話の主は溜息をつき、

『とりあえずその懐に仕舞っている銃で、自分の頭を撃ち抜いてみてはどうか？』

ジョニーはその『声』を聞くと、懐からリボルバーを取り出し、自分のこめかみに押し付けた。

会議室に、銃声が響き渡った。

銃声は2つ。1つはジョニーのもの。

そしてもう1つは、

「なあになあにい。頭なんか撃つたら部屋が汚れちゃうよお」

ぐんまのモーゼルM1916。その銃口は、ジョニーが引き金を引く直前、ジョニーの銃に向けられたものだった。

「……っはあ、はあ、ぐんま君、助かったよ……」

「我不需要謝謝。ホヒヒー」

取って付けたような中国語を放ち、ぐんまは自分の席へと戻る。

「オイオイやらかしてくれんなあ。うれしいね全く」

ヤスも着席し、7課全員が揃う。

「スピーカーに、切り替えるよ……」

額に脂汗を浮かべたジョニーがスイッチを押す。

『今のはほんの挨拶がわりさ。悪く思わないでくれ』

男の声だった。30代前半か、それよりもっと若いか。

『全体通話に切り替えたようだな。まあその方が懸命だろう。電話とはいえ、一対一だとさすがに効きすぎる』

「おしゃべりな野郎だな teme。ウチに何の用だあ？」

『君達は無駄話が嫌いかな？友好を深める事も重要だと思うが』

「……僕が話すよ。皆は少しだけ静かにしてて」

「……こんばんわ、電話の主さん」

武信が電話の主に応じる。

『ふむ、話好きがいてくれて助かるよ。暇を持て余していてね』

「……電話の主さんは、今日の坂上事件を計画して実行した人で合ってるのかな？」

『その通りだ。あと電話の主では長かろう。木戸、とでも呼んでくれ』

「……それじゃあ木戸さん。率直に聞くけど、あなたの能力はあまり、融通が利かないよね？」

『ふむ。なぜそう思うかね』

「だって、会場みんなは黙って話を聞いていたけど、僕達は坂上の異変に気づいたから。あなたはさつき、全体通話に切り替えたほうが懸命だ、と言ったよね？一対一では効きすぎる、とも言った。それはつまり、大人数に対しては能力の効果が薄れるって事」

『面白い。続けてくれ』

一区切り置き、武信は続ける。

「それを裏付ける根拠はもう一つ。先に行った15分間の演説。本来の目的だけで言うなら、あの演説は不必要だと思う。なら、何故15分も関係ない話を続けたのか。それはきつと、公園に居る人た

ちに、話を聞く、話を受け入れてもらうという土壌作りのため。だからあんなアナーキーな演説も皆黙って聞いていたし、はじめから聞いていなかった僕達は、異変に気がついた。尤も、ちょっとだけ間に合わなかったけれど」

『たいした洞察力だ。君は頭がいい』

木戸は感心した様子で、

『確かにその通りだ。私の声は、多人数、そして聞く気がない者にとっては効果が薄れる。更に今回は電話で、更に坂上を通してだからな。余計なフィルターを通す分、気を遣わなければならなかった。一対多数でも確実な効果を得られるかという実験さ』

「一対一なら絶対言うこと聞くツてか。詐欺師にでもなりやあいい」
ヤスが悪態を吐く。

「……これは推測ですが、声を発した者が死んだりすると、声の効果は……」

『切れる。その実験も兼ねての演説だった』

「だからあの場で暴動が起きなかったわけか……それと、一つわからない事があります」

『何だ？機嫌がいいから答えよう』

「……僕達を呼んだ訳です。実験だけなら、わざわざ邪魔者を呼んだりしない」

『君達の勧誘のためさ。スナイパー他を配置したのもそれが理由だ。彼等は元々坂上ではなく、坂上の指示で君達を狙っていた。それら全てを排除した君達には、こちら側につく資格がある。この電話もそれが目的だ』

『君達が我々に協力してくれれば、この国を立て直せる。どうだね。我々と一緒に、この国を変えていく気はないか』

「本気で言っているのなら、まずやり方を改めるべきだったねー」

「こいつは詐欺師じゃねえな。政治家やれよお前。つーか実は政治家か？」

「・・・ごめんなさい。犯罪者に加担することは出来ません」

『だろう、な。はじめからわかっていたとは言え、君達は実に、消すのが勿体無い。協力する姿勢が無いのであれば、脅威となる存在は排除しなければなるまい』

「宣戦布告か。こちらとしても、お前を捕まえて色々聞きたいところだ」

『近々、私はもっと大きな事件を起こす。君達が止められるか、今から楽しみだ』

「・・・止めます。今度は、絶対に」

『なかなか有意義な時間になったよ。それではさようなら、反逆者達』

通話は、そこで終わった。

「よくやった武信。ジョニー、逆探知は？」

「公園前のホテルからみたいだ。既に2課が向かってる」

「まあ、もぬけの殻だろうなア」

ヤスが煙草に火を点ける。

「なににせよ、忙しくなりそうだ」

「円卓の騎士壊滅のチャンスだ。ぬかるなよ」

「まあ、動かれる前に尻尾つかみたいねー」

「いい加減ニートには飽き飽きだぜえ。そろそろ俺の出番だろうしなあ」

「お祭りなんだけどおホッヒヒー」

「……ぐんまって緊張感無いよね」

「さて、僕達は今の情報を頼りに、色々洗おうか」

時刻は既に21時を回っているが、7課の夜は終わらない。

c a s e . 0 3 e n d

演説から、既に3日経った。

木戸が居たらしきホテルは案の定もぬけの殻で、手がかりは何一つ無かった。

そこからは人海戦術で、演説を聞きに来た連中を片っ端から取調べ、日財に関する情報も再び洗い直し、今に至る。

1ヶ月程前から、日財の社員である木戸優一という男が会社に出勤しなくなっていること。

木戸の口ぶりから、今日の夜日本に帰国する総理が狙われる可能性が高いこと。

この2点以外、木戸に関する情報はほとんど得られていない。

坂上の関係者によると、演説の1週間程前からよく電話をかけるようになったらしいが、電話の内容は聞いていないし、不審な行動も無かったとの事だった。

捕まえた傭兵達を尋問しても、皆が皆「坂上に雇われた」と証言するだけであった。

結局、木戸の後手に回るしかない。そんな現状に苛立ちを覚える。

そして今現在、俺の前には、信じ難い光景が広がっていた。

「くそー、どうなってんだよこいつら！死なないぞ！なんなんだよ
！！」

ひよこが走りながら狼狽している。

「知るかよ。今は生き残ることだけ考えんぞ」

ヤスは振り返りながらブレッタを乱射し、再び走る。

「無駄弾使つなよお？頭だけ狙つとけ」

直毅は弾の無くなったショットガンを捨て、AKを取り出した。

「なあにこいつらあ。足はあやいんだけどお！？」

「いいから走れぐんま！追いつかれたら終わりだぞ！！」

4人は市街地をどうにか抜け、都心部へと続く工業地帯へと入った。

「行き止まりかあ。こいつあ終わったかもなあ」

「おゝいマジかよお。逃げられんねえだろお」

路地裏に追い詰められた4人は、異形の者と対峙する。

そいつらは体の大部分が腐敗し、目が血走り、皆一様に口を開けながら襲い掛かってくる。

「見る、あそこに階段あるぞ！！」

ひよこの指差す先に、別の建物へと通じているらしい階段があった。しかしそこに行くには3M近いフェンスを越えなければならぬ。一人では無理な高さだ。

「つち、俺の肩使いな」

直毅はフェンスに両手をつき、3人を登らせる。

「おい直毅はどうすんだよ!？」

「俺は・・・そうだなあ、やれるだけやってみっか」

既に弾も尽きた直毅は、路地にあつた木材を手に取り構える。

「馬鹿一緒に行くぞ!はやくこつち来い!」

「時間稼ぎにでもなりやいいんだ。おら、いいから先行け」

「はあやく行くよひよこお」

ヤスとぐんまが階段に走り出す。

「くそつ・・・死ぬなよ、直毅」

「お互いなあ」

「さてえ、テメエ等の脳天力チ割る準備は整ったぜえ」

もう一度木材を握りなおすと、直毅は異形の者の群れの中へと消え

ていった。

「ありや直毅死んだなあ」

「手向けだ。取っときな」

ヤスは振り返ると、群れの中へと手榴弾を投げ込む。

手榴弾は群れの一部と、瀕死の状態で持ちこたえていた直毅とを、フェンスごと吹き飛ばした。

「馬鹿野朗フェンス壊すなヤス！」

「ゾンビきてるう！ヤスはあやくう！！」

「うるたえんな。走りや間に合う」

「お前等俺にトドメ刺したのはスルーかよお・・・」

コーラを買いに下の階まで行き、会議室に戻ってきたらこの有様だ。会議室のスクリーンには、ゾンビを蹴散らしながら進んでいく3人の男女が映し出されている。

俺は無言でゲーム機に近づき、その電源を消した。

「あ、おい優輝！今ボス戦直前だったのに！！」

「オマエ見てわかんねえのか。相当いいところだったろおが」

「俺の犠牲……」

「なあにやってるう」

各々が俺に向かって抗議の声を上げている。

しかしこの場では俺のたった行動を咎める権利のある者は居ない筈だ。

「こっちの台詞だ。今は仕事中で、ついでに言うと言警戒状態だ。仕事中にゲームを堂々とやる奴が居るか」

こいつら足りないのは忍耐仕事意識焦り危機感真面目さ誠実さ、そして何より緊張感が足りない。

「でも実際俺等はお留守番なんだしよお。もう調べることも無いしな」

「適度な？休憩も？必要なんじゃないんですかねえ？」

個人的にもものすごく直毅を殴りたかったが、ここは我慢する。

「確かに休憩は大事だ。だがゲームを始めるのは休憩とは言えないだろう」

「ちげえんだよ」

「ん、どうしたぐんま」

「養ってたんだよ」

「何をだ」

「判断力」

最早言い訳にすらなっていない。

「よしわかった。判断力が養われているかテストしよう」

「なあんでもこい」

「俺は今、かなり頭にきている」

「みればわかるよおホヒヒ」

「そして俺の内ポケットには、弾の入った銃が」

「すいませんでした」

「ふん。確かにいい判断力だ」

俺は少し笑うと、買ってきたコーラを皆に配る。

いかん。こいつのペースに流されている。

「とにかく、だ。俺達もいつ呼び出しがかかるかわからない」

現在空港にはジョニーと武信、それに1課と3課が待機している。俺達は木戸が別の動きを見せた時の為、本部で調査がてら待機だ。仕切り役のジョニーが居ない分、俺が頑張らないとまずい。

「いつでも出勤できる様に、各自準備しておけ」

「なーんかもう出勤要請かかるみたいよ？」

ひよこがそう言った直後、会議室のドアが開かれる。

「ほ、報告します・・・」

息も切れ切れに、4課の1人が口を開く。

「内線使えばいいのにご苦労さんだなあ・・・あ、ゲームすんのに線抜いてたか」

直毅がとんでもない事を口走った気がするが、今はそれどころではない。

「何があつた」

「町外れの指定能力研究施設で、人質を取った立て籠もり事件が発生しました」

指定能力研究施設。

本来人間に備わっている、本質的な力。

それらは普段はリミッターがかけられていて、自分が危機的状況に陥った場合、

限定的に開放される。所謂火事場のクソ力だ。

そのリミッターが外れればなしになってしまった者、または意識的

に外せる者。

それらを総称して、この国では能力者と呼んでいる。

その能力者の中でも、更に何かに特化した人間。それを指定能力者と言つ。

具体的には、普通の人間の範疇を超える力を行使できる存在。

指定能力者自体数が少なく、発現の条件も曖昧だ。

その力を発現させる条件を研究してるのが指定能力研究施設、だったか。

あまりこういう内容は得意じゃないな。武信やひよこの方が詳しくうだ。

「人質の数はわかってるん？」

「恐らく15人。その時間まで施設に残っていた人間全員です。2課が向かっていますが、そちらに最終的な指示を頂きたい、と」

「つーかただの立て籠もりなら適当に突入させて終わらせちまえっつーの。なんかまずい事でもあんのかあ？」

直毅が欠伸しながら質問を投げる。やはり緊張感が足りていない。

言いよどむ。

「犯行グループが、自らを円卓の騎士と名乗っています」

「だろおとは思ってたけどなあ。おいジョニー。どうすんだ」

少し遅れて、スピーカーからジョニーの声が響く。

『うーん・・・さすがにこっちの人員は回せないし、君達を全員回すわけにもいかないし・・・』

「こっちで二手に分かれるのがいいんじゃない？立て籠もり組のほうと、待機組のほうにさ」

ひよこが提案すると、不意に4課の1人がインカム越しに何かを話し始めた。

かなり焦燥しているようだ。堪らず声を掛ける。

「どうした、動きがあったのか？」

「はい。犯人グループの要求は、現在収容中の囚人の解放。要求が聞き入れられない場合、人質ごと研究所を爆破する、と言っています」

「それは急がないとだねー。とりあえず立て籠もりなら、俺確定だよね？」

「あとは俺でいいかあ。怪我人増やすのもアレだしよあ」

ひよこと直毅がそれぞれ立候補し、班決めが終わる。

こういうやりとりをしていると、まだ平和だった学生時代を思い出してしまう。

「さて行くかあ。運転は任せな」

「頼むから着く前に事故るなよー・・・」

「一応ここから指示を飛ばせるようにしておく。何かあったら連絡

しろ

「あいよ。ちょっとくら行ってくるわ」

俺はジョニーの代わりに2人を送り出し、会議室へと戻った。

012 - 季節はずれの蛍1

3月4日。17時半頃。施設内警備室。

「施設外周および全区画、異常ありません」

『そうか。引き続き外の動きを警戒しておけ』

「了解しました・・・ん？」

『どうした』

「黒いコートを着た男がこっちに・・・」

直後。施設内の電気系統は、一斉に眠りに就いた。

男2人を乗せた黒いセダンは、夕暮れ時の街中を疾走する。

街中は学生が多く、スーツ姿の人たちもちらほら見える。交差点は信号待ちの人で溢れているし、バス停も混み合っている。要するに、帰宅ラッシュ真っ最中なのだ。

車道の交通量も少なくない中、黒いセダンは疾走する。車の間を縫うようにして。

「いやーゴキゲンだねえ。ハイハイ」

法定速度を軽く超えたセダンを操る直毅は、かなりの上機嫌だ。

「街中なんだからスピード落とせよー・・・」

ひよこはカーオーディオを操作し、ジャズ調の落ち着いた曲をかける。

直毅は口で言ったところで車のスピードを緩めない。高ぶった気分を落ち着かせるためには、こういった曲を流すのが一番なのだ。

それを裏付けるように、車は次第に減速を始める。

「ジャズ聴くと煙草吸いたくなるよねー」

「お前はいつも吸ってんだろ。火借りるぞ」

「あーごめん、オイル切れたっばい」

ひよこは何回かライターの点火を試みるが、やはり火は点かなかった。

「時にひよこちゃんよお」

直毅が正面を向きながら。

「ちゃん付けはやめね。どした？」

ひよこに問う。

「・・・畏だと、思うか？」

「うーん、畏っていうかねー。陽動つての？俺たちを分散させて、一人ずつ消していく算段じゃないかな？」

木戸は、脅威となる人間を消す、と言っていた。

彼の能力の特性上、1人で居るところに自害を誘発するような命令をするのが、最も手早く効率的に標的を仕留められる。

それを避けるために7課メンバーは、木戸からの電話以後、極力2

人以上での行動を心がけていた。

「まあ、俺等個人の携帯番号でも手に入れない限りは、一対一で会話することなんとそう無えだろうしなあ」

「用心するに越したことは無いけどねー。さて、そろそろ着くんじやないん？」

既に街中を抜け、山道に入っていた。ダッシュボード上の煙草が小刻みに揺れる。

「よくもまあこんな辺鄙な場所に建てるもんだ」

「辺鄙な場所だからこそ、じゃないの？いかにも怪しい研究やりますよーって感じですよ」

舗装の行き届いていない道路を越え、木々に遮られていた視界が開ける。小高い丘の上に、それは建っていた。

研究所の外観は、そんないかにもな雰囲気漂わせていない。一見するとデザイナーズマンションと見紛う佇まいである。2階建ての造りに、バルコニーまであるようだ。

周りを取り囲むように、パトカーを含む車が計8台止められていた。そこから更に離れた場所に駐車し、2人は研究所へと向かう。

「7課の増援ですよー。状況はどんなかんじですかい？」

間延びしたひよこの声に、コートを羽織った中年警官が答える。

「芳しくないですね。既に二人、人質が殺されています」

「・・・あ？お前等はそれを黙って見てただけか？無能共」

直毅の声が荒くなる。

「し、しかし、囚人の解放ともなると、時間がかかりまして」

「嘘でもいいから解放したつつつときゃあ、殺されなかったんじゃねえのかよ」

声に凄みが増す。

「おい直毅、攻撃する相手が違う」

「うち、まあいい。ひよこ、中の様子はどうなってる」

ひよこは直毅を宥めると、すぐさま力を使い、建物内を探る。

「ちよいとお待ちを。・・・うーん、クリンコフ抱えた奴らが七人と、座らされてる人達が十三人。一部屋にまとめられてるね。その部屋の前にも銃持った奴が一人いる」

「あ、そつだ。監視カメラとかついてますここ？」

警官に尋ねる。

「付いてます。これが見取り図ですが」

ひよこは地図を受け取りにこやかに笑うと、

「いや、配置が知りたいとかじゃないですよ。2課の皆さん、悪いけどお願いしますねー」

2課に指示を飛ばす。

「糞野朗共は八人かあ。そんだけわかりや充分だ」

直毅はP90を構え、入り口へと歩いていく。その背中に向かって、警官が声をかけた。

「お、おい！まだ中には人質が・・・」

「全員生きた状態で助け出してやんよ。人質は、だがなあ」

直毅は語尾を上ずらせ、歩みを早める。

「彼一人で本当に大丈夫なんですか・・・？」

直毅に声を掛けた警官が、ひよこに話しかける。

「あ、2課から聞いてないですか？あの人は単独じゃないと、自由に動けないんですよ」

「いえ、そうではなくて・・・銃を持った数人を相手に、人質全員

無傷で救出などと、普通じゃ考えられません。ましてやそれを単独でなんて」

「うーん、ちよつと心外だなあ」

ひよこは苦笑し、

「俺たちは普通じゃないんですよ。有り得ない事を起こすのが当たり前で、常識外れが正常なんです。まあ、少し待って貰えば判りますよ」

警官はそれ以上、何も言えなかった。

「ひよこちゃんよお。ナビは任せるぜえ」

「ちゃん付けやめろつての。まあ任せるよ・・・正面に標的無し。奥の部屋に二人。階段に二人。あとは全部二階だ・・・あー、駄目だバレたわこれ。奥の奴等がこつち来てる」

「オーケー。Lock・n・load・行くぜ糞共」

P90をコッキングすると、直毅は正面から堂々と建物に侵入した。

夕陽の射し込む薄暗いロビーを抜け、直毅は2階へと続く階段に向かうため、廊下を歩く。

『そのまま進んだ先にT字路あるからね。そこを左』

ひよこがナビゲートし、その通りに歩いていく。

廊下はロビーよりいくらか明るかったが、カーテンのようなもので窓が覆われているため、日中よりは見通しが悪い。

『そこから二人。両方こつち来てるね。接触まで三秒くらい』

耳を澄ますと、T字路の左側から2人分の足音が聞こえてくる。

「了解つと」

迷い無く、左に曲がる。

確かにクリンコフを持った二人組が、こつちに向かってくる。直毅はその横を堂々と通り抜け、背後から声を掛ける。

「おいおい、顔パスとは俺もVIP待遇だなあ」

振り向く暇も与えず、背中に向けて銃弾を浴びせる。

「んーん。yummy」

銃口から立ち上る煙に息を吹きかけ、直毅は再び歩き出す。

『無駄口叩いてないで早く階段向かって』

「わあつたよ。んで次は？」

『しばらく歩いて突き当りを右。その次の突き当たりの左に階段だ』

「へいへい」

施設の外では、いつでも突入できるように警官隊が待機している。それを一瞥し、ひよこは煙草を吸っている。ライターは2課から借りた。

『テメエ悠々と煙草ふかしてんじゃねえぞひよこお』

「吸ってた方が集中できるんだって。今は作戦第一だからね。ホラ早く早く」

『これだからバックアップはよお・・・っと、居やがるなあ』

直毅が立ち止まる。

「階段中腹に一人、二階あがったところに一人だねー」

『仲間二人やられて見に行かないあたり、薄情な奴等だなあおい』

「見に来てたら来てたで、馬鹿な奴等だぐへへー、とか言うんだろ？」

『よくわかってるじゃねえか。終わったぞ』

会話している最中にも、直毅は二人を掃除した。

二階に上がり廊下を確認する。

ひよこの話によれば、この先の管制室に一人、その扉の前に一人いるはずだ。

「ここから先はスピード勝負だ。サッと行くぞサッと」

『そこは貴方様の手腕にかかっていまっせ。人質部屋前の奴はまだ動き無いね』

「なら良かったぜ。さて行くか」

肩を鳴らし、直毅は管制室に向けて一直線に走り出す。少し走って左に曲がり、突き当たりを右へ。

曲がる前に、左側の扉の前で無線機に向かって話している大柄な男のこめかみを撃ち抜き、そのまま人質の捕らわれている部屋へと向かう。ここからはそのまま一直線に走り、ロビーを抜けたすぐ先が目的地だ。

『直毅ストップストップ！部屋から一人出てきてた！！』

「遅えよ。見つかったよ」

見ると、ロビーの真ん中に一人、銃を構えた男が待ち構えていた。

「お前が下の奴等をやったのか」

声に怒りが籠っている。その怒気は、離れていても伝わる程だった。

「聞くまでもねえだろ？まあとりあえず、死んどけ」

間髪入れずにP90を乱射する。

しかし、放たれた計38発の弾丸は、1つとして男を捉えることは無かった。

「ああ？あーあれかお前。今流行りの弾の軌道見える系男子か」

銃弾を全て避けきつた男は何も言わず、腰だめに構えたモスバーグM590の引き金を引く。

「シヨットガン！？聞いてねえんだけどお！？」

直毅は咄嗟に目の前にあつたテーブルを蹴り上げ、散弾の盾にする。そのまま横に立て掛けられていた長机を男に投げつけるが、これもあっさりと避けられる。

一瞬で距離を詰められ、今まさにM590の引き金が引かれる直前、
「タイムタイム！マジでそんなんで撃たれたら流石の俺もミンチだ
つて！」

男は聞く耳を持たず、そのまま直毅の頭に向けて発砲する。
放った弾丸は、壁に穴を開けるに留まった。

「愉快だねえお前」

後ろから、声がある。先程頭を吹き飛ばす予定だった奴の声が。
男は意識を集中させ、振り返りざまにM590を撃つ。しかし、ま
たしても散弾が直毅をミンチにすることは無かった。

アドレナリンの意図的な過剰分泌によりスローモーシヨンになった
景色の中、男は周囲を見回す。直毅の姿は見受けられない。

「突入された。人質を全員始末しろ」

無線機に指示を飛ばすが、返答は無かった。

「おい、どうした!？」

「いやあほんと愉快だわ。いい加減気づけよ」

再び周囲を見回す。打ち抜いたテーブルも、避けたはずの長机も、
全て元の位置に戻っていた。
そして目の前には、P90を構えた直毅。

「貴様つ……時間を操作して……？」

「ハツハア！！んなわけねえつての！！」

直毅は左手で顔を覆い、笑っている。その間にも、銃口は男を狙っている。

男は既に発砲する気も無くしていた。こいつには絶対勝てない。本能がそう告げている。

「一つだけ教えてやらあ」

「能力者つてのが認知されてから、メディアで超能力やら手品の特集しなくなったんだわ。どうしてだと思っ？」

男は気づく。机は元からそこにあって、動かされていないことに。自分の放った散弾が、全て壁と床にはか着弾していなかったことに、気づく。

「まあつまりは、そういう事だ」

答えを聞く前に、直毅のP90は、マガジンに残っている弾丸全てを吐き出した。

『危なそうな奴等は全部始末したぞ。警察の皆々様方に突入の命令でも下せ』

1 本目の煙草を吸い終わる前に、直毅から任務完了の報告を受ける。

「お疲れーい。あ、皆さんもう入っても大丈夫みたいですよ？」

煙草の火を消しながら、ひよこは警官隊に指示を出す。

『ああ、それと』

「ん？」

『管制室に閉じ込められてるマヌケ一人居るから。そっちは何とかしといてくれや』

ひよこは再び意識を集中させ、2階を探る。

管制室の前に死体が1つ、ドアにもたれかかるようにして倒れている。

「成程、つつかえ棒的なアレね」

『まあ偶然だけどなあ。ああ疲れた』

インカム越しにため息が聞こえ、通信が切れた。

そういえば、と思い、ひよこは2課の一人に尋ねる。

「すいませーん。犯人の要求って、囚人の解放でしたよね？」

「はい。それが、何か？」

「具体的に誰を解放して欲しかったのかなーと」

「ああ、報告していませんでしたね。開放を要求された囚人は全部で九人。名前は……」

ひよこは読み上げられた名前を確認していく。どれも殺人犯やテロリストの名前だったが、そのうちの一人に、聞き覚えがあった。

「どうしてここでその名前が出てくる……奴等の目的は陽動じゃないのか……？」

ぶつぶつと独り言をつぶやくひよこをよそに、煙草を啜えた直毅が建物から出てきた。

「いやー腰痛つてえ。ひよこ、火くれ」

「ライター持ってんだろ。自分で点ける」

「部屋に忘れちゃったみたいだよお、仕事終わりに今すぐ一服」

言い終わる前に、通信が入る。

『事件解決ご苦労様、すぐ動けるかい？』

「おおジョニーか。そっちはどうだ？」

時計を見ると、午後6時を回っている。総理の帰国予定時刻を過ぎていた。

『すまない、やられたよ』

「・・・は？」

『総理が、木戸に攫われたようだ』

「What's the fuck!？なんのために出迎えしてたんだクソが!!」

頭を抱える直毅。無理もない。

『車は優輝君達が空から追ってる。君達はとりあえず』

「ジョニーと武信拾いに行くわけね。了解了解。ホラ直毅行くぞ」

ひよこに引つ張られ、直毅は再び車を運転する。

日もすっかり暮れた午後6時10分。黒いセダンは、林の中へと消えていった。

case・04 end

こんな光景を、以前も見ていた。

神が救ってくれないのなら、俺が救ってやる。あいつにそう誓った。

二度と同じ過ちは繰り返さないと、自分に誓った。

あの時は駄目だったが、今回ばかりは譲ってやれねえな。だってそうだろう？

人間ってのは、失敗を乗り越えて成長してくモンなんだから。

奴の口元が、動く。

「さあ、そいつの頭を撃ち抜け」

そして俺は、クソッたれに向かって「っ言っっちゃるのぞ。」

「もし俺が」

c a s e . 0 5 . p r e t e n d e r .

17時45分。東京中央空港。

ジョニーと武信は、他の警官隊と共に整列している。

「もうすぐ総理大臣機が到着する。各自、先程指示されたとおりの配置につけ」

現場指導責任者である夜見川翔平やみかわしょうへいの指示を聞いている最中である。

「尚作戦中は、先の坂上議員の事件を考慮し、通信機の類は使用できない。作戦行動中に通信機を使用した場合、もしくはは使用しているのを見かけた場合は、発見した者が直ちに止めに入れ」

「空港を出てからは、作戦を別の部隊に引き継ぐ。しかし空港出るまでが作戦だ。各自気を抜くな。以上だ。では、持ち場に戻れ」

小学校の校長のような号令と共に、整列していた警官隊が一斉に散っていく。

「・・・みかさん、偉くなつたね」

武信がジョニーに耳打ちする。みかさんとは、夜見川のだ名である。彼は7課メンバーの中学時代の先輩であり、ジョニーの後輩だった。

「彼も頑張ってるからね。君達と同じように」

「何々、俺のはなしー？」

夜見川がとことこと近づいてくる。

「……みかさん、持ち場につかなくていいんですか？」

「いやー本当は無線で指示しなきゃなんだけどー。今回無線ダメじやん？だから暇で暇で」

「……いや、指示以外にも色々やる事あるでしょ」

「おお？言うようになったねえ武信君」

「まあまあ夜見川君。僕達もなんだかんだ、総理が来るまで暇なんだ」

ジヨニーが会話に刺さる。

「あ？誰だテメエ喧嘩かゴラ」

夜見川が物凄い剣幕でジヨニーに食って掛かった。

「一応、君の先輩なんだけどね……」

「いやいやー冗談ですよ冗談。他のみんなは元気してます？」

「元気すぎて逆にみんなテンション低いくらいだ。今度呑みに行こうか」

「あ、もう着く時間じゃないかな？」

夜見川は腕時計を確認し呟く。まるで話を聞いていなかった。

「そうだね・・・僕昔からこんな扱いだったね・・・行こうか武信君」

「二人とも頑張っただけ」

ジョニーは誰が得をするのかわからない泣き真似をして、武信とタラップへと向かう。

17時50分。特別駐機場。

移動式のタラップが飛行機へと接続される。

その中から黒いスーツを着た男達とともに、白髪に立派な白髭をたくわえた日本国総理、船木が姿を現す。

護送車までのルートには空港関係者や先程の一部の警官隊員が一列に並び、総理の帰国を見届けていた。

「・・・総理、お疲れ様です」

武信が声を掛ける。

「ふむ。君は・・・誰だったかな」

「・・・武信ですよ。一ヶ月で顔忘れなさいください」

「おおそうだったそうだった。武信に、ジョニーもおるな。出迎えご苦労」

「お元気そうで何よりです」

ジョニーが一礼する。

「うむ。まだまだ元気だ。下の方も」

「公衆の面前で堂々と下ネタを披露しないでいただけますか」

「おっと、そういえば」

総理がポケットをまさぐり、

「土産だ」

小さいこけしのようなものを取り出し、ジョニーに手渡す。

「何ですかこれ？トーマスポール？」

「儂とお揃いだぞ？ほら喜ばんか」

渡したものと同じ物をちらつかせ、白い歯を見せ付けるように笑う。

「はあ、どうも・・・」

「では儂は失礼させてもらおう。これから大事な用があつてな」

「会見ですか？」

「いや、帰って寝る」

言葉も出ない。

「旅疲れという事にしておけ。それと、その土産は大事に持っておくのだぞ？ではな」

横のボディガードに出発を促し、総理は護送車へと乗り込む。

「……あんな糞ジジイが国のトップで大丈夫なの？」

「武信君、さすがに糞ジジイは言いすぎだ……」

護送車の開いた窓から、総理が笑顔で手を振っている。そして、何か口元が動いたように見えた。

「……総理、今なんて」

一瞬の間があり、

「大変だ。武信君、出動準備して」

「……え？え？」

状況を把握できていない武信を余所に、ジョニーは待機班に無線を飛ばす。

「優輝君、出動準備だ。総理が攫われた可能性がある」

『詳しく聞いている時間は無さそうだな。了解した』

「護送車の発信機から、場所を特定してくれ。こっちは車で向かう」

『なら俺等はヘリのが速えな。先にヘリポート行ってンぞ』

ヤスが駆け足で会議室から出ていく。

「恐らく総理自体に危害を加えることは無いはずだけど、用心してね」

『了解。俺達も行くぞぐんま』

『ホヒヒ』

ジヨニーは無線を切ると、続いて立て籠もり班に繋げる。

無線を終えたジヨニーは、ため息を一つついた。

「施設からここまで恐らく10分もかからないはずだ。その間に準備を済ませないと」

「・・・ジヨニー、なんで総理が攫われたの？普通に護送車に乗ったじゃない」

「追ってこい」

「・・・え？」

「追つてこい、だよ。総理はそう言ったんだ。加えて言うと、護送車を運転しているボディガードは、小型の無線機をつけていた」

「それに、この土産は」

ジヨニーが土産を耳元に近づけると、確かに総理の声が出た。

3月4日、18時15分。総理大臣護送車内。

「ふむ。儂の家はこっちでは無いはずだが」

運転手は、何も答えない。

「儂は早く帰って床に就きたいのだが、寄り道か？磯貝よ」

「そんなところです」

磯貝と呼ばれたボディガードは、前を向いたまま返答する。

「何処へ向かっている？それくらい聞かせてくれても良からうって」

船木は、再び磯貝に尋ねる。

「ボスの所へ、お連れします」

「ふむ・・・なあ磯貝よ」

「何でしょうか」

「儂、寝ててもいい？」

「・・・」

総理は、ドライブを楽しむ気は無いらしい。

18時20分。7課人員輸送へリ。

『優輝君、そつちはどうなってる?』

「総理護送車を発見、追跡中だ。今のところ以上は無い」

『了解。こつちもそろそろ・・・来たね』

『迎えに来たぞジョニイイイイツ!!』

『直毅速いって!!止まれ止まって止まってください!!!』

インカム越しに騒がしい声が聞こえる。どうやら、ひよこ達が空港に到着したらしい。

『へいお待ちい』

『死ぬかと思っただけ・・・』

『二人とも本当に申し訳無いんだけど、武信君連れて護送車を追っ
てくれ』

『マジで人使い荒えのな。ジョニーはどうすんだ?』

『僕はいつも通りだ。ここから武警に指示を出すよ』

『ジョニーもたまには前線出張れよ。なまっちまうぞお？』

「役割分担だ。司令塔が居なくなれば、俺たちはただの木偶の坊だ」

『まあ文句はないよん。とりあえず武信はやく乗って』

『・・・う、うん』

「ヤス、車は何処に向かっているかわかるか？」

「まだ特定できねえな。走り方から見て、目的地に一直線ってわけじゃ無えみたいだが」

「追跡振り切ってるんじゃないか？なあ、なあて」

「やかましいぞぐんま。どの道、ヘリの眼からは逃げられない」

18時25分。セダン車内。

「で、なんで攫われたってわかったんだジョニーよお」

直毅がインカム越しに問いかける。

『総理総理の口の動きもそうだったけど、決め手はこの土産だ。ど
うやら小型の通信機らしい』

「抜け目ないねー。まるで自分が狙われるの知ってたみたいなの周到
さだね」

『僕も一連の事件については総理に逐一伝えていたからね』

「……まあさすがといえませんが、だね」

感心した素振りを見せる武信。糞ジジイ発現も何処へやらである。

『それで、護送車内の会話が筒抜けというわけか』

『うん。運転手はボスの所へ連れて行く、と言っていたよ』

「このタイミングじゃあほぼ確実に木戸のところだろうなあ。んで、
総理は今どうなってる」

『寝てるみたいだね』

『……あの糞ジジイ大した肝っ玉してやがンゼ』

「まあ船木の爺さんらしいけどねー。あ、あれ護送車じゃない？」

『ついでに目的地みたいだよおホヒヒー』

護送車は住宅街の外れにある、一際大きな家の前で停車した。

18時28分。護送車内。

「総理、着きました」

「・・・おお？もう着いたのか。惰眠を貪る暇も無かったわい」

船木は磯貝に促され、車から降りる。

「ボスがこの中でお待ちです。私が先導します」

「ふむ。ボスとは、円卓の騎士の木戸優一の事か？」

「そこまで搦んでおいででしたか。ならば話は早い」

磯貝の口ぶりが変わる。

「総理、貴方に話がある。今少しだけ、私の話を聞く気は無いか」

「その前に一つ質問じゃ、木戸よ」

「何だ」

「こやつは、磯貝は、お主に操られているだけなのか？」

「そういう事になる」

へりの羽音が聞こえる。

「ふむ・・・ならば、良かった」

そう言つて一呼吸置くと、船木はにやりと笑い、

「側近を手にかけるのは、いささか気乗りしなかったものでな」

磯貝の首に、手刀を振り下ろした。

そのまま地面に倒れる磯貝を抱きとめ、運転席に寝かせる。

「若造の与太話に付き合うほど暇では無い。僕は帰って寝るのだ」

18時30分。7課人員輸送へり。

「総理、お迎えにあがりました」

優輝が低空飛行するへりへと、船木を迎え入れる。

「はて、君は誰だったかな・・・？」

「・・・ヤス、出せ」

「おオよ」

船木のポケを受け流し、へりは再び浮上する。

「怪我等は・・・無いようですね。よくご無事で」

「それよりも、昼飯はまだだったかのぉ」

「うっせーぞ糞ジジイ。ポケるには早えンだよ」

「何だと！？僕は総理だぞ！貴様誰に向かって口を利いておる！！」

「いきなり国家権力を振り翳さないでください」

『優輝君、そっちは大丈夫かい？』

「問題ない。総理をこのまま送り届ける」

『こっちは任せろや。頼んだぞヤス』

へりの中から、直毅達が家屋に突入していく姿を認めた。

「よし、このまま・・・おい、何だこの音は」

警告音のような音が、断続的に機内に響き渡っている。

「・・・オイオイマジかよ、ちょっと揺れンぞ」

ヤスが呟き、へりの機体が傾く。

その横を、ロケット花火を大きくしたようなものが、煙を引いて通過していった。

「RPGか！？どこから・・・」

場所を特定する間も無く、次々とミサイルが飛んでくる。

「馬鹿がよお。俺のへりに当てられると思ってンのかぁ？」

「あいつら見境なしかよお！？お祭りなんだけどホヒヒ」

「この揺れは、ちと年寄りにはきついわい・・・」

「ジジイ根性見せろよお」

「お年よりは大事に扱えと教えなかったか？ぐんまよ・・・」

「ああ？俺、女子供と年寄りにはつえーから」

「最低だなお前・・・ヤス、いけそうか？」

「たりめえよ。直線軌道は予測しやす・・・あ？」

先程とは違う警告音が聞こえた。

「91式か！？誘導弾にロックされた、避けらんねえ！！！！」

「フレアも間に合わない、か。ヤス、機体を横に向ける」

「正気の沙汰じゃねえだろ！？何言ッて・・・」

「横に、向ける」

それ以上、優輝は何も言わない。

「・・・任せたぜエ、凄腕さんよ」

言われるがまま、ヘリの機体をミサイルの軌道と垂直に向ける。

「目標12時方向、2時方向。無風。揺れを考慮・・・修正。ミサイル距離約70、60・・・捉えた」

「生憎、爆発物は嫌いだな」

優輝の構えたバレットライフルから、瞬時に2発の弾丸が発射された。

1発目はミサイルを確実に捕らえ、2発目は、次弾を発射しようとしていた射手の91式を貫いた。

爆発に伴う揺れをヤスは瞬時に修正し、全速力を以って住宅街から遠ざかる。

「パネエっす優輝さん！！儂マジリスpektしてるっす！！抱いて！！」

「年甲斐も無くはしゃがないください。それと、まだ狙われる可能性があるので何かに捕まってていただけますか」

「うむ。一ついいか」

「なんでしょう」

「捕まっつてさえいれば、寝ていても問題ないかの？」

「どんだけ寝たいんだあんたは」

へりはとつくに住宅街を抜け、海へと差し掛かっていた。

18時35分。邸宅入口。

大きな屋敷だった。今日制庄に出向いた施設と同じか、それよりも大きい。

「ひよこ。中の調査を」

「今終わったとこ。1階の奥の部屋に男が一人・・・居るんだけど」
ひよこが言葉を切る。

「・・・どうしたの?」

「いや、それがこいつ・・・」

『皆、聞こえているか』

優輝から3人へ通信が入った。

「船木のジジイはどうなった?」

『問題無い。安全圏に抜けた。今から一旦、7課に戻るところだ』

「そいつぁ良かった。こつちも今から木戸を確保する」

『気をつける。俺達はRP・・・撃を・・・何らか・・・』
通信に、ノイズが混じる。

「おい優輝、聞こえるか!？」

『・・・した・・・ろ・・・直・・・』

混じっていたノイズの度合いが増し、遂には完全にノイズに侵食された。

「糞が、電波妨害かよ」

直毅は歯噛みし、通信を切る。

「・・・とりあえず、奥の奴を確保しに行こう」

「あ、ああ・・・」

「んだよひよこちゃんよお。何か気になることでもあんのか?」

「奥の奴・・・多分だけど、死んでる」

18時37分。7課人員輸送へり。

総理は宣言どおり、ヘリの座席にしがみつinaながら寝ていた。

「駄目だ、通信が切れた」

『木戸の妨害と見て間違いないだろうね。1課と3課で手の空いてるものを向かわせたよ』

「出来るだけ早めに頼む。俺達じゃ時間がかかり過ぎる」

このまま7課に戻って総理を預け、また向かうとしたら確実に40分は掛かる。ましてや総理を連れたままなど問題外だ。

武警の応援が到着するとしても最短でも20分。途中でヘリを妨害してきた集団のことも考えると、それ以上かかるのは確実であった。

「まああいつらなら大丈夫なんじゃないかねえか？」

「俺たちじゃどうやっても間あに合わねえしなあ。ホッヒヒ」

「そう、だな・・・」

18時40分。邸宅1階寝室。

「武警7課だ。動くなよ糞野郎」

寢室のドアを蹴破ると、確かに1人、男が居た。

作業服を着た男は体を椅子に預けたまま、微動だにしない。

「ほんとに死んでやがんのかテメエ」

直毅が銃で男の頭を小突くと、男は力無く床に倒れた。

「・・・みたいだね。しかも、死んでからまだ時間経ってないみたい」

武信が体を調べる。男に目立った外傷は無く、眠るように死んでいる。

「・・・この作業服、大川重工の従業員・・・？」

「そういえば突入のとき、一人足りなかったねー。だとしても、なんでこんな」

「動くな。その状態で止まれ」

3人の背後から声がした。

「まず手に物騒な物を持っている君は、それを床に捨てて貰おう」

直毅は、声に従いP90を床に置く。

「能力を使われても困る。当分使わないで貰おうか」

7課にかかってきた電話の声と、同じ。

「私の言った事が理解できた者は、こちらに顔を向ける」

武信とひよこが振り向き、次いで直毅も後ろを向く。

「・・・あなたが木戸さん、ですか」

狡猾な笑みを浮かべた男が、そこに立っていた。

「問うまでも無いだろう。君達の今とつた行動を考えればな」

「わざわざ本人がご登場とは、こつちとしても好都合だ」

「私としても出向きたくは無かったがな。死体の前でお喋りも気が進まない。着いてこい」

木戸は踵を返すと、2階へと歩き始める。3人もそれに倣い、木戸の後ろを歩く。

「武装した奴等相手に背中向けるなんて、大した余裕ですねー」

ひよこが愛想笑いを浮かべる。木戸は振り返りもせず、

「それに対する回答も、最早する必要が無いだろうな。今現在君達が体験している感覚、それが全てだ」

撃ちたくても、撃てない。止まりたくても、止まらない。足が勝手に動いている。

「ここだ。先に入ってくれ」

武信がドアを開け、3人は中へと通される。

正面の壁一面が大きな窓になっており、夜景が良く見える。窓の前には大きめの机が1つ。左右の壁には本棚が並べられ、本が隙間無く敷き詰められていた。どうやら書斎のようである。

木戸は3人を部屋の中心に立たせ、椅子に深々と腰掛けた。

「そうだな。まずは、隠している武器の類を、全て床に置け」

言われるがまま、各々所持している銃を床に並べる。

「しかしすげえな。意識しなくても勝手に体が動きやがる」

直毅が計5丁の銃を床に並べ、頭を掻きながら呟く。

「暗示のようなものだ。私の声は人の意識に干渉する。尤も、このような簡単な指示は反射に近い。急に熱いものに触れると、咄嗟に手を離すだろう？ その様なものだ」

ひよこが鼻で笑いながら言う。

「木戸さん木戸さん。自分で自分の能力解説しちゃう悪役って、絶対負けるって知ってた？」

「勝ち負け等既に決まっている。君達はここで私に屈するか、死ぬ。確実に。それに私は、悪ではない」

「……実験と称して人を殺しておいて、悪じゃない、と言つもの？」
武信が割って入る。

「そつだ。彼のような汚い政治家は、私の描く日本には必要無い」

「……ご高説を垂れ流した人の台詞じゃないね。大したエゴイストだ、あなたは」

「どうとでも言つ方がいい。誰かが動かなければ、この世の中は変わらない。そういえば君の声は聞き覚えがあるな」

「……7課に電話してきた時には、僕が受け答えしてましたから」

「ふむ、成程。あの時は名前を聞いていなかったな。名前は何とい
う？」

「……武信です」

「武信君か。いい名前だ」

一呼吸置き、

「また、私の話に付き合つて貰おう」

木戸は、語り始める。

「武信君、まず質問だ。そっちの二人の名前を教えてください」

「・・・金髪が直毅、その隣がひよこです」

「ふむ。ひよこ、というのはコードネームか何かかな？」

「・・・学生の時のあだ名です」

「学生の時という事は、学生時代からの友人というわけか。そうなのかな、直毅君？」

木戸は会話の対象を直毅に移した。

「ああ。つーか今そんな話は必要無えんじゃねえのか」

不機嫌そうな顔を形作る直毅。

「許してくれ。人とまともな会話をするのは久しぶりなんだ」

一つ咳払いをし、

「話を戻そう。私の考えは、以前坂上を通して君達も聞いていたはずだ。覚えているかな？」

「さあな。政治家の演説なんかいちいち覚えちゃいねえ」

「まあそうだろうな」

木戸は笑う。

「すまない、気が利いていなかった。長話になるから、皆座つてくれ」

直毅とひよこはその場であぐらをかき、武信は律儀に正座する。

「あの時は少し過激な言い方をしてしまった。私の目指す社会というのは、平たく言うと差別の無い社会だ」

「金や権力、能力者の差の無い社会。そういうものを理想としている」

「思想が共産主義者スレスレじゃねえか。時代に逆行してやがる」

「いや、一概にそうとも言えない。事実今の日本は民主主義を謳いつつ、実際は社会主義の体制に移行しつつある。そう感じたことは無いか？直毅君」

「まあ確かに、国民の意見なんか結局反映されて無いように感じるな」

「そうだろう。近々この国は社会主義国になるのではないかと私は危惧している。現在の政治家達の思想が引き継がれたまま社会主義になってしまったらどうなると思う？武信君」

「・・・少なくとも、いい結果にはならないでしょうね」

「うむ。私もそう思う。思うからこそ、今を変えていかなければな

らない」

「今日船木総理と話をしようとしたのも、それが理由だ。あの方は影響力が凄まじいからな。あの方に話を通しておけば、下で働く者たちも考えを改めるかもしれない。そう考えた」

溜息を吐く。

「私が政治家であれば、こんな回りくどい事をせずに済んだのだがな。私は日財に就く前は、中学校で教師をやっていたんだ」

「能力が無かった頃でも、生徒は熱心に話を聞いていてくれたよ。今の君達のように」

「お陰で私のクラスはイジメ一つ無かった。まとまりのあるクラスだったんだ。最初はね」

「ある時、クラスの生徒一人が、能力者となった。原因は家庭内暴力による、過度のストレスだったらしい」

「最初はクラスの注目の的だったが、彼女としては複雑だったんだろう。あまりクラスの輪に入ろうとしなくなってしまったね」

「そこからイジメに発展するまで、時間はかからなかった」

「私も見て見ぬふり等できなくてね。イジメをやめる様、クラスに呼びかけた。しかし、それが原因でイジメがエスカレートした」

「君達も最近まで学生だったならわかると思うが、最近のイジメは陰湿だ。最初は靴を隠され、次に机、鞆。アザを作ってくる日もあ

ったね」

「彼女は三ヶ月程耐えていたが、遂に体調を崩してしまつてね。学校に来られなくなつた。家庭訪問しようにも、私は家に入れてもらえなかつたよ」

「それから一週間もしないうちに、彼女は自室で首を吊つた」

木戸が引きつった笑みを浮かべる。

「自分の無力さを呪つたよ。私が生徒達にもっと強く言っていれば、あの時無理にでも家に押し入つて話を聞いてあげられたら、何か変わったかもしれない、とね」

「葬式では私以外誰も泣いていなかった。彼女の両親すらも、誰一人として」

「そのことにひどくショックを受けてしまつてね。私は三日ほど寝込んだ。私にもっと力があれば、と思いながら」

「結果として私は、その時に能力者となつた。誰もが私の発言に絶対に従うという能力を授かつた」

「皮肉なものだろうか？彼女の自殺が原因で、彼女の自殺を止める手段を手に入れたのだから」

「そんな時だつた。円卓の騎士と呼ばれる集団があることを知つたのは」

「彼等は今の日本の現状を変えるために様々な策を講じていた。私

の力があれば日本を変えられるかもしれない、とも言ってくれた」

「私は教師を辞め、日財に入った。円卓の騎士としての活動をする為にね」

「二度とイジメや争いが起きないような、そんな誰もが幸せな世界にするために、私は立ち上がったんだ」

「私はこの力を使い、この国を支配する。たとえ独善的であろうとも、誰かがやらねばならないからな」

木戸は深呼吸し、3人に呼びかける。

「君達の力があれば、私達の計画も簡単に実行できる。あの時は断られたが、今一度聞こう。私達に協力する気は無いか」

「断る」

ひよこが力強く答えた。

「あんたは宗教家に向いてるよ、木戸さん。神様にでもなるつもりか？ただまあ、俺たちの心には届かなかったけどね」

「俺”たち”というのは、語弊がありそうだ。違うかな、武信君？直毅君？」

木戸が歪な笑みを浮かべ、2人に問いかけた。

「・・・協力します、ボス」

「OK、Boss。」

「おいおい二人とも、何言ってる……」

言いかけて、ひよこは気づく。木戸の術中に嵌められていた事に。木戸の話を聞いた時点で、彼の張る蜘蛛の巣に絡め取られていた事に。

「お前、さつき二人に関係ない話をしたのは……」

「坂上の件を何も生かしていないな君達は。私の話を少しでもまともにも聞いたら、それまでだというのに」

「下準備ってわけかよ、糞野郎が」

「今更気づいても遅い。既にひよこ君以外の二人は、私の意のままだ」

武信も直毅も、木戸から視線を外さない。武信に至っては目が虚ろである。

「おい武信！直毅！目覚ませ！！」

「無駄だよ。それにしても君は面白い。聞く気が無いとはいえ、私の話を聞きながら、洗脳に耐えるとは」

「他人の人生なんか興味無いんだよ。自分のことだけで手一杯なんだね」

ひよこは床から銃を拾い上げるが、

「止まれ」

木戸に先手を打たれる。

「くそっ……!!」

「君は何か洗脳に対する対策をしているようだ。流石に解けるのが早すぎる」

「言ってる。どの道もうお前に逃げ場は無い」

遠くからパトカーのサイレンが聞こえる。増援が到着したようだ。

「ふむ、少し話しすぎたようだ。もう7時10分過ぎか」

「頃合いだ」

木戸は立ち上がる。

「直毅君、ひよこ君。立つんだ」

2人とも、指示に従い立ち上がる。

「直毅君は床から銃を拾いたまえ」

直毅がファイブセブンを床から拾い上げた。

「君の死を以って、円卓の騎士始動の第一歩としよう」

ファイブセブンの銃口が、ひよこの額を捉える。

「おい嘘だろ……？直毅、返事しろよ直毅！！」

直毅の耳には、誰の声も届かない。

「さあ、そいつの頭を撃ち抜け」

直毅は深呼吸し、別れの言葉を告げる。

「もし俺が」

口角を吊り上げ、

「もし俺が絶対に屈しないと云ったらどうする」

その銃口を、木戸へと向けた。

「貴様っ・・・洗脳が効いたフリを・・・!!」

「長々語ってんなよプリテンダー。欠伸が出るぜ」

木戸はベレッタを取り出すが、僅かばかり判断が遅かった。直毅の放った銃弾は木戸の右肩に命中する。

「ぐっ・・・!!」

右肩を押さえてよろめくが、まだ倒れない。

木戸に銃口を向けつつ、木戸に歩み寄る直毅。

「止まれ」

彼の歩みは止まらない。

「止まるんだ!」

木戸の声は届かない。

「聞こえないのか!! 止まれ!!!!」

明らかにうるたえている木戸を余所に、直毅はファイブセブンの銃口を木戸の眉間に押し付ける。

「馬鹿なっ! 私の声は、確かに貴様に伝わって・・・」

「お前が元センサーで助かったぜ木戸よお。唇の動き読むっつーのは、案外簡単なもんだ。はつきりと喋るような奴は特にな」

「イイ子ちゃんクラスだったらしいがなあ。案外、携帯持ってきてたりする奴とか居たんじゃねえか？この分だと」

「な……に……？」

「持ち物検査、もつと徹底しねえとなあ」

直毅は左手の中指で自分のこめかみを叩く。その両耳には、インカムが取り付けられている。

「ここの連中全員、インカムに音楽プレーヤー仕込んでんだわ。生憎不真面目の集まりでなあ。馬鹿二人は真面目にお前の”講義”聞いてたみてえだが」

「そんな物で、私の声を遮断しただと……？」

この場で木戸の声を聞き取れる者は、既に誰も居なくなっていた。

「……木戸さん。貴方の実験は、少し手落ちだったみたい。声を発した者が死ねば洗脳が解けるんじゃないかと、恐らく痛みを感じたり、精神的に不安定になれば、効果が薄れるんだと思います」

意識を取り戻した武信が木戸に語りかける。

「……貴方とはお話したい事がたくさんあります。大人しく、僕達についてきてください」

「まだだ」

俯く木戸の左手には、何かが握られている。

「抗ってみせる。こんな運命から」

左手に握った何かを、前方へと放り投げた。

握っていたのは、机の上に置かれていた砂時計。砂の代わりに、赤い液体が入っている。

それに気を取られた3人の隙を突き、木戸が窓へと走る。

「!？ 武信！木戸を止めとけ!!」

ひよこは投げられた砂時計に向かって走り出す。

「馬鹿が。悪あがきしてんなよ」

直毅は冷静に木戸の足を打ち抜き、倒れた木戸へ武信が駆け寄る。

「・・・木戸さん、話はまた後でゆつくりと。おやすみなさい」

武信が木戸の額に触れ、呟く。その途端、木戸は意識が遠のき、ゆつくりと瞼が落ちていく。

「催眠・・・だと・・・」

「・・・そんな感じです。今は、休んでください」

「結局捕らえられたか・・・ふふ・・・どの道私・・・は・・・」

木戸は薄く笑うと、ゆっくりと瞳を閉じた。

「あつぶねー！ギリギリセーフ！！」

2人が振り返ると、ひよこがダイビングキャッチの体勢で固まっている。

「ああ耳痛つてえ。つーかただの砂時計だろそれ？そんな必死になる事ねえだろ」

『おい三人とも！聞こえてないのか！！』

音楽再生機能を切ると、続けざまに優輝の怒鳴り声が飛んできた。

「悪い悪い。今大サビだったんだよ」

『またテメエは作戦中に音楽聴きやがって・・・くそ・・・』

「・・・まあ今回は、そのお陰で助かったみたいだけどね」

『三人ともお疲れ様。木戸はどうなってるかな？』

「ジヨニーもお疲れ様。木戸はこっちで生け獲りにしたよー」

「あと死体が一つ転がってる。そっちの回収も頼む」

『生け残りって言い方はどうなんだろう・・・とにかく了解した。あとは、3課に引き継いでくれ』

3人は現場の引継ぎを済ませ、セダンに乗り7課へと戻る。

武信が運転するセダンは、安全運転で7課へと向かっていた。

「いやぁマジで疲れた。これはあと一月休んでも怒られねえな」

「・・・ほんとに休まないでよ」

「わあってるよ。つーか木戸預けてきちまったけど、あれ大丈夫なのか？もし途中で目覚ましたらまずいんじゃないかねえの？」

「・・・醒まさないよ。少なくとも、12時間は」

「悪いねー武信。能力使わせちゃって」

「・・・大丈夫。僕もいつまでも、引き摺ってるわけにはいかないから」

車内に沈黙が流れる。車のエンジン音が、やけに大きく聞こえた。

「まあ、とにかくお疲れさんだ。ひよこ、火くれ」

「ライターの油切れてるって言って・・・あ、ちよっと待って」

ひよこは左ポケットを漁ると皮手袋をはめ、人差し指で親指を弾く。すると、人差し指の先端に火が点いた。

「そんな手品使えんなら最初からやってくれよ」

「戦利品だよ戦利品」

「意味わかんねえっての。すまねえな」

人差し指から火を貰い、満足げに煙草をふかす直毅。

『三人とも聞こえてるかい？』

ジヨニーから通信が入る。

『総理は無事に自宅に送り届けたよ。幸いにも今回の騒動に総理が関わったことは洩れてないみたいだし、公にはちよっと寄り道して帰った、という事になるだろうね』

「・・・間違っではないね。それが無難かも」

『それと電波妨害してきた集団の詳細がわかったよ。”天空の泉”と呼ばれる国内PSC（民間軍事会社）の一つだ』

「PSCねえ。なんか面倒な事になってきてんな」

「まあその調査も含めて、木戸には色々聞かないとねー」

『そうだね。彼が目を覚まし次第、取り調べようか』

「……うん。そろそろそっちに着きそうだ。詳しくはまた後でね
シヨニー」

『了解。みんな本当にお疲れ様』

「……ちょっと待って。まずいことになった」

「どづした武信!？」

「……ガス欠みたいだ」

case . 05 end

木戸の確保から3日が経過した、3月7日正午過ぎ。都内警察署。

「ちーっす」

直毅が取調室のドアを開ける。

中には椅子が乱雑に並べられ、1つの空席を残しその全てが埋まっている。

その中に見知った顔が3人。それ以外に14人もの人間が1部屋に缶詰にされていた。部屋の前に置いてある机にはマイクが取り付けられ、壁にはモニターが設置されている。

「なんだこりゃ。映画鑑賞会でもおっ始めんのか？」

「普通の取調べだと能力を使われる可能性がある。それを考慮して、聞く側の人数を増やす事で能力使用を防止しているらしい」

優輝が答える。

「肝心の木戸はどこだよ」

「署内独房で拘束中だ。直接の接触は避け、それを通して取調べするよっだな」

モニターを指差す。

「・・・仮に、取調べを真面目に聞いて、途中で話をすり返られたら」

武信の疑問が口に出きる前に、ジョニーが手で制した。

「これだけの人数を相手に能力を行使するのは難しいはずだ。まあ、苦肉の策なんだよ。万一に備えてこの部屋に危険物の類は持ち込めないようになってるし、独房の鍵もここからじゃ開けられない。しかも彼、抵抗する気は無いみたいだしね」

「なるほどねえ。そういや、ひよことヤスはどこ行った」

「ひよこ君は調べ物があるとかで欠席だ。ヤス君はお墓参りの後、病院らしいよ」

ちなみにぐんまは通訳のため海外出張中だ。

「んだよ、俺もサボリゃよかったぜ」

「いいから座れ。取調べを始める」

優輝に促され、直毅が椅子に腰掛けると、モニターの電源が入った。

「・・・木戸さん、聞こえますか？」

『武信君か。しばらくぶりだな』

映し出された独房は、一見するとワンルूमマンションの一室のようだった。椅子にテーブル、ベッド、本棚すらある。しかし、窓が無い。

椅子に腰掛けた木戸は、やれやれといった表情で肩をすくめた。

『君と話が出来てうれしいよ。そこにいる連中は会話が成立しなくてね。まるで尋問だ』

「……これは取調べですから。会話にはならないと思います」

「随分と良い部屋貰ったじゃねえか木戸よお」

『そちらが勝手に用意したのだろう。私としても有難い処遇だが』

「……そろそろいいでしょうか。取調べ、始めます」

真面目に取り合わないようにして、取調べが開始された。

「……まず2週間前の事件からです。大川製鉄所で銃を密造していた件について、心当たりは？」

『あれは私の指示だ』

木戸があっさり口を割ったため、取調室でどよめきが起こる。木戸はここ3日間の取調べで、何一つとして有益な情報を吐き出さな

かつたためだ。

『当初の計画では、政府への抑止力として大量の武器が必要だったからな。尤も君達に押さえられてしまったから、計画を変える必要があつたがね』

「・・・そこで坂上の演説を自らの能力の実験場にし、総理と直接コンタクトをとる策を練った、というわけですか」

『そうだ。あの時点で有効範囲や人数を調べ、総理を操った時に不備が無いようにしていた』

「ではその総理についてです。あなたは何故、総理を攫おうとしたのですか？」

『君には話したはずだがな。私の思想を直接、手っ取り早く社会に反映させるためだ』

「でも、それならわざわざ総理を呼び出すまでもなかつたんじゃないでしょうか。あの時あなたは、総理のすぐ傍にいる人の洗脳に成功しています。その人を通して総理と接触する、という気にはならなかつたんですか？」

『これも前に話したな。私の声は、意思を伝える段階が増えることに、効力が薄れる。先の実験で確認したように、ボディガードから伝えた思想など、彼は聞く耳を持たないだろうからな。仮に伝わったとしても、そこから彼が直接政治家どもに指示を下したところで、正常な効果はほとんど得られないだろうと考えた』

「・・・なるほど。それで僕達の介入を防ぐために、先に指定能力研究施設を襲わせ、指揮系統を混乱させた、と？」

『何の話だ』

再びどよめく取調室。

「・・・あなたは傭兵を雇って、総理の乗っている僕達のへりを攻撃させましたよね？」

『ああ、間違いない』

「その1時間ほど前、街外れの施設が襲撃されたのは、ご存知ですか？」

『初耳だな』

「ざけんなよテメエ。襲撃した連中は円卓の騎士を名乗ってたんだ、関係ないと言わせねえ」

席から立ち上がり、一気にまくし立てる直毅。

『知らないものは知らないのだ。このような状況で嘘をついたとして、私に得が無いだろう』

いつの間にかベッドに腰掛け、すっかりくつろいでいる木戸は溜息をついた。

「円卓の騎士は、組織立って動いているわけではないのか？」

優輝が会話に参加する。

『我々は一つ思想に基づいて組織されているが、それらを実行に移すのは組織の決定ではない。個人の意思だ』

「・・・日本を変える、という思想ですか・・・」

『そうだ。そこからどういった行動を取るのかは、各々の判断に委ねられる』

「・・・要するに、木戸さんとは別の人が研究施設を襲わせた、ということですか？」

『だろうな』

「・・・その人に、心当たりはありますか？」

『あると言えばあるが・・・』

言葉を濁す。

『この組織は、お互いの素性は明かされていない。顔は見ているが、二度三度会った程度でよく覚えていない。わかっているのは、私を含めて6人の騎士が居ることぐらいか』

「その6人の中に、襲撃を指示した人物が居るってわけか？」

『違うな。恐らく施設を襲う指示を出したのは、円卓の騎士を結成した人物だろう』

「・・・そう思う根拠は何ですか？」

『なんとなく、だよ。・・・いや』

木戸は笑みを作ると、

『”そういう事になっている”からだ』

ベッドから立ち上がり、椅子へと戻る。

「どづいう意味だ」

『言葉通りの意味だよ。それ以上でも以下でもない』

テーブルに置いてあったコーヒーを啜りつつ、木戸は再び笑ってみせた。

「木戸、お前は何を知っている。やはり総理誘拐と施設襲撃は関係があるのか!？」

『さあ、どうだろうな』

「答える!!!」

声を荒げる優輝。

「優輝君、落ち着くんた」

「だがジョニー……！こいつは明らかに何かを隠している！」

「そうだね。木戸君、君に聞く時間はたっぷりあるんだ。話す気になるまでそこから出られないよ」

『話したところで出られないだろう。それに、私にはもう時間が無い』

「何を言っている……！」

『武信君、まだ聞いているかな？』

木戸は気にする様子も無く、会話の対象を武信へと戻す。

「……はい」

『私からの忠告だ。円卓の騎士にはこれ以上関わるな。でない』

「……僕はもう、今より不幸になることはありませんから。ご忠告ありがとうございます」

直後、独房で異変が起こった。

金属製のベッドがバラバラに分解され、それを形作っていたパーツが、宙へと浮き上がる。

「何だ、これは……？」

「ポルターガイストみてえだな……」

取調室の面々は、ただ啞然とモニターを眺めるしかなかった。

『そうだったな。なら君は今までどおり、七峰の線を追うといい』

「!? 何故、あなたがその事を・・・?」

木戸の言葉に同様を隠せない武信。

『君との会話はなかなか楽しかったよ』

『私というイレギュラーによって、この世界が変わることを祈っている』

言い終わると、かつてベッドだった無数の金属の塊が、一斉に木戸へと降りかかる。

そこで、映像は途切れた。

「木戸さん!!」

「オイどうなってやがる!」

「部屋に設置されているスピーカーごと、カメラが壊れて・・・」
機材管理者らしき男がうろたえる。

「見りゃわかんだよそんな事! 近くの無線持つてる奴に繋げ!!」

「部屋前の看守に繋がります」

「看守さん、そっちはどういう状況ですか!？」

珍しくジヨニーまでもが焦っている中、看守の無線が繋がる。

『わ、わかりません・・・ただ、ベッドの脚が木戸に直撃し』

それ以上言葉は続かず、バットでボールを打つような打撃音が返ってくる。

「どうした! 応答しろ! おい!!」

優輝がマイクに向けて呼びかける。

一瞬の間があり、

164

『もーしもーし。これ血がかつちやっただけど、ちゃんと使えんの?』
看守の代わりに、若い女の声がした。

「誰だお前は」

『あ、使えんじゃん。警察のみなさんこんちわー。円卓の騎士でえす』

「円卓の騎士だと・・・?」

『だからそうだって言ってるじゃん。あんたちよつと耳遠いんじゃないの?』

女は気だるそうに答える。

『とりあえずウチは裏切り者掃除しにきたただだからもう帰るけど。掃除とかいって部屋メツチャ血まみれじゃん。マジウケる』

スピーカーからケラケラと笑い声が漏れる。

『そういうわけでお風呂入りたいし帰る。あーマジ鉄くさいココウつざいなあ』

再び通信が切れ、その直後、署内に地響きが起こる。

「Bit ch、マジでどうなってんだ!?!」

「ジョニー、独房は!?!」

優輝の問いに、携帯電話を耳に当てたままジョニーが返答する。

「2階の奥だよ。でも、どうやってここに入り込んだんだ……?」

「……わかった。ひよことヤスには?」

「それが、両方とも連絡がつかないんだ……」

「俺達だけで行くしかないな。後のことは任せたぞ」

優輝達は取調室の面々に状況を引き継ぐと、独房へと向かった。

「馬鹿野郎！何故不審人物が署内に侵入している！！」

階段を駆け下り、2階の廊下に出た3人が真つ先に耳にしたのは、旧知の仲である夜見川の怒鳴り声だった。

「いえ、それが・・・」

「誰も不審人物なんか見てねえだど！？そんな馬鹿な話無いだろうが！！」

20代半ばの男が40歳になる手前の男を叱責している様は、非常時でなければひどく滑稽に見えただろう。

「夜見川課長！」

廊下を全力疾走してくる3人組を見るや否や、夜見川は指示を飛ばす。

「犯人は壁ブチ破って外に出たらしい。こっちは入り口のドア潰されてて時間がかかる。外に回れ」

「了解した」

直毅と優輝は踵を返し、開いている2階の窓から飛び降りた。武信は一礼すると、律儀に階段に向かう。

「不審人物が居なかったかどうかは後で調べる。前田警視は入り口

をどうにかしろ。俺も犯人を追う」

指示を出し終わり、夜見川は階段の奥へと消えていった。

「糞、ノンキャリアの若輩者が偉そうに・・・！」

夜見川からお叱りを受けていた男、前田は入り口のドア撤去作業を部下に任せ、一人2階の窓から外を眺めている。

「聞こえていますよ、前田警視正」

「誰だ」

振り返ると、黒い丈長のコートを羽織った男が、壁に寄りかかっていた。

「彼は確かに若いですが、実力は確かです。現にキャリア組の貴方を追い越して、あの若さでは異例の警視長という立場にいるのですから」

男はズレた眼鏡をなおすと、前田の正面へと向き直る。

「ジョニー外交官・・・！？失礼致しました！！」

「やめてください。どうも堅苦しいのは苦手です」

ジヨニーは人差し指で頬をかいた。

「ただ、やっぱり若さ故に冷静さを欠いてしまうようなこともあります。階級ではなく年長者として、彼をサポートしてあげてください」

「はぁ・・・ところで、なぜ外交官がここに？」

「今回の総理誘拐未遂の事情聴取ですよ。参考人として」

『ジヨニー、犯人と思われる人物を発見。立体駐車場に追い込んだ』

優輝からの通信が入る。

「了解、そのまま確保してくれ。十二分に気をつけてね」

『わかっている。切るぞ』

立て続けに携帯電話が鳴る。

『もしもし、ジヨニーどしたん？不在着信きてたけど』

「木戸が襲われた。優輝君たちは犯人を追ってるみたい」

『俺もそっち向かえばいいの？』

「いや、夜見川君と直毅君、武信君も一緒だし、ひよこ君はこっちに戻ってきて貰えるかい？」

『おっけー。5分で戻るわ』

立体駐車場地下。

「動くな。両手を頭の後ろで組め」

グロツクを構えた優輝は、壁の端まで追い込んだ犯人にそう告げる。

「よくウチが犯人だってわかったねえ」

「目立つからな、その格好は」

犯人の風貌は、ベージュの冬物のコートに灰色のプリーツスカート、頭にバイクのヘルメットという、目立たないほうがおかしい出で立ちだった。

「コートを脱いで床に置け」

「武器なんか持ってないよ。持つ必要ないし」

「いいから脱げ」

「脱がせてどうすんの？ウチ襲われちゃうの？」

直後、駐車場に銃声が反響する。優輝のものだ。

「次は無い。コートを床に置くんた」

「こわあい」

頭の横を銃弾が掠めたにも関わらず、女は動揺一つ見せずにコートを脱ぎ、床に置いた。

「ヘルメットを取り、コートの上に置け」

「はいはい。襲われたくないもん」

素直に従い、女はヘルメットを取った。肩甲骨あたりで切り揃えられた茶色い髪が揺れる。

「そのままこちらを向き、床に伏せる。両手は組んだままだ」

返事は無く、代わりに女がゆっくりと振り返った。

「何っ……?」

「まだ、子供じゃないか……」

まだあどけなさが残る整った顔立ちの少女に、優輝はある人物を重ねてしまった。

(……けて……)

「……やめろ」

銃口が、震える。手にうまく力が伝わらない。

(助けて……)

「やめる」

「どうしたのお？なんか興奮してるみたいだけど、ウチに欲情しちゃった？」

少女の声は、優輝には届いていなかった。

(お兄ちゃん、助けて!!！)

「やめるおおおお!!!!」

「優輝！ソイツを撃て!!！」

振り返ると、1階への入り口に人影が見えた。

「ヤス、か……？」

「ばあか。死んじゃいなよ、あんた」

少女は歪んだ笑みを浮かべると、コートとヘルメットを拾い、一直線に優輝の元へと駆け出す。

「早く撃て優輝!!」

「できない・・・こんな子供に・・・」

優輝は銃を構えてはいるが、照準が定まっていな。それどころか、トリガーに指が掛かっていなかった。

「さよなら。痛いと思うけど、あんたはきっと天国いけるよ」

ヘルメットを被りなおしてそんなことを呟き、優輝とすれ違った少女は入り口へと駆けていく。

「バカが。こんなもの、さっさと撃ちや終わりなんだよ」

ヤスはベレッタの照準を走ってくる少女に合わせる。

直後、少女の背後で爆発が起こった。停めてあった車の何台かが爆発したようだ。

「優輝!!!このクソガキがあ!!!!!!」

ヤスが少女に発砲するが、弾は全て明後日の方向へと消えていった。

「あんたも死にたいの?いいよ、ここなら楽に殺せるし」

手にしたコートの中側からUZIを取り出した少女は、眼前の獲物へと喰らいつく。

しかし少女の撃ちだした弾丸もまた、ヤスを捉えることはなかった。

「避けられた！？なんで・・・」

「ガキが大の大人と張り合えるわけ無えだろ！死んでな！！」

すれ違いざまにゼロ距離で発砲するが、それすらも少女には当たらなかった。

「なんでさっきから弾が当たらねえんだよ糞が！！」

「へえ、あんたも能力者なんだ。めんどいし今は逃げるね」

ヤスは咄嗟にナイフを抜いた。

「待て！テメエはここで」

わき腹に、鋭い痛みが走る。力が抜け、ヤスは地面に崩れ落ちた。

「オイ、マジかよ・・・？」

自分が撃たれたと気づくのに、数秒かかった。次いで両足にも痛みが走り、立体駐車場入り口は血で染まっっていく。

「本当に、あいつの言った・・・通りに・・・」

意識を失う直前、武信の声が聞こえた気がした。

署内2階廊下。

『ジョニー！ヤスが撃たれた！！応急処置はしておいたけど優輝が居なくて爆発が』

「落ち着くんだ武信君。犯人はどうなってるんだい？」

『そんな事よりヤスが大変なんだ！！』

「武信君。今はどちらを優先すべきか、わかるね？」

『い・・・今、直毅とみかさんが追ってるよ』

「ヤスが負傷なんて今までで初めてじゃない？敵さんもなかなかやるねー」

「軽口叩いてる場合じゃないよ。ひよこ君は木戸を頼むね」

「了解。入り口は・・・まだやってんのか。瓦礫が邪魔してるみたいだし裏から回るわ」

ジョニーがインカムを手渡すと、ひよこは階段を降りていく。

『ジョニー、僕はどうすればいい』

「救急車は手配しておいたから、ヤス君と優輝君をお願いするよ」

『・・・わかった。取り乱してごめん』

「構わないよ。武信君も無事でね」

署内独房。

「よつと」

壁の崩れた箇所を手をかけ、ひよこは独房前の廊下へと飛び乗った。血の臭いがひどい。

「うわ、これはエグい」

見ると、看守らしき男が2人、うつ伏せで倒れていた。後頭部から見えてはいけけないものが見えていたが、直接見ないようにして独房へと入る。

独房の中は荒れ果てており、鉄パイプが本棚やテーブルに突き刺さり、それらの原型をわからなくしていた。

「木戸さん生きてるー？どう見ても死んでるようには見えないうぞ」

木戸は意識を失っていたが、生命活動は停止してはいなかった。どうやら生きているようだ。

「ジョニー、木戸生きてるわ。どうする？」

『なんとか運び出せないかな？入り口はまだかかりそうだし』

「運ぶにしても、怪我人を抱えて二階からダイブってのはちょっとね……」

『救急車を裏に回そう。すぐ着くと思うから、君は止血を』

「しておいたよ。幸いシートとか毛布もあるしね」

『わかった。その間、犯人の手がかりになりそうな物を探してくれ』

「了解」

「しつつかし、こんだけ荒れてると何処から手つけていいか……」

改めて部屋を見渡すが、空き巣がそこら中に鉄パイプを突き刺しながら部屋を物色したような有様である。

「本棚がある独房とか聞いたことねえな」

「コーヒーマーカーからティーカップまであるし、完全に税金の無駄遣いじゃん」

「鉄パイプに血痕か。これでぶん殴られた系かな？」

ひよこは鉄パイプを拾い上げた。両端は引き千切られたような痕があり、先端には血が付着している。どうやらベッドの骨組みのようだ。

「こんな直撃で生きてるとか、木戸さんどんだけ生命力あるんだ・

・・・あれ？」

ひよこは鉄パイプをしげしげと眺め、

「木戸さん、あんた運が良かったね」

気がつくと、階下に救急車が到着している。ひよこは木戸を背負うと、救急隊員に引き渡すために歩き出した。

3月4日。

真っ白い壁に天井、床。4畳ほどの空間にあるのはベッドとトイレが1つずつ。部屋の主は1人だけ。

24時間のうちのほとんどもこの部屋で過ごすというのはどれだけ暇なんだろうか。想像したくもない。

こいつも好き好んでこんな部屋に住んでいるわけではなく、俺だっ
て好きでここにいるわけじゃない。仕事をしているだけだ。

部屋の主は重罪人で、俺は壁一枚挟んだところで、椅子に腰掛け雑誌を読んでいる。

決してサボっているわけではなく、独房の看守というのは暇なのだ。交代まではこうやって時間を潰していないと精神的に持たない。

とは言っても、部屋の主がよく話しかけてくるお陰で、最近は暇では無くなってしまった。

「看守、今何時だ」

独房に收容されている罪人、1255番の様子が変わった。日付と時間をしつこく聞いてくる。

以前は特に問題も無く、現に今も行動に目立った問題は無いのだが、ここ1週間程前からえらく時間を気にするようになった。

俺は今日何回目になるかわからない動作で腕時計を確認する。午後17時57分。そろそろ晩飯の時間だ。

「そうか。あと数分で私は自由の身だ。貴方にも、世話になった」
妄言も大概にしろ。お前がここから出られるのは、恐らく死んでからだろうよ。

「看守、今何時だ」

いい加減しつこくなってきたので、無視を決め込む事にした。飯食えばこいつも大人しくなるだろう。

18時を回り、食事の時間を知らせるブザーが鳴り響いた。

牢獄の鍵を開けると同時、看守長が書類の束を持って入ってきた。またこいつに何か書かせるのだろうか。

書類全てにサインを終えた1255番を食堂へと連れて行くことすると、

「おう待て待て。1255番は本日付で仮釈放だよ」

一瞬看守長の言っている事が理解できなかった。頭にハテナマークが浮かぶ。

「容疑が晴れたらしい。冤罪だったそうだ。私も詳しくは聞いていないが」

第一こんな時間に釈放なんておかしいだろう。もう夜だぞ。

「今まで、お世話になりました。二度とここに戻ることはないですよ」

「当然だろう。さて、行くぞ」

頭上のハテナマークが3つを越えたあたりで、看守長と1255番が並んで独房を後にする。

俺はそれを黙って見届けたあと、食堂へと向かった。

C a s e . 0 6 - 錯綜 -

3月8日。7課会議室。

「ヤス、もういいのか」

「良か無えよ。ただ横になってンのも気持ち悪いしな」

松葉杖をつきながら入室するヤス。

「両足と腹ブチ抜かれた翌日によく動けんなあ」

直毅は煙草をふかしながら銃の手入れをしていた。

「怪我の治りは早えからな。お前らだってそうだろ」

「まあねー。それにしてもヤスが傷負ったってのが疑問なんだけどもさ」

パソコンと向かい合い、何やら忙しくキーボードを叩いているひよこは、目を合わせずに応えた。

「俺もわかんねえよそんな事。だからわざわざここに来たンだろうが」

「みんな揃ってるね。ヤス君、怪我は大丈夫かい？」

ジヨニーは開口一番にヤスの怪我を心配した。

「これが大丈夫に見えんなら病院行けよ。頭のな」

「大丈夫そうだね。それじゃあ昨日の事件について色々報告するよ」
ヤスは大きく溜息をつき、自分の机の上に腰掛ける。

「まず木戸についてだけど、一命は取り留めた。ただ意識が戻るまでは、手を出せないね」

「俺が見つけた時点で呼びかけに反応してなかったからねー。下手するとそのままかも」

「あいつの証言はしばらく期待できそうに無い、か。何か知っている口ぶりだったが」

「でもあいつは夢中なんだろ？今は起きるのを待つしかねえな」

「・・・彼は僕が美月、いや、七峰に関して調べている事を知ってた。それに施設襲撃についても何か知ってるみたいでした。起こそうと思えば無理にでも起こせるんじゃないですか」

「武信、気持ちわかるが」

「彼の証言は重要だと考えます。事件の真相に近いのは恐らく彼なんです。ここは薬でもなんでも使って木戸に直接話を」

「武信！！」

室内に怒声が響き渡る。

「怒鳴ンねえで貰えるか。傷に沁みる」

「・・・何だよ、優輝」

「仕事に私情を持ち込むな。木戸は意識不明で、今は他を調べるしかない。そうだな？」

「・・・でも」

「他にも色々気になる事あるんだし、とりあえず木戸のことは後回しにしよう」

ひよこが話を切り替えようとするが、空気を読めない男が一人。

「まあ気持ちはわかるぜ武信ちゃんよお。もしかしたら死んじまつた美月の事についてわかるかも知れねえんだもんなあ・・・あれ？」

言うてはいけないことを口にしてしまった直毅に対し、全員が目を逸らす。武信を除いて。

「・・・生きてるよ、美月は」

2年前の夏、国営の研究所で事故があった。

研究所の一部装置が故障し、研究者と作業員33名が装置の爆発に巻き込まれた。

爆発の規模が大きく、研究所は全壊。事故に遭った33名のうち死亡が確認されたのは29名、行方不明者が3名。この3名は爆心地

付近にいたらしく、人の形すら残さずに文字通り”消滅”した。生存者はたったの1名。その生存者が武信であり、行方不明者のうちの1人に、武信の大切な人がいた。

「あの、話進めてもいいかな？」

ジヨニーが引きつった笑いを浮かべている。助けを求めるサインだ。

「木戸を襲った犯人についてだが」

冷や汗を流す直毅と、それを睨む武信を放置し、優輝が事件報告を進めた。

「誰も姿を見ていないというのは本当か？」

「ああ。どういう能力かはわからないけど、署の入り口から木戸の独房までの道のりに居た全ての人間が、彼女の姿を見ていないと証言しているね。ただ、監視カメラは誤魔化せなかつたみたいだけ」

ジヨニーがリモコンを操作すると、スクリーンに監視カメラの映像が映し出された。

「思いつきり映ってるねー。あつたかくなってきたのに随分厚手なコート着てる」

「フルフェイスのおかげで顔が見えねえな。顔が確認できる映像は無えんか？」

「残念ながら。だからこの中で唯一顔を見た優輝君に頼るしかないんだけど・・・」

言葉を濁す。

「見たのは見たんだが、よく思い出せない」

「オイオイそりゃ無えだろ。追い詰めてメット取らせたのは誰だよ
オイ」

最初に抗議の声をあげたのは直毅だった。武信の威圧からは解放されたようで、どことなく生き生きしている様に見える。

「すまない。犯人の攻撃で軽く頭打ったらしくてな、ぼんやりとしか覚えていないんだ」

「・・・特定に繋がるような特徴とかは無かったの？」

「そうだな・・・身長が低めで、茶髪だったくらいしか」

「・・・顔は？どれくらいの歳だったか、とか」

「確か俺達と同じくらいか、それよりも少し上くらいだったはずだ」

「身長低い茶髪女なんかどこにでもいるじゃねえかよお。他にはな
んか無えのか？」

「・・・すまない」

既に銃の手入れに戻っている直毅の問いに、答えを持ち合わせていなかった優輝は顔を伏せた。

「ただ、犯人の能力については大体わかった。恐らくは指定能力者、それも大規模な物理干渉型だろう」

指定能力者は大きく分けて2つの括りがある。

1つは直毅のような他人に幻覚を見せたり、武信の催眠のような精神干渉型。こちらは人に作用する。

もう1つはこの木戸襲撃事件の犯人のような物理干渉型である。

物理干渉型は前者に比べて絶対数が少なく、何故触れずに物を動かせるか等のメカニズムが解明されていない。

「それなら木戸のベッドが浮いたのも説明つくってわけか」

「俺の時は駐車場の車が飛んできたからな。ほぼ確定だろう」

「そうだ、聞いてえことがあったんだ。ジョニー」

ヤスは組んでいた腕をほどき、ポケットから煙草を取り出した。

「俺を撃つた野朗は誰なんだ？」

「それについても、かなりおかしな事になってるんだけど」

ジョニーが眼鏡をなおし、説明を始める。

「まず優輝君の持っていたのはグロックだったよね？」

「ああ。それがどうした？」

「いや、確認だよ。あの時優輝君は発砲していないもんね。そして駐車場には優輝君と犯人、それに遅れて到着したヤス君しか居なかった」

「あの場で発砲したのは犯人とヤス君の二人だけだ。ヤス君はベレツタ、犯人はUZIだったよね？」

「もったいつけんなよジヨニーよお。何が言いてえんだ？」

手入れを終えた直毅は3本目の煙草に火をつけた。いよいよ会議室が煙たくなってきている。

「まあまあ。犯人は適当に撃ったけど、ヤス君はその時点では弾に当たらなかった」

「全部避けたからな。んで俺が至近距離で三発ブチ込んだが、どういいうわけか一発も当たってない」

「そしてその直後に、ヤス君は銃撃を受け倒れた。これで間違いないよね？」

「その確認と俺が撃たれた事になんの関係があんだよ」

「大アリなんだよ。ヤス君、結論を言うよ」

ジヨニーは少し間を空け、切り出した。

「君の体内から発見された銃弾。あれは、君の銃のものだ」

「・・・ジヨニー、いくらなんでもそれは無いんじゃないかな」

流石の武信も呆れているが、ジヨニーは続けた。

「状況証拠からみても、それしか考えられないんだ。ヤス君の銃の発射痕と、体内から摘出された銃弾の痕が一致した」

全員、言葉も出ない。その理屈だと、ヤスが自分で自分を撃ち抜いた事になってしまう。

「この事について、ヤス君はどう思う？」

「なるほどねえ」

一呼吸置き、

「どっつて言われても、つまりそついうことなんだろ」

一番初めに納得したのは意外にもヤスのようだった。

「俺が撃った弾が何か知らねえけど俺のわき腹と両足に当たった。簡単じゃねえか」

「ヤス、お前自分で何を言っているかわかってるのか？」

優輝が本気で心配している。

「おう。とにかく考えてても仕方無えし、俺は帰るわ」

ヤスはそそくさと帰り支度を始め、

「優輝、病院まで送ってけ」

「あ、ああ……」

言葉を残し、優輝と共に会議室を後にした。

「あー、何か思い出したりしたら報告してね……」

ジョニーが言い終わると、会議室にしばらくの沈黙が訪れる。

「ジョニー先生、質問です」

ひよこがゆっくりと手を挙げる。

「はい、ひよこ君」

「話についていけないです」

「大丈夫、僕もだ」

会議室を出てから今に至るまで、俺はずっと確かめたいことがあった。当然だがさっきの会議室での茶番のことである。

自分の撃った弾が時間差で自分に命中するなど、他者の介入無くして起こる現象ではない。それはヤスもわかっている筈だった。それを踏まえたくうえで、あの場でジョニーを深く追求しなかったということは、何か心当たりがあるはずだ。

いい加減車内の沈黙にも耐えられなくなり、俺から会話を始める。

「なあ、ヤス」

「なんだよ」

こうやってヤスと1対1で会話するのは、中学以来だった。色々と思ひ出話に花を咲かせて気分を紛らわしたかったが、空気がそうさせてくれなかった。

「お前は、さっきの説明で本当に充分だったのか？」

ヤスの性格上まともには答えないだろうが、会話からヒントを得られるはずだ。

「全くもって完璧に理解したけどなあ。簡潔な説明で助かった」

これじゃ足りない。もっと突っ込んだ聞き方をしないと駄目らしいな。

「つまり、ヤスは自分で自分を撃つたって事か？」

「そのつもりは無えンけどな。結果的にそうなったってことだな」

「そうか・・・」

充分だった。恐らくヤスは、自分の身に起こった現象の原因を理解している。

それを俺達に話さないという事は、確証を得ていないか、あるいは隠さなければならぬ理由があるか……。

「ところで優輝よお」

思考を中断される。

「お前、ホントに犯人の顔覚えてねえンかよ」

やはり、聞かれると思っていた。俺はあらかじめ用意していた答えを口にする。

「ぼんやりとしか思い出せないな。思い出せたら捜査も進展しそうなんだが」

嘘だ。俺は犯人の顔をはつきりと覚えている。明らかに俺達よりも年下、高校生くらいの顔つきだった。

本来このような行為は許されるものではないが、何分顔を見たのは俺だけだ。今のところは追求されなくて欲しい。

問題は顔では無い。犯人の着ていた服、それが学生服であり、その学生服に見覚えが無ければ、俺は正直に話していただろう。

「派手な爆発だったかな。無理も無えわ」

「……すまないな」

俺達の付き合いは短くない。俺がヤスの嘘を見抜いたように、ヤスもきつと俺の嘘を見透かしている。

それはきつと、他の7課の面々も一緒だ。わかっているが、深く追求しようとするな。

「まあ、お互い様って事だ」

「ああ。何かわかったら話すよ」

それきり、会話は無かった。

「着いたぞ」

「おう。助かったわ」

下車したヤスは病院へとゆっくり歩き出すが、その4倍くらいのスピードで、病院の中から看護婦がすっ飛んできた。

「ちょっと井上さん！駄目じゃないですか勝手に病院抜け出しちゃ
！」

「いやーすいませんねえ。運動したくなっちゃまって」

「絶対安静なんですよ！？無理に動いたら傷に障りますから、早く
病室へ」

ヤスは引き摺られるようにして病院へと連行されていく。

あいつが苗字で呼ばれているのを久々に聞いた気がするな。そういえば今は看護婦じゃなくて看護師って言うんだっか。

俺はそんな取りとめも無いことを考えつつ、2つの影が消えていく

のを見送った。

3月4日。

飯を中断し、仕事が無くなった俺は刑務所内を散歩していた。軽く社内二ート状態だ。

1255番は何故こんな時間に釈放されたのか。何故あいつは釈放されることを予言したのか。それが無性に気になった。

飯を食っている最中に色々と考えたが、結局答えは出ない。看守長に直接聞いてみるしかないか。

看守長の居場所を同僚に聞くと、どうやらついさっき散歩に出向いたらしい。暇なのは誰でも一緒なのだろうか。

正面の門から外に出て、あたりを見回す。看守長は・・・いた。横断歩道の向こう側だ。何故か書類の束を抱えたまま歩いている。

今を逃せば2度と真実を知ることが出来なくなる気がする。それと同時に、真実を知ってしまうと、何かとてもまずい事になる予感もあった。直感つてやつだ。

俺は歩を早め、気がつく走り出していた。理性より好奇心が勝った。

看守長との距離がみるみるうちに縮まっていく。20メートル、15メートル、10メートル。不意に聞こえるブレーキの音。

突然、目の前から看守長が消えた。追い抜かしたのだろうか。

下を見ると、空を見上げた看守長と目が合った。その眼は驚愕に見

開かれている。

そもそも何故下を向いたら目が合うのか、地面に落ちてはじめて気がついた。どうやら轢かれたらしい。

看守長が駆け寄ってきて必死に俺の名前を呼んでいるが、そんな事は知ったことではない。手元の書類を凝視する。

釈放書類の記名欄。囚人番号1255番。囚人名：井上 仁。どうして釈放されたのか。聞こうにも声が出ない。

叫ぶ看守長と、駆け寄ってくる車の運転手。書類。自分の血。それが俺の見た最後の景色だった。

c a s e . 0 6 e n d

よく晴れた昼、木戸の取調べをブツチして霊園まで歩いて来た。最初は墓の位置すらわからなかったもんだが、ここ最近通い詰めているおかげで迷うことも無くなった。目を瞑ってでもたどり着ける気がする。

比較的新しめの墓石の前で荷物を下ろす。そこは俺も入る予定の墓であり、端的に言つと俺の先祖達が眠る墓だ。

その行為を死者が見ているとも思えないが、今はもう、こつする事しか出来ない。

俺は墓に向かつて両手を合わせ、花を添える。せめてもの弔いのために。

あまりにも唐突に、理不尽に奪われた2つの命に向けて、祈った。

そして命を摘み取った元凶の再来も、また唐突だった。

「保明、久しぶりだな」

振り向くより早く手が動いた。俺の右手に握られたベレッタは、今まさに声を発した者の命を摘み取るうとしている。

「墓前だ。そういう真似はよせ」

銃を向けられて尚、こいつは動じない。俺が撃たない事を知っているかのように。

「撃たねえよ。俺はアンタとは違うんだ」

銃は向けたまま、ゆっくりと振り向く。
黒いスポーツ狩りで俺よりも頭一つ背が高く、顔は糞れ、全体的にくたびれたような印象の男。そして二度と顔を合わせまいと思っていた男が、そこに居た。

case・07 - 絡まる意図 -

「なんでテメエがここに居る。わざわざ捕まりに来たか」

「顔を見に来ただけだ。保明も釈放の情報は掴んでいるだろう？」

「気安く人の名前呼んでんじゃねえよ犯罪者が」

井上仁。無理心中を図り、自らの妻と長男を殺害。その後次男も殺害しようとするも、何らかの理由により逃走。逃走中に通行人を1人殺害。

事件発生から14時間後に警察に出頭し逮捕。無期懲役が言い渡された。ところが3日前、冤罪と判明し釈放。

「おかしいよなあ今になって釈放なんてよお。世の中おかしい事だらけだと思わねえか？なあ」

能力研究施設を襲撃した奴等の要求が、囚人の開放。そのリストに入っていた1人がコイツだった。

その要求が出た直後に釈放。どう考えてもタイミングが良すぎる。出来すぎている。

「確かに、この世界はおかしな事だらけだ。どんどんおかしくなっていく世界を、檻の中から眺めていた」

「妙な言い回しすんな。イライラするんだよ」

こいつとはもう会話しない方がいい。でないと引き金を引いてしまえそうさ。

「俺の前から消える。二度とツラ見せんじゃねえ」

「まだ時間はある。父さんはせめて墓参りだけでもと」

見ると、左手にコンビニ袋を提げている。供え物だろうか。

「どの口が墓参りとか言ってるんだ、アンタにその資格は無えよ。そ

れに」

「アンタはもう、俺の父親じゃねえ」

「・・・そうか」

仁は少しだけ悲しそうな目をし、背中を向ける。

「一つだけ、助言しておく」

「病院には行かず、街へ戻れ。でないと優輝君が死ぬ」

瞬時に頭に血が上る。妄言も大概にしるよこいつ・・・！

「いい加減にしろ！！テメエはいつもそうやってワケわかんねえ事を・・・」

待て。どうしてこいつは俺がこの後病院に行く事を知っている？

「犯人は現時点では絶対に捕まえられない。下手な事をすれば、保明が怪我をする」

断片的に告げられる、警告に近い助言。

「有り得ねえよ。アイツ等は今取調べ中だ」

それにこいつは、能力者じゃない。

俺ですら見えない未来の事象を、こいつは予言した。有り得ない。

「なら確認するといい。尤も保明は今日、携帯を洗面所に置き忘れていたから無理だろうが」

得体の知れない冷気のような感覚が、全身を這い回る。

その感覚は恐怖、あるいは疑念となり、意外な程に俺を冷静にさせた。

知られている。俺しか知りえない事をこいつは知っている。

「・・・何が狙いだテメエ」

「助言だ。とにかく街に行け。走り回っていれば、自ずと先は見えてくる」

それきり仁は振り返ることなく、来た道を引き返していった。

「何なんだよ糞ツタレが」

銃を仕舞い、仁の言っていた事を整理する。

俺が街に行かないと優輝が死ぬ。下手すると俺が怪我する。

優輝がハマして死ぬのは有り得る話だが、俺が怪我する事は100

%確実に有り得ないと言い切っている。

なんせ未来が見えるからな。正確には未来を予測しているだけだが。広範囲に隙間無く爆撃でもされない限り、全て防いでみせる。

「まあ、どの道昼飯時だしな」

あいつの言う事を鵜呑みにするわけじゃないが、病院に行くのにも

街は通らなければならぬ。
誘導されているようでなんとなくシャクに障るが、俺は踵を返し、
街へと走った。

そのあとはまあ、知っての通りだ。

3月9日。第一病院304号室。

「釈然としねえ」

ベッドの上でノートパソコンをカタカタ言わせながら、ここ数日の
出来事を整理していた。

井上仁が突然釈放され、木戸が襲撃される事を予測し、俺に助言。
結果、俺は自分で自分を撃って負傷。これらから導き出される答え
は1つ。

井上仁は、木戸襲撃に加担している。

これなら事前に襲撃を知ることが出来る。木戸を始末、ついでに俺
等を殺すことで円卓の騎士について詳しく知っている奴等を一括削
除、ゴミ箱へポイだ。

その場合釈放の手引きは騎士連中が手配したことになる。あいつ等
の素性がわからない以上、有り得ないとも言い切れない。

他の可能性も考えられなくは無いが、どれも納得のいく理由が見つからない。現状で答えを出すならこれがベターだろう。

ただわからない事が1つある。俺の負傷の原因だ。

俺が撃った弾が時間差で俺に当たった。アホくせえ。んなわけ無えだろ。

犯人に向けて撃った銃弾が全部俺に返ってきたのは事実だが、数秒間を空けて飛んでくる意味がわからない。

恐らくは何らかの能力の介入だが、あの場には俺と優輝、それと犯人しか居なかったことは後の調べでわかっている。

犯人の能力と考えるのが妥当だろうが、実はどう考えても説明のつかない現象が、あの場で起こっていた。

消えたんだ。俺の撃った弾が。どこにも当たらずに、完全に消滅した。

そして気づいたら背中から飛んできた。犯人にこんな芸当が出来るんだとしたら、最初からUZIで蜂の巣にされてただろう。

突拍子も無いことを考える。現場のはるか遠方から俺の撃った弾だけを消し、運動量を変えずに運動の向きを変え、狙った位置に出現させる。そんな事出来る奴なんか居るのか……？

不意に、携帯が震動する。心臓と一緒に体が跳ねた。

俺の未来予測は、人間の動きにのみ作用するらしい。

犬の動きはどうやっても予測できなかつたし、明日の天気もわからない。何より携帯の着信ごときに驚くくらいだ。

普段起きることが予測できている分、こういうイレギュラーな事態にはかなりビビる。

見ると、ジョニーからの着信だった。

『ヤス君、調子はどうだい？』

「大分落ち着いた。能力者ってのは回復能力もフルパワーなんだな。今週中にはもう退院らしい」

『君はここ入ってから大きな怪我してなかったからね。自分の回復力に驚いたろう』

「そりゃ三日かそこらで傷塞がったら誰だって驚くだろ」

『それもそうか。木戸については、何かわかったかい？』

「そういえばあいつの経歴漁ってたんだったな。報告しとくか。」

「ああ、4課の情報網もザルだな。こんなンも見抜けねえとか給料減らせよ」

「どうやら木戸は18歳から一貫して日財勤務らしい。教師ってのはウソだ」

『だろつとは思ったけど、よく裏が取れたね』

「生憎暇だからな。ここ十年の教員リストと、木戸の周辺情報を片っ端から調べた」

『君の情報収集能力には舌を巻くよ、4課に入ったらどうだい？』

「その4課から俺を引っ張ってきたのは誰だったか思い出せよ」

『そうだったね』

糞野朗のせいでお先真っ暗だった俺を拾い、4課に入れたのは他な

らぬジョニーだった。

『この事件は何か臭う。長引きそうだし、今のうちにゆっくり休んでね』

「とか言いつつパソコン渡すあたり抜け目無えよなジョニーは」

『給料分は働いて貰わないとね。ただ、無理はしなくていいんだよ？』

「わかってる。今は体の方は休ませて貰うわ。そろそろ切るぞ」

『お大事にね』

再び思索にふける。

釈放の根回し、木戸襲撃の意図、井上仁の予言めいた助言、一度消えた銃弾。

全てを関連付けて考えるのも間違っているかもしれないが、これらは一貫性のある事柄な気がしてならない。

療養中の宿題は、思ったより難易度が高い。

洗面所に向かい、顔を洗う。寝起きは最悪だった。頭が痛む。ひどい吐き気に見舞われたがなんとか堪え、病室のベッドへと戻る。今見た夢の内容はもう覚えちゃいないが、症状からして昔の思い出でも引つ張り出してしまったんだろう。

過去を振り返ったところで得られる物は少ない。問題は、今どうするかだ。

木戸の身辺調査は経歴を偽っている以外、目立ったものは見つからなかった。ジョニーの報告によると木戸襲撃犯の足取りも掴めていないらしい。

「まあ、なるようになるか」

そろそろジョニーの定時連絡の時間だ。報告することといたら、俺の退院が明日に迫っている事くらい。要するに何もわかつちやいない。

退院したらまず煙草買わないとなあとか、ラーメン食いたいなあとか呑気に考えつつ、着信を知らせる携帯電話を手を取った。

「もしもし、ジョニーか」

3月15日。7課会議室。

今日の会議室は普段以上に空気が張り詰めており、それに比例して煙が濃い。

長机を2つ向かい合わせにしてくっつけ、一同は麻雀に興じていた。

「……はい」

「よいしょー」

「よきたっ！リーチ！！」

「通らん。ロン、白のみ」

「テメエ！俺の四暗単騎をそんなゴミ手で……！！？」

「切り方が判り易いんだよ直毅は。自分の手しか見えてない」

「そもそも単騎ならリー棒投げる必要無いけどねー」

「そこはお前アレだ、ゲンカツギっつーの？」

「……目立ちたいだけでしょ」

「おう武信ムカつくなお前。正解だよf x x k野朗」

「もっと言うと、それを切らなくてもツモでアガれたぞ。ツモ三暗トイトイだ」

「あ、あどいつもこいつもうるせえ！俺はリーチと役満しかわからねえんだよ！！」

灰皿は既にフィルターで溢れかえり、灰皿代わりの空き缶も既に人数分消費している。いよいよもって部屋の視界と空気、直毅の言葉遣いが悪くなっていた。

「あの、ちょっといいかな？」

「ん、どうしたジヨニー。次で替わるか？」

「いや、もう時間がね・・・」

掛け時計を指差すジヨニー。煙でよく見えないが、短針が重力に従って真下を向いているあたり、恐らく18時を回っている。

「おいおいもうこんな時間かよ。俺等何時間遊んでんだ？」

「聞き込みやら調査やらが終わってからだから、5時間くらいかな」

「休日とはいえ遊びが過ぎたな。帰るぞ」

優輝は雀牌を手早く片付けると、我先に帰り支度を始めた。

「みんな車だっけ？俺今日は歩きだし先帰ってるわー」

「あいつ片付けくらいしてけよな・・・」

ひよこは直毅の尤もらしい意見を聞き流し、そそくさと会議室を出て行く。

「しかし煙がひどいな。ジヨニー、換気扇はまだ直らないのか？」

「一応回してはいるんだけどね。調子悪いみたいだ」

天井に設置された換気扇は稼働こそしているが、滞留した紫煙を運ぶことを放棄している。故障しているのはこの部屋だけではないよ
うで、ビル内でも問題視されつつあった。

「……動いてるって事は多分フィルターだよな。今度調べてみる
？」

「だなあ。まあ片付けも終わったし、今日のところは帰るつや」

各々帰り支度を済ませ、エレベーターで駐車場へと向かう。

「帰りにどこか寄っていくかい？君達昼ご飯抜いてるみたいだし」

ジヨニーの提案に皆は目を輝かせると、

「いい考えだな。ラーメンでも食いに行くか」

「……最近出来たところ行ってみる？隊舎とは逆方向だけど」

「つつても俺70円しか無えよ。ジヨニー頼むわ」

「はいはい。給料から天引きしておくね」

「それくらい出してくれないだろお・・・?」

「駄目だよ。お金に関してはしっかり管理しないとね」

他愛ない会話をしつつ、ジョニーはラーメン屋へと車を走らせた。

しばらくぶりのラーメンは、スープの一滴まで腹に染み渡った。

最近ラーメン屋が乱立し、その度に足を運んでいたのだが、あそこまで美味しい塩ラーメンを食べた記憶が無い。

「いやーたらふく食った」

直毅も満足そうに腹を撫でている。3杯食った上にライスもつければ腹も満たされるだろう。

「あの店は久々の当たりだったな。また行ってみよう」

「・・・そうだね。今度はひよことヤスとぐんまも連れて」

「さて、みんな着いたよ」

ジョニーの声に、ふと顔を上げる。フロントガラスの向こうに隊舎が見えた。

ここ数日は働き詰めで、まともに休日をごっこしていなかった。たま

にはこうやってゆっくり過ごすのも悪くは無いな。

俺達は車から降りると、ジヨニーと軽く挨拶を交わした。武信と直毅は疲れていたらしくさっさと隊舎に入ってしまったが。

「いつも済まないなジヨニー」

「いいよ。僕は現場だと大して動いてないからね。休日くらいは足になるよ」

人一倍働いておいて、嫌味無くこの台詞が吐ける人間。それが彼だ。この人の下で働いてもう3年近いが、未だにジヨニーには勝てる気がしなかった。

「その分現場ではこき使ってくれ。割に合わん」

「義理堅いのもいい事だけど、先輩の厚意は素直に受け取っていいんだからね？」

不意に響く携帯の着信音。ジヨニーのものだ。

「そういえばヤス君に連絡いれてなかったか。それじゃ優輝君、明日までゆっくり休んでね」

携帯を開きつつドアのウィンドウを閉めたジヨニーは軽く手を挙げ、車を走らせた。俺はそれを見えなくなるまで見送る。休日のよく見るやりとりだった。

夕陽に向かう車のシルエットの頭上、歪な形状の塊が落ちてきたの

を、俺は見逃さなかった。

塊は車に直撃し、それきり車は動かなくなった。

徐々に落ちていく夕陽が車だったものの影を伸ばし、俺の足元にまわりつかせる。

それはさながら、血溜まりのようにも見えた。

3月15日。 武警隊舎前。

「ジョニー!!」

俺は車へと全力で走る。呼びかけには、すぐに反応が返ってきた。

「僕は大丈夫だ！ヤス君が”見て”くれている！」

ヤスが、見ている。

人間が見守るだけで状況を変える事など到底出来やしないが、その”見ている”人間がヤスならば、話は変わってくる。

ジョニーはそのまま路地へと足を向け、走り出した。急いで後を追う。

車の脇を走り抜ける時に、車へと落下した塊を横目で追う。どうやら工事現場の廃材を寄せ集めたものらしい。

路地では流石に大きなものを降らせるのは無理なようで、先程のような廃材が降ってくる事は無かった。

しかし走っている最中にも降り注ぐゴミ箱、鉄筋、ガラス片、物、物、物。

ジョニーはそれを横っ飛びで、立ち止まって、時には道を変えて避ける。携帯を耳から離さないあたり、ヤスの指示は的確なのだろう。

しかしヤスの能力は、実際に肉眼で物を捉えていないと発揮できないはずだった。こんな狭い路地の中、ジョニーを常に見続けていられるとしたら、それは俺か空だけだ。

見上げるが、見えるのはビルの窓と暗くなった空だけ。どこから見ている・・・？

ひとしきり考えるが答えは出ない。それよりも今は、この状況を打破する事が重要だ。重要だが、有効な打開策が無い以上、今はヤスに頼って走り続けるしか無い。

どうしてこんな事になっているのか。考えられるのは襲撃。それもかなり規模のでかいものだ。

手で触れずに物を投げる。あるいは吹き飛ばす。こんな芸当が出来る普通の人間は居ない。

そもそも能力者の仕業だったとしても、これを引き起こす程の能力を持った者を俺は一人しか知らない。

木戸を襲った少女。立体駐車場で、車を吹き飛ばした少女。

恐らくこれは彼女の能力だろう。だとして、何故ジョニーを狙っている？

彼女とジョニーとは何ら接点が無いはずだ。直接彼女の姿を見たのは、俺とヤスだけ。特に俺は、はっきりと顔を見ている。

そして、気づいた。何故俺が狙われなかったんだ・・・？

15分くらい走っただろうか。狭く入り組んだ路地を全力疾走しているため、さすがに息があがってくる。さっきのラーメンが逆流しそうになるのをなんとか堪え、必死でジョニーの後ろに食らいつく。

幸いなことに姿を見失ったとしても、ジョニーの通った道は一目見ただけでわかるようになっていた。明らかに荒れているのである。

追跡開始から20分。遂に終わりが見えた。

辿り着いた先は海に面した倉庫街。大川製鉄所制圧の時に通った道だ。海に面しており、近くにはコンテナや資材を積んだ船が停泊している。

その道の中央に人影が2つ。1つは息を切らしたジョニー、もう1つは、

「食後の運動っていうのもたまには良いもんでしょ？」

黒いフルフェイスを被った小柄な姿。以前と違うのは、上着が武長の白いダッフルコートという点だろうか。

「さすがに、ちょっと、ハードすぎると、思うよ……」

「それにしてもすごいね。ウチの攻撃全部避けてここまで来られるなんて、ちょっと想像してなかった。まるで未来が見えてるみたい」

「まるでじゃなくて、本当に見えているからね」

ジョニーは息を整え、携帯に話しかける。

「ヤス君ありがとう。助かった……あれ、切れてる」

ズレた眼鏡をなおしつつ、ヘルメットの少女と対峙した。

「優輝君、この人が木戸を襲った犯人かい？」

ヘルメットを外さないことにはわからないが、体格や声からして恐らく本人だろう。俺は頷く。

「ありがとう。さて、貴方を公共物破損、及び殺人未遂の重要参考人としてこちらで保護します。ご同行願えますか？」

「保護つて。逮捕じゃないの？」

少女は飄々とした態度で応じる。

「まだ確たる証拠が無いからね。まあ、調べれば色々出てくるだろうし」

「断つたらどうなるの？」

少女がポケットに手を突っ込む。

「・・・断らせない」

俺はベレッタを取り出し少女に向けた。やはり子供に銃を向けるのは抵抗があり、照準が定まらない。

「ダメ。あんたは余計なことしないで」

少女がポケットから取り出したのは、無数の薄い金属片。それらを手から零した直後、金属片は既に俺の眼前へと迫り、銃を構えた両手と顔の手前で静止した。

「カッターの刃だよ。ちょっとしたでも変なことしたら、それ全部刺さるから注意してね」

少女はけらけらと笑う。

俺はこの少女を少し甘く見ていた。今まで大きな物を適当に飛ばしていた事で、精密な動作は苦手だと踏んでいたのだ。

「さてと。あんたには聞きたい事があるの」

少女はコートの背中からUZIEを取り出し、ジョニーへと向けた。

「奇遇だね。僕も君にいくつか質問があるんだ」

「ダメ。ウチの質問が先だよ」

「ウチ等はね、人を探してるんだ。脚本家さん。知らないかな？」

質問の意味がよくわからない。何かの隠語だろうか。

ジョニーも同じなようで、少し考える素振りを見せた後薄く笑い、

「ああ、知ってるよ。どうして僕が知っていると判ったのかな？」

涼しい顔をして嘘を吐いた。

「そんな事はどうでもいいの。どこに居るの？」

「簡単には教えてあげられない。まず僕の質問に答えてくれたら教えるよ。約束する」

「……まあ、どの道あんたは地獄行きなんだし。いいよ。何が聞

きたいの？」

少女は案外単純なようで、容易くジョニーの口車に乗せられている。時間稼ぎをしてくれている間に打開策を考えなければならぬ。

ここから少女まで10メートル弱。銃撃すればまず外さない距離だが、迂闊に発砲は出来ない。下手をすればヤスの二の舞だ。

押さえ込むにしても、カッターの刃が邪魔だ。この2つの問題をどうにかしなければ……。

「まず君の能力についてだ。発射された銃弾を消したりする事は可能なのかな？」

随分とストレートに聞いたものだ。交渉術には詳しくないが、こういう時はもつと会話を引き伸ばすべきなのではないかと思う。

「はあ？出来るワケ無いじゃんそんなの」

少女が呆れたような声を出しているが、返答に意表を突かれたのはこちら側だった。

「なら、銃弾の軌道を変えたりとかも出来ないのかい？」

「当たり前じゃん。そんなん出来たらウチ無敵だし。マジ意味不なんですけど」

ならばヤスが負傷した説明がつかなくなる。少なくとも彼女の能力では無いらしい。

とにかくこれで第一条件はクリアされた。発砲は、恐らく可能。次はこの刃をどうするか。

「じゃあ次の質問だ。何故僕は君に殺されかけているのかな？」

「質問は一回までだよ。それに、あんたは罪人なの。自分が一番よくわかってるでしょ？」

「人に怨まれる覚えは結構あるからね。職業柄」

「めんどくさいねあんた。いいから脚本家の居場所を教えなよ。早く」

先程までの態度とは打って変わり、少女の声に苛立ちが混じる。当然そんな意味のわからない質問に答えられるわけも無く、倉庫街には波の音と、汽笛の音が響くばかりだった。

「まあいいや、次の人に聞くから。さよなら」

少女がトリガーに指を掛ける。

この際負傷覚悟で突っ込んでいこうと覚悟を決め、顔を伏せていた俺は少女へと向き直った。

いつからそこに居たのか、少女の後方に懐かしい顔を見つけた。

「彼に聞いても無駄だ」

随分と痩せたようだが、あれはヤスの……。

「……井上仁。最優先。殺して！早く！！」

少女はこちらを無視して振り向くと、全力で走り出した。仁に吸い

寄せられるようにして、金属の軋む音と共に、停泊していた船から
無数のコンテナが降り注ぎ、埠頭を襲った。

場に動きがあったことにより、第二条件である刃の問題もクリアされた。

眼前の刃は何よりも速く仁へと向かっていったが、仁は身体を反らすだけでそれらを避け、少女を引き付けるようにして走り去っていく。

「待て！」

背中を向けた少女の足に向け発砲するが、コンテナの破片に弾丸を弾かれる。おまけにコンテナが埠頭に降る衝撃で揺れがひどい。まともに立っているのも難しい状況だ。

なんとか2人を追おうとするものの、無造作に積み上げられたコンテナに行く手を遮られている。

「くそつ・・・！！」

「優輝君後ろだ！」

振り返ると、地面を転がりながら俺達へと迫るコンテナが目に見えた。

コンテナは地面を削り取る度に軌道を変えている。大きさから見て直撃すれば大怪我じゃ済まされない。

右は倉庫のシャッター、左は船。俺だけならば上に跳んで回避できるだろうが、ジョニーは一般人だ。彼を抱えた上で跳ぶと、恐らく高さが足りない。

考えている間にもコンテナは距離を詰めてくる。もう悩んでいる暇は無い。

俺はジョニーの元へ向かおうと後ろを向くが、肝心のジョニーが居ない。
呆気にとられる暇もなく、俺は何者かに襟首を掴まれ、背中から地面に叩きつけられた。

この分だと、俺等が少しでも遅れていれば2人ともお釈迦だったな。
俺の記憶力に感謝だ。

「馬鹿、お前が死ぬぞ！！」

ジョニーを抱えたまま倉庫に飛び乗ったひよこが喚いている。

「なんともねえよ」

目の前にでかい金属の箱が迫っているが、俺は特に気にするでもなく、その場に入ったままだ。むしろ下手に動くほうが危ない。
コンテナは突如として巨大な8枚の板へと形を変え、俺と優輝の両脇と上方へと吹き飛んでいく。優輝があのだタイミングでジャンプしてたとしたら、確実に直撃コースだった。

コンテナ同士の接触音がしばらくの間続き、周囲が先程の静寂を取り戻したあたり、

「そのコンテナだけ傷んでたのかねー。バラバラやん」

「こっちはなんとも無いけど、お二人さん大丈夫かい？」

ひよこが倉庫の上から頭だけ出して様子を伺っている。

「もう飛んでこねえから降りて来い。あと優輝が気失ってる」

首根っこ掴んで思いつきり倒した影響か、優輝は地面に伸びていた。

「しっかし派手に散らかしたねー。これ誰が片付けるん？」

積み上げられたコンテナの山を仰ぎ、溜息を漏らすひよこ。

ギリギリで追いついたから詳しくは見えていないが、どうやらメットの女は井上仁を殺そうとしてるらしい。

「今はそれどころじゃねえだろ。とりあえずジョニーは大丈夫そうだが」

「ああ、何度も済まないねヤス君」

「気にすんな。ひよこ、メット女はどこ行ったかわかるか？」

こいつの能力なら、ある程度の範囲なら索敵可能なはずだ。

「わっかんねーなあ」

拍子抜けする。なんのために連れてきたと思ってやがるんだコイツは。

「いや、途中で偶然会ったから車乗っけただけじゃん？第一ジョニーの安全確保でそれどころじゃなかったからさ。それに」

積み上がったコンテナを指差す。

「こんなんするほど必死に追ってるなら、荒れてる道を辿ればいいんじゃない？」

日も完全に落ち、路地裏は薄明るい裸電球が照らす灯りで、辛うじてその輪郭を保っている。

ジョニーと優輝は俺達の乗ってきた車に置いてきた。今頃は恐らく状況説明に追われているだろう。

ひよこの言ったとおり、倉庫街から続く道に荒らされた通りを一本発見した。その道を駆け足で辿っている最中だ。

「いやー疲れた。ちょっと休まない？」

「バカかお前は。犯人逃げちまったらどうすんだ」

「もう結構時間経ってるし、どうせ見つからないっしょー」

「それでも探すんだよ。仕事だからな」

「さすがに休日なんだからさー・・・」

ひよこの愚痴を聞き流しつつ、荒れた裏通りを走る。始めは遠くの方でガンガン喧しい音が聞こえていたが、それももう聞こえない。逃げられたのか、あるいは物を投げる必要が無くなったか。

「でけえ通りにぶつかったな。ひよこ、探せるか」

かなりの距離を走ったらしく、街中の表参道まで来てしまったようだ。

「はいよー」

軽い返事を返し、目を閉じるひよこ。

「いねーわ」

「早いなオイ。もっと本気出せってんだ」

「出したって。少なくともその通りに怪しい奴は居ないし、近くの裏通りも至って普通の荒れ具合だわ」

普通の荒れ具合という言い回しが気にかかったが、突っ込むのはやめておく。

「つー事は、人ごみに紛れて逃げちゃったか・・・」

「どっするん？まだ探す？」

通りに出てみたはいいが、人の流れが早すぎる。これじゃ探しようも無い。

「いや、帰るわ。走り回って疲れたしな」

「だなー。車は現場の人が回収してるだろうし、俺達は直接会議室行こか」

肩を回しながら背伸びし、俺へと振り返る。

「ところでヤス、さっきの電話の人についてだけど」

聞かれるとは思っていた。何れにせよ、いつかはバレル。

「明日話す。今はまず帰ろつや」

「いや、この後絶対召集かかるでしょ」

「俺の退院は明日だかな」

「そついう問題じゃ無いと思っただわー・・・」

ネオンが照らす表通りを、俺達はゆっくりと歩き出す。

3月15日。事件発生から数時間前。病室。

「もしもし、ジヨニーか」

『私だ』

通話を切る。すぐさまコール音が鳴る。よく見ると、ディスプレイには非通知と表示されていた。

『聞いておかないとお前とお前の仲間に不利だぞ、保明』

うんざりする。どこで番号を調べたのか、井上仁は俺に再びコンタクトをとってきた。

「なんの用だ。今気分悪いんだわ。主にオマエのせいだな」

『私を邪険に扱うのは構わないが、こちらとしても大事な用件だ』

「さっさと話せ」

また誰か死ぬとか言い出したら今度こそ本当に切ってやるつもりだった。

『3秒後、外の患者同士が廊下でぶつかり、点滴が倒れる』

がちゃん、と音がした。廊下に顔を出すと、どうやら患者同士がぶつかったようで、その拍子に点滴が倒れたようだ。すぐさま周囲を見渡すが、仁の姿は見えない。

「・・・何しやがった」

口にしてみるが、恐らくコイツは何もしていない。

『これからの私の発言を信用してもらったためだ。よく聞け保明』

『ジョニー君、と言ったか。15分後、彼に電話をするだけでいい』

「ジョニーか」

アイツの言うとおり、ジョニーからいつもの時間に連絡が来なかった。

連絡の遅れた理由は、ラーメンを食いに行っていたから。そう聞かされた。万が一の時のため、既に病院のロビーに待機している。

『もしもしヤス君？いやあごめんごめん、今さっきまで』

「ラーメン・・・食いに行ってたのか？」

ここでのジョニーの返答次第では、俺が動かなければならない。否定の言葉が返ってくることを強く願った。

『よくわかったね。優輝君あたりに聞いたのかい？』

結果は肯定。またしてもアイツの言うとおりになってしまった。

悔しかった。信じたくない奴の言葉を信じなければならぬ事に。

そして、これからその言う通りにしなければいけないという事

実に。ただただ唇を噛んだ。

「今すぐ車から降りろ」

『え？』

「今ジョニーの車を見てる。降りなきゃ死ぬぞ」

車のドアが開く音。遅れて聞こえてくる破壊の音。自動車事故のそれに似ていた。

「クソが!!」

すぐさま病院のロビーを飛び出し、前方を横切る車に向かって全力で走った。

車の主はすぐにこちらに気づいたようで、停車と同時に後部座席のドアが開く。

「お客さん、どちらまで？」

運転手は帽子を被るわけでもなく、制服を着ているわけでもない。そもそもこの車はタクシーじゃない。

「ふざけてる場合じゃねえんだよひよこ。隊舎までフルアクセルだ」

「なーんかタダ事じゃないね」

ドアを閉めた直後、凄まじいGが身体を襲う。けたたましいタイヤ

の音と共に、車は急発進した。

「そのまま路地裏に走れ。携帯は手放さないように頼む」

『言われないでもね！ナビゲート頼むよ！！』

ひとまず、アイツの指示はここまでだった。しかし事態を見る限り、これで終わってくれそうも無い。俺は頭を抱えた。

「たまたま病院の近く通ったから寄ってみたんだけど、まさか出てくるとは思わなかったわー。どしたん？」

「後でいくらでも説明してやる。今は飛ばせ」

「はいはい。・・・ん、電話だ。ヤス代わりに出してくれ」

ダッシュボードから携帯をスルーパスで投げるひよこ。電話の主はただ一言、

『右に曲がれ』

と告げる。

「ジョニー右に曲がれ！」

『オーケー』

鉄筋が崩れたような音が響いている。

『立ち止まれ』

「一旦止まれ!!」

『了解。っと、危なかった』

ガラスの割れる甲高い音が耳に障る。

『左だ』

「左に曲がれ!!!」

ジヨニー側の携帯からは、何かの爆発音やら衝突音が断続的に響いている。

ちなみに今俺は両手で両耳に携帯をあてがい、左の携帯から聞こえた内容を反芻して右の携帯に伝えている。かなりシユールな構図だ。

「ヤスごめん、真剣なんだろうけどギャグにしか見えない」

バックミラーに映るひよこの口元が明らかに笑っていた。

「ああもう面倒臭え!!」

思わず携帯を投げ捨てたい衝動に駆られたが、どうにか抑える。今は人命優先だ。

『そのまま直進しろ』

「真っ直ぐだ!」

『っはあ、ッはあ・・・』

気がつけば喧しい音声は影を潜め、息を切らしたジヨニーの吐息と、汽笛の音が響くだけだった。

『これで私の指示はお終いだ。あとはこちらで処理する。ではな』

「処理ってどういうことだ！おいクソ野郎！！」

抗議の声を上げるが、既に通話は切れている。

「ざっけんな！！ジヨニー生きてるか！？」

返答が無い。代わりに聞こえてきた声に、俺は覚えがあつた。

『食後の運動っていうのもたまには良いもんでしょ？』

ヘルメットの女。木戸と優輝と俺を殺そうとした女。ソイツがジヨニーの目の前にいるらしい。

つまり俺は、いや仁は、襲撃を避ける指示に見せかけ、コイツの元へジヨニーを誘導した・・・？

「ジヨニー聞ってるか！今すぐそこから離れ・・・」

携帯から鳴り響くアラート。電池切れを知らせる無機質な電子音。

「なんでこの重要な時につ・・・！」

「着いたぞヤス。うーわ、車グツシャグシャヤン。なにあれ」

車を停止させ、降りて確認しに行こうとするひよこを呼び止める。

「待てひよこ！ここから15分程度で・・・クソツどこだよ！！」

「落ち着けて。俺まだなんの説明も受けて無いんだけど？」

説明なんか今はどうだっていい。15分間全力で走ったとして、行ける範囲は限られる。限られるが、いくらなんでも広すぎる。風漬しにそのあたりを走り回ったところで、間に合うとは思えない。

「ジヨニーに直接聞けばいいだろうよ」

「電池切れなんだよ！クソツたれ、こうなるなら切れる前に聞いておけば・・・？」

電話の切れる直前に聞いた音。汽笛の音。あれは電車じゃなく貨物船かなにかの音だ。

「港か・・・？ひよこ、隊舎から15分全力で走って港に辿り着けるか？」

「可能。ただ港つつつても範囲が広いねー」

必死に仁の方向指示を思い出していく。最初にその路地を真っ直ぐ、8秒走って左、12秒経ってからその次を右、そこから・・・。驚くほど正確に曲がった方向と時間を把握していたため、寒気を覚える。俺はこんなに物覚えが良かったか？

「すげーな、焦ってた割によく覚えてんじゃん」

考えが口に出ていたようで、ひよこに感心される。特に気にも留めずに思考を続けた。

「最後に・・・直進だ。ひよこ、今の道順を走った場合、着く場所はどこになる」

「港だねー。大川製鉄所の近く」

いくら聞こえていたとはいえ、頭の中に正確な地図が入っているコイツも大概だな。

「世の中にはね、自分の代わりに地図を覚えていてくれる有難いもんがあるのよ。カーナビって言うんだけど」

指差す先の小さなモニターに、目的地が示されていた。

「多分ジョニーはそこだ。恐らく木戸襲ったヤツに絡まれてる。急ぐぞ」

「よっしやい」

隊舎の横を全速力で通過し、車は海へ出る道へと進む。

case . 07 end

3月8日。警視庁。

「夜見川課長、事件発生直後の署内にいた者への聴取、完了致しました」

「んー、わざわざありがとー前田さん。で、どうだったの?」

「それが、やはり誰一人犯人を見ていないようで・・・」

「ふーん。前田さんはどう思う?」

「どう、と言いますと?」

「0点」

「・・・は?」

「その返答、0点。質問に質問で返すのは馬鹿の証拠だ。いいか、少なくとも署の入り口から2階の突き当りまでの区間には少なくとも4人居た。そいつらのすぐ前を犯人が通過してんのが監視カメラの映像に残ってたんだ。それについてどう思うか聞いている」

「恐らくは犯人による署の人間への視線誘導か何かかと考えられます。あるいは犯人がチームを組んでおり、外部から能力を行使し、犯人を視界から消したものと」

「よし、それでいい」

「へ？」

「今回の不始末の説明、全然考えてなくてさー。助かったよ前田さん」

「はぁ・・・？」

「ああ後、国が確認できてる一般能力者から最重要指定能力者までリストアップしてね。あとで調べるから」

「直ちに」

それだけ言うと、前田は踵を返して歩いていった。

「はぁ。どいつもこいつも無能、か・・・」

一言呟き、俺は会議室へと足を向けた。

3月16日。正午。7課会議室。

「んで現場に俺達が着いたら、なんとコンテナが空中浮遊してたつてわけだ。世の中不思議なこともあるもんだねー」

ひよこがわざとらしく驚いた素振りを見せる。

その後俺はヤスに気絶させられ、目を覚ましてからは裏路地を全力疾走中に呼んでおいた応援に状況説明をし、犯人の目撃情報を集め、今に至る。ちなみに徹夜だ。

「・・・ごめん。もっと早く異常に気づけばよかつたんだけど、外出たら2人とも居なくて。携帯も繋がらないし」

「気にするな武信。仮に着いてきていたとしても、あの状況では何も出来なかつた」

「ンで？犯人見たヤツは居たんかよ優輝」

退院して間も無く駆り出されて不機嫌そうなヤス。

「ヘルメットにコート姿の目撃情報は得られなかった。路地での音についても聞いたが、不良の喧嘩だと思って聞き流していたらしい」

「まあ、それが普通だわな」

直毅はふんぞり返って天井に煙を吐き出している。

「井上仁についてはどうなんだ。優輝と身長同じぐらいだし、結構目立つと思うんだがなあ？」

「そっちは1課と2課が追っている。昨日の時点で予約していたホテルをキャンセルし、そこからの足取りは掴めていない」

「なんか出所してから延々ホテル梯子してるっばいねー。今回の事件より前から追われてるみたいだけど」

ひよこが説明を補足する。

井上仁は出所してからの12日間、8箇所宿泊施設を転々としているようだ。そして仁がチェックアウトしてからすぐ、仁の身内と名乗る人物から所在を聞かれているらしい。

「以上、ホテルマンさんの証言でした」

「……その井上仁の身内っていうのは、本物じゃないんだよね？」

「当たり前だバカ。アイツは親戚の類とは絶縁してるし、犯罪者を
出所早々ストーリーキングする物好きな身内なんか居てたまるか」

ヤスが冷たく言い放った。

「ひよこ、そいつらについての情報は？」

「4課が血眼で調査中。まあ、1人はすぐ割れたみたいだけどね」

そう言うと、スクリーンにホテルの監視カメラ映像が映される。カ
ウンターで何やら話し込んでいる男性。男性が振り向き、顔が見え
たあたりで映像が止まった。

金色に染め上げられた短髪、色黒。サングラスをかけており、左耳
に大量にピアスが付いており、土木作業員のような作業着を着用し
ている。

「これをあらかじめ拡大したものがこちらになります」

夕方の料理番組のような手際の良さで画面が切り替えられ、男性の
顔写真と、詳細なデータが表示される。

「新山晃にいざま あき、所属は公安だねー」

「公安……？同業者じゃねえか。なんでそいつらが仁を追ってん
だ」

武警と公安。業種的にはかなり近いが、能力者絡みの犯罪はだいた
いがこちらに回される。反対に一般人によるテロなどは向こうが処

理しているようだが、お互いの立場上あまり情報が入ってこない。

「それも調査中。一日二日で事件は進展しないものなのだよ直毅君」
「わかってっけどよお。つーかどう見ても土木のおっちゃんだろこいつ」

「井上仁が何故公安に目をつけられてるかってのいうのは後々わかるとして、だ。まず目先の事をどうにかしないとね」

ジョニーが切り出した。

「僕がヘルメットの女に襲われた。事前にその情報を井上仁から聞いていたヤス君が僕を犯人の元へ誘導、一悶着あった後に井上仁が出現し、犯人は仁を追うために逃走」

これが大体の流れだね、と区切りを入れる。

「まず何故僕が襲われたのかだね。僕自身に心当たりは無いんだけど」

「脚本家がどうか聞かれていたが、あれについて何か知ってるか？」

「うーん……あの時はその場凌ぎで答えただけだったし、なんなんだろっ……」

頭を抱えている。

「それもわかんないけど、犯人の能力自体もおかしなもんだと思うけどねー」

考えても答えが出ない事を察してか、ひよこが話題を切り替えた。車が潰された場所から犯人と接触した場所まで約8キロ、その間俺達は全力で走っている。人影は見えていないし、気配も無かった。犯人は恐らく高校生程度の年齢と考えると、能力者という条件を入れても、俺達と並走しながら能力を使えるというのはおかしい。しかも現場に着いたとき、犯人は息一つ切らしていなかった。遠距離から能力を行使できると考えるのが妥当だろう。

「・・・仮に能力の範囲が8キロもあつたら、僕達の手にも負える相手じゃない気がするんだけど・・・」

そんな距離なら狙撃も不可能だ。爆撃機でも張り合えるか怪しくなってくる。

「しかも2トンのコンテナ何個もぶん回せんだろ？無理だわ。世界の終わりだわジーザス」

範囲が8キロ無かったとしても、カッターの刃を10メートル程度移動させたり、50メートル先のコンテナを操ったりしている。少なくとも半径100メートルは危険と見ていいだろう。

「話脱線してンぞ。どうして犯人がジョニーを狙ったかつてのもわかんねえが、俺はそれ以上にアイツの行動が終始わかんねえ」

井上仁の行動。ジョニーを犯人の襲撃から救ったかと思えば犯人の元へと誘導し、更に自分を囿にして俺達から犯人を遠ざけた。ように見える。

「予め事件の発生がわかってたんだ。ジョニーを助けるだけなら、別に犯人に接触させる必要が無えだろ」

「……逆に言うと、助けなくていいなら電話かけてくる必要も無いね。仁が優輝やジョニーを殺そうとしたっていう線は無いと思う」

「ならなんでわざわざ優輝とジョニーをあそこまで連れてった。逃がすだけなら逆方向でも良かったろうが」

「……それは……」

武信が言葉を詰まらせる。その問いに対する回答を出したのは、意外にも直毅だった。

「会わせた上で助ける必要があったんだろ。どうしてそうしたのかとか聞くなよ？俺にもわかんねえしなあ」

曖昧な回答だが、今出せる答えの中で最も正解に近いのかもしれない。

ジョニーに死んで欲しいのなら助け舟を出す必要は無い。恐らく最初の車への一撃で事は済んでいたはずだ。

だが助けたにも関わらず、一時的に俺達を窮地に追い込んだ理由。

犯人と俺達が接触する必要があったのか、あるいは別の理由で……。

「ダメだな。いくら考えた所で、答えは出ない」

俺達は心理学者じゃない。考えるのは別の連中に任せるとしよう。ヒントが少なすぎるなら、自分達で見つければいい。

「俺達も動くぞ。俺とヤスとひよこは現場に戻って犯人の手がかりを探す。武信と直毅は仁の足取りを追ってくれ」

俺が指示を出すと、各々が調査の準備を始める。

「あの、僕はどうすれば」

「待機だろ。よくわかんねえけど狙われてんだろ？」

直毅はP90を小脇に抱え、マガジンを鞆に詰めていた。何をしに行くかわかっているのだろうか。

「だろうね、ははは・・・」

「井上仁は見つけ次第重要参考人として保護しろ。本人に直接聞いたほうが早い」

「・・・こっちはどうするの？大体の捜査終わっているようだけど」

「2課と合同で捜査だ。見落としが無いとも限らない」

「まあ、部屋に籠ってるより動いてた方がマシだな。行くぞ武信」

一通りの銃器を鞆に詰めた直毅は、武信と共に会議室を出て行った。

「さて、俺達も行きましようかねー」

「運転は優輝で頼むわ。こいつに任せたらいつか事故ンぞ」

「急がせたヤスが悪いだろ！？俺だって普段は安全運転で」

「言い合いは車の中でな。それじゃあジョニー、留守番は任せた」

「了解。何かあったら連絡するね」

13時30分。車中。

「結局何も見つからねえもんなあ」

「・・・そうだね」

2課との捜査を早々に切り上げた僕と直毅は、街中を車で適当に流している。

仁さんの足取りは未だ掴めず、公安の動きもわからず仕舞い、優輝達の連絡も無い。

「・・・まあ、まだビル出てきてから時間も経ってないから。焦らずに」

「そうだな」

直毅はギアを1段上げると、首都高速へと道を切り替えた。

「・・・どこか行くの？」

「いや、そこらへんぐるぐる廻ってんのも暇だろ？ドライブ付き合えよ」

「・・・後で怒られても責任取らないよ」

バレねえから問題無えよと言いながら、カーステレオを操作する直毅。70年代のハードロックが大音量で流れている。少しうるさい。

「そついえばよお。ヤスの事だが」

「・・・何か気づいた？」

「いや、あいつの家庭環境のことだ。高校じゃクラスも違ったからどうか知らねえけど、あいつの家仲良かったよなあ？なんであんなことになっちゃったのかって。ちよつと思つてな」

あんなこととは、恐らく無理心中の話だろう。

「・・・僕も、正直納得いってないよ」

ヤスの家は高校の頃も昔と変わらず夫婦円満だったし、兄弟仲も良かった。ヤスの兄さんとは、小学生の頃遊んでもらったのをよく覚えてる。

事件前日にも、家族旅行に行くから3日間欠席するって届けを担当に提出していた記憶がある。その後すぐに、無理心中のニュースが新聞で報道されていた。

「あの時期は平和だったからもつとでかく報道されると思ってたんだがなあ。事件から裁判まで随分静かだったな」

「・・・ヤスへの配慮じゃないの？未成年だったし」

「そんなもんかねえ。マスコミはそういうの御構い無しだと思うが」

「・・・ちよつと待つて。無線貸して」

ダッシュボードから無線機を強引に引っ手繰る。

『こちら4課です。何か進展ですか？』

「7課の武信です。井上仁の無理心中についての記録と、釈放の情報を全部こつちに送ってください。大至急お願いします」

『了解しました。数分で送信します』

「直毅、仁さんが捕まってた刑務所まで向かって。早く」

「おいおいおい、何だよ突然。何か思いついたか」

「おかしかったんだよ。恐らく、最初から」

井上仁。家族2人を殺害した後、通行人を1人殺害して逃走。そして自首。そこで調査は一段落着いた。

そして2週間前に冤罪と判明し釈放。そして釈放についての記事は・
・。

パソコンに資料添付付きのメールが届いた。4課からだ。

「やっぱりだ。あるべき筈のものが無い」

添付された資料には、現場の詳しい状況、裁判の記録まで事細かに載っていたが、井上仁の釈放についての記事や報道は、一切載っていない。

ヤスと優輝の負傷でこっちに目が向いていなかった。なんで疑問に思わなかったんだろう。

「冤罪で投獄されてた人が出てきたんだ、ちょっとくらい話題になってもおかしくないはずなのに」

「全く何も出てこないっつーのも不自然な話だな。で、どうして刑務所なんだ？」

「釈放の資料。取ってあるんじゃないかと思って」

「なるほどねえ。了解、ぼちぼち急ぐぜ」

さらにギアを1段上げ、セダンは首都高速を矢のように駆けていく。

3月16日。13時。隊舎へ続く大通り。

「着いたぞ」

「へーい」

俺がひよことの口論を繰り広げている間に、どうやら現場付近まで来ていたようだ。

潰れた車の残骸は既に撤去されているようで、ヒビの入ったアスファルトだけが昨日の襲撃を記憶していた。

「路地のチェックは昨日のうちに警察と優輝と3課が調べてるし、俺等どうするん？」

「俺とヤスはここから港までの路地をもう一度調べる。ひよこは車で繁華街の方に向かってくれ」

「あれ、一緒に調べるんじゃないの？」

「港から繁華街までの逃走経路を洗ってくれ。仁は人ごみに紛れて姿を眩ませたようだが、犯人がどうやって現場から消えたのかは判っていない」

「了解。んじゃ適当に調べてくるわ」

「完璧に調べる。それと車その辺に止めるなよ、あのあたりは路駐してたら五分でタイヤ止めが付くぞ」

「あいあい」

わかつているのかわかっていないのか曖昧な返事をしながら、俺達は車が遠ざかるのを見送った。

陽が西に傾き始めてからまだ間もない筈だが、路地裏に射す光はほとんどなく薄暗く、湿った空気が漂っている。

「この辺は立ち入り禁止になって無エのな」

「こつち側は完璧に調べ上げたからな。潰れた車と一緒に、飛ばされた廃材なんかも回収済みだ」

「へえ」

回収したという割にそこかしこに物が散乱している。フレームの曲がった自転車や傘の骨組み、どこからか飛んできたらしいタオル。小奇麗に清掃された表通りの裏側は、こんなにも薄汚れている。何か皮肉めいたモノを感じさせた。

「ここらへん調査済ませてあんなら、わざわざ調べるまでも無いんじゃないのか？」

「少し気になる事があってな」

そう言うと優輝はポケットから地図を取り出し、印をつけていく。

「なんだ、港までの経路の確認か？」

「それはもう済んでいる。問題は飛んできた物とその箇所なんだ・
」

地図を見ながら何やらぶつぶつとつぶやいている。俺はその後ろを黙ってついていく。時折立ち止まって地図にペンを走らせ、また歩き出す。俺はその後ろを黙ってついていく。これの繰り返しだった。

「おい優輝」

「・・・ん、どうした。何か見つけたか」

「さっきから何地図と睨めっこしてんのか理由を聞かせろってんだ。俺は散歩しに来たワケじゃ無え」

こいつの悪い癖だ。何か一つ気になる事があると、それ以外が疎かになる。

「すまない。説明してなかったな」

俺に地図を手渡すと、今までの順路を指で示していく。

「スタート地点はここだ。ここから裏路地に入って、ここでゴミ箱

が飛んできた。そしてここでガラスが降ってきて、右に曲がった」
犯人の妨害によって進めなくなった道にはバツ印が描かれ、それぞれ飛んできた物が書きこまれている。

「ここからはしばらく真っ直ぐだな。そして大きな通りの手前で左に曲がった」

「次に立ち止まってから右、そのまま道なりに走って・・・ここで右だ」

指を追ううちに、俺はある事に気づいた。

「でけえ通りに出そうになると、毎回道塞がれてんな」

「一度大きな通りに出てしまえば攻撃も難しくなるだろう。逃げ道も大量にある」

道順をなぞる優輝の指は地図から離れ、前方を指差す。

「最後に、ここを真っ直ぐだ」

ジョニーと優輝が犯人と接触した地点、鬼ごっこのゴールとなった港。大した証拠も見つからず、ここまで歩いてきてしまったようだ。コンテナの撤去作業はまだ続いており、重機が軋みを上げながら働いている。

「昨日のはコンテナ運搬中の事故って事になってんだっけか？」

「ああ。能力者の暴走による事件や事故は、住民にとって不安材料

になるからな」

能力者はその力の大小問わず、発現した時点で一度病院へ搬送。そこから公的機関の検査を受けおおまかな能力を判定し、国の管理する能力者リストに登録される。能力者による犯罪が起きた場合の迅速な対処のためらしい。

ただし、発現した事を隠したまま生きてるようなヤツも極々稀に居る。

「災害レベルの能力者が野放しになっている事など、普通は有り得ないのだがな」

「まあ、国の信用に関わるし上も隠すのに必死なんだろう」

「そういえばひよこはどうした。隊舎からここまでよりも、ここから繁華街のルートのほうが距離が短いはずだが」

周囲を見回すがひよこの姿は無い。どうせサボって煙草でも吸っているんだろう。

『もしもし。二人とも聞こえていますかー』

タイミングを見計らっていたかのように、インカムから間延びした声が聞こえてくる。

「テメエまた仕事ほったらかして遊んでんじゃねえだろうな」

『ちゃんとやってるって。そっちはどうなのよ』

「こっちは証拠になる物は無かったが、犯人の意図が大体わかったぞ」

「オイ聞いて無えぞ。どついうこつた」

優輝は再び地図を広げ、説明を始めた。

「ヤス、これを見て本当に何も気づかないか」

地図に目を落とす。

車を降りて右手の路地へ進入。

十字路。左からゴミ箱、前からガラス片。右へ。

直進。路地のガラスが降るが走り抜けて回避。

十字路。大通りにぶつかるが、前の通りからコンクリートブロック、右からガラス片。左へ。

直進。路地の木材が倒れるが前方に走って回避。

十字路。前方から左の通りにかけて鉄筋が道を塞ぐ。右へ。

左曲がりの緩やかなカーブを描く道。特に何もなし。

三叉路。大通りにぶつかるが、前方上部から梯子が落下。右へ。

十字路。右から崩れた塀の一部、前方から鉄筋。左へ。

しばらく直進。港へ。

以上がジョニーと優輝の通った道順だ。

優輝が呟いていた言葉を思い返す。問題は飛んできた物と、その箇所。

13時50分。都内刑務所応接室。

「・・・今何と仰いましたか？」

聞こえていなかったわけではない。目の前の女性の言った言葉があまりにも予想とかけ離れていたため、つい聞き返してしまう。

「ですから、囚人番号1255番は釈放されていません。二週間程前に北海道の刑務所に移送されました」

何でしたらご自分でご確認を、と資料を渡される。

「・・・3月4日に府中刑務所から網走監獄に移送・・・」

だったら、ヤスや優輝達の前に現れた井上仁は何なんだ・・・!?

「・・・向こうの刑務所から、移送完了の報告は受けているんですか？」

「はい。当時の看守長が確認しています」

「当時の、とは？」

女性は眼鏡を外し、胸ポケットへと仕舞った。

「看守長は移送手続きを終えた直後、事故で亡くなられました

「車に戻ると、直毅がシートを倒して仰向けで煙草をふかしている。」

「で、どうだったよ」

「僕は直毅に応接室で聞いたことを話した。」

「……看守長のほかに看守も一人亡くなってる。轢き逃げらしいね」

「轢き逃げ犯の車は事件前に借りられていたレンタカーで、数km先の路上に放置されているのが見つかっている。」

「その言い方だと犯人が見つかってねえみたいじゃねえか」

「……見つかってないんだよ。犯人の証拠は指紋はおろか、髪の毛一本すら発見されてないらしい」

「借りたハナから犯罪に使う気だったってわけかよ。レンタカー借りた奴は引っ張ってねえのか」

「……そのあたりは今聞くところ。車出して」

直毅はシートを起こし、キーを回した。その間に携帯を操作し、夜見川さんに電話をかける。

「……もしもしみかさん？武信です」

『おーどうした？飲みに行くにはまだ早いよ？』

向こうも木戸の件で鬼のように忙しいだろうが、そんなときでもおどけてみせる夜見川さんに少し安心する。

「少し調べて欲しいことがあるんです。3月4日の事件について」

『3月4日ね・・・はいはい。最近は事件が多いから』

電話の向こうからキーボードを叩く音が聞こえてくる。

「看守2名の轢き逃げについてです」

打鍵音が止まる。

『先に謝っておくね。もしかしたら答えられないかもしれない』

「・・・何故です？」

『公安が絡んでるんだよ。ホラ、あの人達ちよつと複雑な連中だから』

キーボードの音に混じった乾いた笑いと共にそう告げられた。

「・・・やっぱり、井上仁の関連事件は公安が捜査してるんですね」

『よく知ってるねー。なんか色々あるらしいよ？』

「・・・答えられる範囲でいいんです。轢き逃げに使われたレンタ

カーを借りた人物について、お聞かせ願えますか」

『はいよー』

返事の後にはしばらく間が開き、いつの間にかかけられていたカーステレオから流れるギターソロが耳についた。

『……仏さんの名前は田中吉郎。死亡推定時刻は3月3日、午後6時40分。東京湾の埠頭に停泊してる漁船の持ち主が男性が浮いてるのを発見して通報。死因は溺死。睡眠薬らしき薬物反応も出てる』

頭の奥がぴりぴりと痺れていくのを感じる。井上仁の移送手続き。看守轢き逃げ。男性の水死。これらは間違いなく関連付けられている。

「……井上仁の移送については、何か聞いていますか」

『知ってるよ。その様子だと詳細は知っているかと思ったんだけど』

『移送手続きがあつたのは本当なんだ。ただ、どうやら何かの手違いで移送途中に井上が逃げ出したらしいね』

手違いが起こったにも関わらず、移送完了の手続きが出来るはずがない。耳鳴りがしてきた。ずれている。それも完璧に。

「……みかさん。井上仁の脱走の背景には何があるんですか」

『それを今公安が追ってるわけよ。こつちも色々調べてはいるんだけど』

「くそがつ……!!!」

左にハンドルを切られた車が急ブレーキに耐えられず、がたがたと音を立ててエンジンを停止させる。

「……直毅、突然どうし

」

言い終わる前に、直毅の判断が功を奏したことを身をもって知った。息を切らし、ハンドルにもたれかかった直毅が何か言葉を発している。

「

」

それを聞き取ることが出来ない。

耳鳴りがひどい。超音波のようなそれがやがて頭痛へと姿を変え、僕の思考を遮り、意識を絶った。

3月16日。13時30分。港。

「十字路がおかしいな。殺すだけならわざわざ一箇所だけ抜け道を用意する必要が無え」

「付け足すと、途中の分岐の何箇所かは袋小路になっている。しかしそちら側には進ませなかった」

『俺地図とか見えないから何もわからんんだけど』

「行き止まりに誘い込みや一発だかな」

「全力疾走させた状態で危機的状況に追い込む事により咄嗟の判断を要求させ、ご丁寧に作られた抜け道を進ませるように計算されている」

要するに。

「俺が電話しなくても、港に誘導されるようになってんのか」

「そうだ。道なりに進んでいる時に前を塞がれることも無かった。全て走っているだけで避けられたからな」

『聞いてますかー』

「つまり犯人は、はじめから俺達を港に誘い込むつもりだったと言
うことだ」

『ちよいと待ちなさいお二方』

いつものようにひよこが会話を遮った。

『しょっぱなの車潰されたのはなんなのよ。あれそのまま乗ってた
ら即死じゃないん？』

確かに車の残骸を見た限りでは、殺すつもりで放った一撃のように
思える。

「違う。あれはジョニーが車から降りたから直撃したんだ」

ドアの鍵を開け、シートベルトを外し、車から飛び出すまでの僅か
な時間。アクセルは踏み込まれていない。

「あの速度を維持したままなら、本来瓦礫がぶつかるはずだったの
は後部座席より後ろになる」

『そのまま乗ってたとしても、ジョニーは死ななかつたって事？』

「恐らくはな。そして瓦礫に潰された車は走行不可になり、嫌でも
車から降りなければならなくなる」

「なるほどねエ。本題は港に着いてからの会話ってわけか」

港での犯人の質問。優輝から聞かされたところによれば、私達は脚本家という人物を探している。居場所を教える。それだけ聞くと、犯人は仁を追って逃走したらしい。

『そっちの話はもう済みましたかい？俺も報告あって連絡したんだけどさ』

「そうだったな。ひよこ、今どこだ？」

『繁華街だけど』

「完璧に調べるとは言ったが、時間をかけすぎではないか」

『時間掛けて調べる価値があったわけよ。見つけたよ、犯人の逃走経路』

13時40分。繁華街裏路地。

ひよこに車で迎えに来させた俺達は、近くのコインパーキングに車を止め、仁と犯人が消えた繁華街へと向かった。

「で、犯人はどっから逃げたってんだ」

「此方にてございます」

ひよこに案内された先は、仁が消えた地点から少し先の路地。

「この先に逃げたという事か？」

「ちがーう。犯人はここで別の経路を使って逃げたんだ」

「どうやってだ。この先は繁華街にぶつかるとし、両側ビルだぞ」

左側の壁には窓の代わりに排気口が顔を覗かせ、その横には壁沿いのくぼみにでかい金属製のゴミ箱が置かれているだけだ。上に登るか地面でも掘らない限りは……ふと、ゴミ箱の置かれている場所に目をやる。ビルとビルの間は路地に多少はみ出して設置されたストッカータイプのゴミ箱。その背後には結構な高さの壁があり、自力でよじ登るには少々難儀しそうだ。

「俺も最初はそこから反対の路地に回ったと思ったんだけどねー。あ、ちよつとそこどいて」

ゴミ箱を調べていた俺を手で押しのと、ひよこはゴミ箱を手前に引っ張り出す。

「この構造少しおかしいっしょ？ビルと壁が、まるでゴミ箱を避けるみたいに建っててさ。最初からここにゴミ箱置くような位置取りだよー」

その実、ビルはゴミ箱を避けていたわけでは無い事を、ゴミ箱の下にあったそれが告げていた。

「マンホールか」

「随分前に閉鎖されたみたいだけどねー」

ゴミ箱を端へとどかし終えたひよこは、ポケットからビニールケースを取り出した。

「これ、蓋に挟まってたんだわ」

中身は何かの繊維が数本。犯人は事件当日、白いコートを羽織っていた筈だ。

「それじゃあ中調べようぜー」

おもむろに下水道へ入ろうとするひよこを制止する。

「んだよ、まだ何かあるかもしれないやん」

「それをするのは俺達じゃ無え。警察の皆々様方に任せときゃいいんだよ」

「えー、折角ライトとか長靴とか色々用意してたのに」

「お前、まさかそれを用意するのに時間食ってたんじゃないだろうな」

怪訝そうな顔を浮かべる優輝に、

「そうだけど？」

悪びれる様子も無く答えるひよこ。

「馬鹿者。まず見つけた時点で真っ先に俺等に連絡、そしてビニールケースを向こうに渡してくるのが筋だろう」

「たまには遊んだっていいじゃないっすかー。そっだ、ジョニーに連絡しといてね。俺はこれ渡してくるからさ」

ビニールケースを持つ手をひらひらさせつつ、ひよこは繁華街の方へと消えた。

「あいつまだ連絡入れて無かったンか・・・」

「ふざけていられる状況じゃ無いんだがな」

優輝はインカムに指を当て、ジョニーへと繋ぐ。

「繁華街裏路地にて犯人の衣服から剥離したと思われる繊維を発見した。今鑑識に・・・」

背筋に悪寒が走る。何か漠然とした不安が全身を抜けていく。階段を踏み外した時のような、屋上から飛び降りる人影が見えた時のような、駅のホームで後ろから突き飛ばされるような。

「ん、ジョニーに繋がらんぞ。故障でも・・・」

言葉の後半部は、頭の芯から響くような耳鳴りに掻き消される。平衡感覚すら失いかねない程の耳鳴りに、俺は堪らず両耳を押さえ、

壁に身を預けた。

「糞、また耳鳴りか！？ヤス！！」

以前も似たようなことが何度かあった。そして耳鳴りの後には、決まって良くない事が起きる。前総理大臣の時も、俺の時もそうだった。

「おいヤス！大丈夫か！？」

肩を揺すられるが一向に良くなる気配は無い。この音は聞いてはいけないと、身体が拒否反応を示している。自分の意思とは関係なく、意識が遠のいていく。

視界の端に人影が見えた。立ち膝をついた状態で固まっている。此方に背を向けた女。その黒髪は腰まで伸びていた。

不意に女の輪郭がぼやけ、テレビの砂嵐のようなノイズが走る。ノイズは視界全体に現れているわけでは無いようで、周囲の景色はそのままなのに、女の周りだけ砂嵐が発生している。女はゆっくり立ち上がるが、立ち上がっている最中にも砂嵐は身体を浸食し続け、輪郭がはっきりしなくなっている。

完全に立ち上がった女らしき物は、砂嵐と共にひよこの向かった路地へと歩き出す。もはや元が何だったのかわからない砂嵐の塊は、路地を曲がる前に俺の視界から消えた。

「幻覚か・・・？」

「おいヤス！しっかりしろ！！」

このままだと頬を張られるので、優輝の手を左手で止めた。

「荒治療過ぎンだよバカ。それで治るワケ無えだろ」

「目が虚ろだったんだ。それより耳鳴りは大丈夫なのか？」

気がつくのと頭痛のような耳鳴りは止んでいる。それに伴い周囲の喧騒も戻ってくるはずなのだが、寧ろさつきよりも静かになっているような気さえする。

『二人とも大丈夫！？今なんかすごい耳鳴りしたんだけど』

「俺は大した事は無い。ヤスが少々ふらついてるが、ヤス、大丈夫か？」

「いい。自分で歩ける」

肩を貸そうとする優輝を制止し、壁から身体を起こす。

『こっちも結構やばいレベルだったからさ。これ周りの人とか聞こえて・・・』

ひよこの声が詰まる。

「どっした？」

『こっち戻ってきて。早く』

その声色にいつものふざけた様子は一切感じ取れない。ただならぬ

雰囲気を感じた俺達は、ひよこに言われるがまま繁華街へと戻った。

14時3分。 繁華街。

繁華街から裏路地への入り口で、ひよこが立ちつくしている。それに並ぶ形で前に出た俺達は、ひよこに問うまでも無く異変に気づいた。

「人が、居ない・・・？」

正面の大通り、そこから続く道、左右の交差点。どこにも人の姿は見受けられない。

「オイオイどうなってんだこりゃ」

俺が繁華街へと進もうとすると、

「出るな」

ひよこに襟首を掴まれ引き戻された。

「痛ってえな何すんだよ」

「見てわからんの？この時間にここの人通りが途絶えるなんて有り

得ないだろ」

「それと俺を引き止めたのとなんの関係が」

「危ねーかも知れねえだろうが。ちょっと待ってる」

襟首を掴んだまま目を閉じるひよこ。

「・・・人が居ないのはここを中心とした半径100メートルくらいの道路。建物の中には人も居るっばいね。危ない連中とかでは無いみたい」

「なら離して貰っていいか。若干首絞まってんだが」

「あ、悪い悪い」

「・・・妙だな」

優輝が首を傾げる。

「携帯の電波は通ってるみたいなんだが、ジョニーと武信に電話が繋がらない。インカムも不通になっている」

どうやら話し中になっているらしく、携帯からは断続的な電子音が漏れていた。

「なんだろうねこれ。耳鳴りがしたと思ったら急に人が居なくなっ
た」

「ひよこ」

さっきのひよこの言葉に妙な引つ掛かりを感じていた。

「さっき女を見なかったか？耳鳴りしてる最中に裏路地に居て、そ
うちの方に歩いてったんだが」

「いや、見てないねー。どんな感じの人？」

「服装とかは覚えて無えンだが、腰くらいまで伸びた黒髪の女だ。
蹲ってたソイツが立ちあがって、この路地に歩いてったように見え
たんだが」

ひよこは考えるような素振りを見せたが、やがて首を横に振った。

「さすがに俺の横通り過ぎたりしたら絶対わかるはずなんだけどな
」

「優輝は？」

「俺も見えていないな」

「そうか・・・いや悪イ、忘れてくれ。多分耳鳴りで頭やられてた
んだ」

幻覚という事にしておく。万が一幽霊とかだったら怖いからな。

「で、この状況は何なんだひよこ」

「いやー俺に聞かれてもねー・・・耳鳴りする前はこころへん人通り多かつたし、さっきのが原因だとは思うけど。気になるのは、建物の中に人が居るのに誰も出てこないって事」

「ひとまず様子を見に行くぞ」

俺達は大通りに出ると、隊舎方面へと歩き出した。

よく目を凝らすと、かなり遠くで人が歩いているのが見える。こちら側に向かつて歩いてくる人は居らず、皆通りと垂直に歩いているようだ。

「誰もこのあたりに入ってこないねー」

通りに面した喫茶店。その中には談笑する若者やノートパソコンを操作するサラリーマンの姿が見受けられる。

「それだけじゃない。その喫茶店の連中も、あそこのコンビニで立ち読みしてる連中も、誰もこっちを見ていない」

一人くらい外を見てるヤツも居そうなものだが、どういっわけかこのあたり一帯の建物内部に居るヤツ等は窓の外に目を向けていなかった。

「・・・ほんとに、どうなってんだよこれ」

交差点まで歩いてきたが、人影一つ見えない。ここだけ世界から切り取られてしまったかのような錯覚を覚える。

「人払いだよ」

路地裏からの声。それと同時に、この通りで初めてとなる人影が姿を現した。男は俺達と正対すると、こちら側へと歩き出す。

「一般人を指定した範囲から遠ざける暗示のようなものだ。主に能力者を判別する手段として用いられる」

「わざわざ捕まりに出てくるなんて殊勝な心掛けじゃねエか、井上仁」

『Aブロックにて対象を発見。繁華街のコンビニ裏に潜伏中です。如何致しますか』

「他のブロックの奴等を向かわせた。四方を囲んで追い込みをかける」

「上からは生きて身体を回収しろって指示が出る。出来るだけ穏便に済ませたいが、抵抗するようなら撃て」

『了解しました』

「で、Aの三人とDの二人の素性は割れたか」

『何れもデータベースに登録されていませんが、装備から察するに
武警の連中です』

「面倒だな。連中が対象と接触する前に」

『もう手遅れです』

14時5分。繁華街交差点。

「携帯が不通だったものでな。直接出向かせて貰ったよ」

「まあ、お陰で探す手間が省けたってモンだ。オラ、両手出せ」

俺は指先でくるくると手錠を回す。

「好きにするといい」

両腕を揃えて俺の前に差し出す仁。流石に面を食らってしまつ。

「どつという風の吹きまわしだ」

「手錠がかかっても話は出来るだろう？」

コイツがまだ父親だった頃の様に薄く笑っている。

「チツ・・・テメエを外交官襲撃事件の重要参考人として拘束する」

ひとまず逃げられないようにしておく必要がある。少なくとも、外との連絡が取れるまでは。

「仁さん、お久しぶりです」

「優輝君か。しばらく見ない間に立派になったな」

「挨拶は後でやれ優輝。こいつ連れ出すぞ」

仁を後ろから小突き、俺達は道を引き返す。

「で、なんでわざわざ俺等の前に出てきた。また何か面倒事に巻き込むつもりじゃねエだろうな」

「巻き込んだつもりは無い。私は保明の友達が助かる道を示しただけだ」

「偉そうに。死ぬワケでも無えのに余計な」

「死んでいたよ」

俺の言葉を遮り、こちらを見据える仁。

「保明が優輝君を見つけれなかったら優輝君は潰されていたし、保明が彼に電話をしなかったら、彼も死んでいた」

確信めいた発言。そんな根拠が何処に在ると言うのか。

「三秒後、横の喫茶店のウェイトレスがスープをこぼす」

三者一斉に左側の喫茶店へと目を向ける。今まさにテーブルに置かれようとしている皿が、床へと落下していた。

ウェイトレスは慌てふためき、客に謝ると大急ぎで厨房へと引っ込んでしまった。

「つまるところ、私には未来が見えるんだ」

「なんだそれ、バカげてる」

人間本当に呆れると、思わず笑ってしまう。今の俺のように。未来がわかるというのは、この世界全ての生き物の動き、川の流れ、風の向きやその他諸々。本当の意味での全てを把握する必要がある。そしてそれらを頭の中で処理する能力は、人間には備わっていない。単なる先読みとはワケが違う。

「だったらなんだ。オマエは神様か？」

「未来を視るのにそんな大量の情報も処理能力も必要無いんだよ、保明」

諭すような口調の仁に、墓地で感じたような薄ら寒さを覚えた。

「保明のように複雑な計算の工程が無いんだ。漠然と未来の出来事が頭に浮かんでくる」

「ただ、未来視と言っても大分制約があるらしい。まず、私自身に関わる部分しか視えない。更に、ごく最近の出来事しか視る事が出来ないんだ」

「そのチカラで俺等を助けましたっけ。目的を言えよ、ただの你喜欢してワケじゃ無エだろ？」

「この手で助けられる命があるならば、助けたいと思うのは不思議ではないだろう」

その言葉をオマエが言うのは説得力ゼロだ。ならどうしてあの時・・。

「ヤスどうしたー？怖い顔してるけども」

「なんでもねえよ」

感情が顔に出てたらしい。どうせコイツに事情を話したとしても、肯定が得られると思っちゃいない。

そういえば、と優輝が言葉を区切り、

「先程人払いと仰っていましたが、この現象について何か心当たりがお有りですか？」

優輝がえらく畏まった話し方で質問を投げかけた。

「能力研究の応用だろう。優輝君は能力者がどの様にして対象を操ったり、幻覚を見せたりするか知っているか？」

「脳の命令系統に外部から干渉して、一時的に支配下に置くんだろ」
仕組み自体は1割もわかっていないらしいが、直毅や木戸のようなタイプは何らかの手段で相手の脳に干渉し、行動に影響を及ぼす。木戸は声を発して直接命令するわかりやすいタイプだ。

「よく覚えているな保明」

コイツは捕まる以前、母さんと同じく能力研究の分野で一定の成果を挙げていた。この知識も母さんの論文から丸パクリだ。

「私の研究は、能力者が扱う催眠に近い信号を解析し、それを科学的に再現する事だった。この人払いはそれを発展させた物だろう」

「人間を操れると？」

「完全にでは無いようだがな。恐らくはこの辺り一帯から離れるよう信号を発しているのだろう」

意識を向けさせないようにしているわけか。

「私が研究していた段階では未完成だったが、誰かが引き継いで完成させたのか・・・」

「世間話はいいんだよ。どうすりゃ元に戻んだ」

「放っておけばそのうち効果も薄れるだろう。あまり長時間使うと、影響が出るからな」

「影響？」

「いや、とにかく効果範囲から出る方が早いだろう」

「あの人通りが多いところが境界線っばいねー」

ひよこが指差す先は普通に人が歩いている。ここから結構な距離があるようで、歩くのが一気に面倒になる。今日一日歩いてばかりだ。

「・・・待て、みんな一旦止まれ」

優輝に停止を促され、その場で固まる一同。

「仁さん。その人払いの信号というのは、万人に効果があるんですか？」

「少なくとも一般人には一定の効果がある筈だ。例外もあるが」

「例外というのは？」

優輝が緊張の面持ちで正面を見据えている。

「君達のような能力者には効果が薄れる。あとは信号が出されるのを予め知っている者」

「なら、あいつ等はそのどちらかか」

視線の先には黒いトラックが1台。ヘルメットを被った運転席と助手席の男がこちらの様子を伺っていた。

「ひよこ、あいつらは何だ」

「あいよー。・・・人数は六人。警察車両みたいだねー。結構な重装備みたいだけど、なーんかおかしいね」

こちらが気づくと同時に、トラックの連中がぞろぞろと降車する。

「警視庁特殊犯捜査係だ。井上仁はある重大な犯罪に関与している可能性が強いため、一時的にこちらで身柄を預かる」

「SITが何の用だ。この人払いはお前達の仕業か？」

優輝がかなり強気に出ている。

「特秘事項だ。君達の上司にも話が通っている、仁をこちらに引き渡せ」

「その様な話は聞いていないな」

「ヤス」

ひよこが小声で耳打ちしてきた。

「あいつらSITじゃない。持つてる装備が全員違う」

ひよこが言うには、大半の連中が大型のリボルバーとスタンガンを携行しているらしい。

「少なくとも警察じゃない。どうする？」

「念のために視ておくが、イザって時には頼む」

「あいよ」

「貴方方の任務内容に興味は無いが、搜索令状くらいは出せるだろう」

「全て特秘事項だ。仁を引き渡せ」

「話にならん」

優輝が溜息をついてから、膠着状態が続いた。

『彼等に引き渡す意思は無いようですね』

「俺が着くまで引き伸ばせないか？」

『不可能です。こちらは姿を晒してしまっていますし、人払いももう持ちません』

「面倒事は極力避けたかったんだがなあ・・・」

『如何致しますか』

14時15分。繁華街コンビニ前。

SITもどきがどう動くかわからない以上、一瞬たりとも気が抜けない。

「・・・わかった」

先に動いたのは優輝だった。仁の手錠を外すと、連中の方へと歩かせる。

「ヤス」

「わかってる」

正面を見据えたまま、相手の出方を伺う。一步、また一步と仁が歩いていく。連中まで後三步の距離で、未来に動きがあった。仁が腹部をナイフで刺される。こっちが銃を構えるよりも先に動かれ、俺達は撃たれて連中は逃げる。いわゆる詰みだ。

「チツ」

尤も、それは5秒後の話だ。わかっているならいくらでも対処できる。ベレッタを取り出し、連中に狙いを定める。狙うのは防御の薄い手先と足。

「貴様何をつ・・・!!」

相手は6人。俺の射撃技術では間に合わない。

「ひよこオ・・・!!」

「右お願い」

最低限の言葉だけ口にする、目の前の武装した連中が次々に倒れていく。

「逃げんぞー!」

「仁さん、こっちへ!」

這いつくばって呻いている連中に背を向け、俺達は交差点へと下がる。

「何なんだアイツ等!俺等が誰だかわかって無エらしいが」

「知らんけど、それなりに場数踏んでる奴等だね!。展開が速いよ」

「問題なのはあいつ等が誰かではなく、仁さんが狙われてる事だ。ひよこ、どこに向かえばいい」

「……どこの道も塞がれてる。強行突破しか無いね」

「いや、まだ手はある」

先程から沈黙していた仁が、裏路地へと走り始めた。

「君達が見つけた下水道があったらどう。あそこから抜けるしかない」

「殺されそうになったつてのに随分余裕そうじゃねえかオイ」

「・・・すまない、巻き込みたくはなかったのだが」

「コイツへの追求は逃げ延びてからでも遅くない。」

「よし行くぞ」

仁を先に下ろそうとする優輝をひよこが呼び止める。

「ライト無きや真っ暗だよ。丁度三本あるし」

「オマエの分はどうすんだよ」

「要ると思っし？」

「ニヤつくひよこを余所に、俺達のはしごを下っていく。」

「あーあーあー、地味なやられ方しやがる。手足やられちゃ使えねえだろうが」

「申し訳・・・ない。傷の手当を・・・」

「後のことは気にすんな。お前等の犠牲のお陰で、罪の無い奴等が

何人が助かる」

「なっ……!!」

「人払いを範囲拡大して掛け直せ。五分でいい」

『ですが、それでは影響が……』

「ここに第四分隊の死体が六つある。詳しく聞きたいか？」

『……いいえ。人払いの延長を要請しました』

「それでいい」

『対象は連中と共に下水道へと向かったようです。ご指示を』

「第一、第二分隊は下水に降りて搜索しろ。俺等は地上から先回りする。あとこいつ等処理しとけ」

『下水道内部では位置情報に若干のラグが発生しますが』

「構わん。こつちにはアレがある」

『了解致しました』

男は通信を終えると、乗ってきたセダンの座席に腰を沈める。

「無抵抗の人間殺すってのはどうもね、楽しくて困る」

サングラスから覗く瞳は狂気に彩られ、口元から左耳のピアスへと伸びるチェーンが口を開く度にじゃらじゃらと音を立てる。

「人払いの範囲内で片付ける。俺達は万一のために嬢ちゃん迎えに行くぞ。車回せ」

「了解」

「逃げられると思うなよ、井上仁」

14時20分。下水道。

下水道は太いパイプをいくつも繋ぎ合わせたような構造をしており、パイプ内部の両端に一人一人が通れるだけの通路が設置されていて、その間を汚水が流れている。

「水の中直接歩くような構造じゃなくて助かったわー」

ひよこが後ろで安息の表情を浮かべている。どっちにしる全身に臭いがつきそうだが。

「思ったより広エのな」

「浄水場の近くだからな。あとひよこ、この水の中を歩くことになるかもしれない。覚悟しておけよ」

先頭を走る優輝が地面をライトで照らしながら呟く。

「えー。こういってこって橋とか架けられてるんじゃないの？そこ通りたいんだけど」

「危機感が無エのかオマエは。追われてんだぞ」

「それでも嫌なものは嫌でしょー。これちょっと進んでから地上に出ちゃ駄目なん？」

「駄目だ。相手が武装していて、なおかつ発砲してくる可能性がある以上、民間人を巻き込む危険がある」

ちなみに優輝の後ろに仁、俺、最後尾にひよここという並び順だ。某龍討伐のRPGを連想させる。

「ひよこ、連中の動きはどうなってる」

「まだ上でタム口ってるみたいだし、しばらくは真っ直ぐ行って大丈夫。ライト消した方がよくなったら言っわ」

「ああ。とにかく奴等を撒くまでは・・・」

優輝が走る速度を緩めた。

「おい、どうした」

またしても、耳鳴りが俺達を襲う。さつきよりはひどくはなかったが、それでも走る速度は落とさざるを得ない。

「糞が、なんだよさつきから」

「人払いだ。あれの範囲内に居ると、効果の効かない対象には少なからず影響が出る」

「それが耳鳴りの正体という訳か・・・」

携帯は相変わらず不通、インカムも使い物にならない。

「範囲から出ない事にはどうにもならないか」

「上の奴等が降りてきたっばい。急いだほうがよさそうやでー」

「よし、行くぞ」

俺等は時に走り、時に道を変え、時に息を潜め、追っ手に存在を気取られないように進んでいく。

途中何度かジョニーへ通信を試みたが、相変わらず繋がらない。まだ範囲からは出ていないようだ。

「預言者さんよお。今回はジョニーの時みたいに逃げ道示してくれねエのか？」

「今は視えていない」

「都合のいい能力だなオイ」

「私が生きている間の事しかわからないものでな。君達が助けてくれなかったら、私はあの時確実に死んでいた」

「仁さん」

優輝が前を照らしたまま問いかける。

「貴方が俺達に介入してきたのは、恐らく自ら事件に巻き込まれる

ことによつて、俺達を助けようとしたからだ。貴方が関わっていないければ未来は見えませんからね」

「そして貴方はあくまで直接介入することは無く、ヤスを使って俺達を助けた。何故ですか？」

仁は答えない。

「さっきの連中があなたを襲うことも知っていた筈だ。なのに、どうしてそれを教えてくれなかつたんですか？」

4人分の足音が、狭い下水道の中に響いている。

「事象には、過程と結論がある。私が知るのは結果だけで、私がいくら過程を変えようと、結果は変わらないんだ」

「それで俺を使ったワケか？」

「そうだ。私が直接手を加えず、他者に委ねる事で初めて未来が変わる」

「それを聞いて確信しました」

ひよこの指示で、右へと進路を変えた。

「貴方は、あの場で死ぬつもりだったのか」

足音は次第に小さくなり、やがて完全に消えた。

「・・・刑務所を出てからの11日間で、私に出来る事は全てやり終えた。だから」

「あとは死ぬだけか？」

優輝が仁の胸倉を掴み挙げる。

「ふざけるな。お前が捕まってから、ヤスがどんな思いをしてきたか考えた事はあるのか」

「優輝、それ今聞かなくてもいいんじゃない」

「黙ってる。ヤスが聞かないなら俺が代わりに聞いてやる」

どこでスイッチが入ったのか、優輝は全く聞く耳を持たない。ひよこに目を向けるが、どうやら追っ手はまだ問題ないらしい。

「ヤスがあんたを恨んでるのはな、家族が死んだからじゃない。あんたが本当の事を言わないまま、ヤスの前から消えたからだ」

優輝、もういい。

「ヤスが覚えていないわけ無いだろ。誰よりも近くで見ていたのに、その事実が捻じ曲がったんだから」

もういいんだ。

「仁さん、あんたはあの時、誰も」

「優輝!!!!!!」

気がつくと呼んでいた。そこから先は、俺が聞かなきゃならない。だから今は何も考えず、この状況を切り抜ける事だけ考えよう。

「……すみません、こんな時に」

優輝が手を離し、深く頭を下げた。

「いやほんと時と場所考えてよマジで。追っ手に気づかれたからね？こっち来てるからね？」

ひよこがあたふたしながら早口でまくし立てる。

「すまない。ひよこ、次はどっちに向かえばいい」

優輝が俺に恨めしい視線を送っている。

「左。しばらく真っ直ぐ進むよー」

15分程逃げ回っただろうか。相変わらず追っ手側にアクションは無く、着かず離れずの距離を保っているようだ。

「なーんで撒けないんだろ。もうライト消して随分経つのに」

先頭を走るひよこが首を傾げているようだ。

『……もし？もしもし優輝君？』

「やっと繋がったか。ジヨニー、仁を確保した。それと井上仁の引渡しを要求してきた連中に襲撃を受けた。何か知っているか」

『いや、僕の方では何も聞いていないけど』

やはり連中は独断で動いているらしい。そもそもSITの服装だけ真似て接触を試みってくるような奴等がまともとは思えなかった。

『場所はどこ？随分と音が反響してるけど』

「今下水道を通過して移動中だ。まだ地上に出られそうも無い」

『了解。発信源を辿って迎えに……』

「それだ」

ひよこが勢い良く振り向く。

「優輝、地下へ入ってからジヨニーに通信した？」

「ああ、五回ほど試みたが」

「その電波を拾われて追跡されてるのかも。ほーら来た」

後ろから迫っていた足音の群れが、左からも聞こえてくる。増援のようだ。

「ジヨニー、通信を切る。安全が確保でき次第また連絡する」

『無事でね』

通信を切り、俺達はひよこの先導で早足に前へと進む。

『第三分隊を下水道へ向かわせました』

「そのまま追い込め。第五分隊は・・・」

「JJJ」

「都立病院の裏だ。到着後に待機、指示を待て」

「第六分隊はそのまま地上を走らせる。こっちから直接指示を出す」

『了解致しました』

「絶対調じゃねえかお嬢ちゃん。そういうの千里眼つーんだっけ？」

「違う。私は物が人より見えるだけ。千里眼っていうのは・・・」

「あー悪い悪い説明が欲しいわけじゃねえから。まあなんにせよ、向こうがこっちの出方を伺ってる以上、こっちの勝ちだ」

「そもいかないかも」

「どうした？」

「今降ろした人たち全員伏せさせて。今すぐ」

14時40分。下水道。

「どうしてだ。どうして先回りされてる・・・？」

ひよこが細かく進路を変えながら狼狽している。

「さっきから同じ場所を回らされていないか？」

「わかってる。こうしないと追い詰められる。でもなんで距離を詰めてこない・・・？」

「ひよこ、まだ上には逃げねえんか」

「少し前に連中の乗った車が一台、俺達の動きを読んでるみたいに動いてる。出られない」

「ならどうすんだ」

「それを今考えてる。なんでだよ、なんでいきなり動きが変わった・・・」

明かりを消している以上、俺達はひよこに着いて行くしかない。しばらく歩くと、見覚えの無い十字路に出た。

「ひよこ、どっちに進む」

「まずい、囲まれた。前で待ち伏せてる」

いよいよもって切迫した状況だ。このままここに留まれば、間違いなく袋のネズミだ。

「電波を拾われたんじゃないやなくて、もっと別の何かか・・・？」

「強行突破しか無いか」

優輝がベレッタを取り出したようだ。

「そついうことかよ」

ひよこは何かに気づいたようで、優輝に倣いガバメントを取り出す。

「優輝、前に銃向けて」

即座に銃を構える優輝。ひよこは向かって左手の通路に銃を向けている。

「もう銃下ろしていいよ。今から全力で前に走るから、合図したら一斉にライトを前に向けて照らして」

「前にも連中が居るんじゃない無エのか」

「居るからやるんだよ。前にいるのは三人、幸い持ってるのは拳銃だけみたい。射撃判断は優輝に任せるよ。俺じゃ正確に撃てない」

「了解した」

ひよこは優輝からライトを受け取ると、口角を吊り上げた。

「さて、行くよー・・・」

仁と優輝が配置を入れ替え、俺達は駆け出した。

「優輝！！」

ひよこの声と同時に、一斉にライトを前方へと照射する。照らした先には、腕で顔を覆っているマヌケが3人。

「馬鹿がよお！降りてきたのは早計だったなオラァ！！」

ひよこが右端の男を蹴り飛ばし、優輝が残り二人の腕を撃ちぬいた。

「はいダツシュダツシュ！優輝はジョニーに連絡！」

「ジヨニー聞こえるか」

『聞いている。今どのあたりだい？』

「ひよこ、今俺達は何処にいる」

「シヨッピングモールの近くだけど、まだもう少し先まで行くよ。霊園で回収頼んだ」

「だそつだ。聞こえていたか？」

『了解。3課を向かわせるね』

「ああそつだ、サイレン回してね。あと出来るだけパトカーを多く寄越して」

『わかった。気を抜かないようにね』

「パトカー出してどうすんだよ」

「牽制。連中もわざわざ捕まりには来ないでしょ？それと、もう一つ意味があるわけよ」

『第六分隊が落ちました』

「クソっ！！どうして待ち伏せがばれた！！」

『如何致しますか』

「残りでケツから追え！俺が回りこんで直接押さえる」

「だめ。下がらせないとまずい」

「好機だぞ！？まだ警察も動いてねえんだ」

「もう遅いよ。パトカーがあっちに向かっている」

新山の携帯に着信が入る。

「はい、こちら新山・・・本当ですか！？・・・はい。はい、すぐ
に向かいます」

「公安が仁確保の情報を掴んだ。全部隊を下がらせる」

『了解致しました』

「チツ、車回せ。嬢ちゃん送ったら俺も現場に向かう」

「残念だったね」

「うるせえ黙れ。俺は今気が立っている」

「クソが・・・殺して良けりゃすぐにもやれたってのに・・・」

「相手が普通の人達ならうまくいったよ。どうして教えてくれなかったの？」

「何を」

「相手に、私と同じ能力を持った人が居ること」

15時。 霊園前。

「おっけーい。上がって来ていいよー」

地上に上がった俺達を出迎えたのは、春先の軟らかい西日と、赤い光の群れ。

「随分と大層な出迎えじゃねエか」

「いいのいいの。このくらい派手にやってくれた方が向こうも動きづらいだろっし」

「ここは・・・随分と走り回ったものだな」

仁が自嘲的な笑みを浮かべている。

「ジョニー、3課及び警察と合流した」

『お疲れ様。少し前に夜見川君から連絡があつたんだけど』

無線を掻き消すような2つのブレーキ音。1つは白いベンツで、もう1つは見慣れた車のものだ。

「・・・仁さん」

「何なんだよマジよお。気失って叩き起こされたと思ったらお前らの送迎頼まれるしよお」

顔色のあまり良くない武信と、窓に肘をついて煙草をふかしている直毅。

ベンツからは、スーツを着込んだ2人組が降りてきた。その両方の顔に見覚えがある。

「警視庁公安特務課の佐伯です。井上仁の身柄は一時的にこちらが預かります」

ベンツに乗っていた片方の大柄な女がそんなことを口走る。

「特務課？聞いたことが無いな」

優輝が佐伯と向かい合う形になる。ヒールを履いている事を抜きにしてもかなり背が高く、190近い優輝と目の高さがほぼ同じだ。

「昨今の能力者犯罪に対応する部署として最近、”公に”設置され
たんですよ。貴方達とは違ってね。ニュースとか見ない人ですか？」
佐伯の後ろに隠れるように頭だけ出して、挑発的な言動を選ぶよう
に発する男。

「日枝、挑発的な言動は慎みなさい」

「すみませえん」

日枝と呼ばれた小柄な男は佐伯に注意されると、その影に隠れるよ
うにゆっくりと頭を引っ込めた。

「とにかく、彼をこちらに渡して頂けませんか？」

「信用ならんな。こっちは一度、正体の知れない連中に襲われかけ
ている。襲撃を指示した者がお前達の中に居ないとも限らない」

「完全に疑心暗鬼ですね。子供のわがままと変わりありません」

「日枝」

「すみませえん」

『今回は彼女の言う事に従ってくれ。上からの通達で、仁の身柄は
一時警察が預かり、後に刑務所に戻されるそうだ』

「刑務所？どういう事だ」

「……仁さんの釈放は手違いだったみたいだよ」

武信が釈然としない様子で口を開く。

「そういう事です。貴方達が巻き込まれた事件の関連性についても色々聞かなければならないようですし」

佐伯は仁に手錠をはめると、ベンツへと歩き出す。

遠のいていく背中を眺めながら、俺達は仁が車に乗り込むのを見届けた。

「オイ待て。一つだけ聞かせろ」

後部座席の窓が開けられ、運転席のシートを眺めていた仁がこちらを向く。

「オマエは」

今を逃すと恐らくもう聞く機会が無い。

「オマエはあの時、何人殺した」

ずっと聞く事が出来なかった。出来たとしても、以前なら答えはくれなかった筈だ。俺だけがずっと蚊帳の外で、コイツの世界は廻っていた。

今は違う。何も知らない、何の力も無い昔の俺じゃない。もしこの期に及んでまだ嘘をつくなら、俺もオマエもここでお終いだ。

「私は」

仁は顔を伏せると、再び座席に視線を戻した。

「私は生涯、誰も殺してはいない」

c a s e · 0 8 e n d

真っ赤だった。壁も、天井も、椅子もテーブルもソファもテレビも絨毯も何もかもが全部全部。

テーブルには脳漿を撒き散らして突っ伏している母親と、その足元に転がっている兄らしき血と肉の塊。

俺は開け放たれた窓の外。庭先の深い暗闇の中に立ち、その光景を啞然と眺めている。

ここで思い出す。この場面でいつも思い出すという事を、思い出す。背中に硬い何かが押し付けられる感触。血と火薬の匂い。

「お帰り、井上保明君」

そして背後からの声。ソイツの続ける言葉の先も、もう何遍も聞いている。

「悪いけど、辻褄合わせで死んで貰えるかな」

これが、あの日の全てだった。

「旅行？」

「そつだ。たまには羽を伸ばさないとな」

ソファに腰掛け麦茶を飲んでいる父。

普段から何を考えてるかわからない人だったが、今度こそ本当に突拍子も無い。

「母さんも徳明ももう休みを取ったからな。あとは保明だけだ」

俺の知らない間に勝手に話が進んでいたらしい。

「今日でテストも終わりだし大丈夫だろうけど・・・」

旅行の計画があるなら前もって知らせておいてほしかった。

「まあ、休みが取れなくても無理やり連れて行くけどな」

兄貴が年甲斐も無く子供のよふな笑顔を浮かべる。

「浮かれてんなよバカ兄貴。こういう時だけはやる気出しやがる」

「んだとお！？俺だつてなんだかんだ仕事してんだぞ！？」

「ほらほら喧嘩しないの。保明ももう出ないと学校遅れるわよ？」

時計を見ると、既に8時を回っていた。走らないと始業のチャイムに間に合わなさそうだ。

「やっべ、行つてきます！！」

俺はソファから立ち上がり、一目散に玄関へと向かう。

「保明ーカバンはいらないのー？」

「いらねえ。ペンだけあればテストは乗り切れる」

部屋に戻る時間すら惜しい。速攻で靴を履き、俺は家を飛び出した。心なしか足取りが軽い。今思えば、俺も浮かれてたんだと思う。旅行なんて、何年ぶりだろうか。

息も絶え絶えに教室に辿りつくと同時に、予鈴が鳴った。

「ヤースー。珍しく寝坊？」

武信がニヤニヤしながら寄ってくる。丁度いい。

「武信、ペン貸せ」

「いいけど・・・荷物どうしたの？」

「あア？テスト受けンのに教科書もノートもいらねえだろうが」

「随分と余裕だね。ほら」

鉛筆を一本手渡される。欲を言うとシャーペンが良かったが、選り好みできる立場ではない。

武信に礼を言つて席に着くと、プリントを抱えた教師が入ってきて生徒に着席を促した。1限目は確か数学だ。

5限目の終了を知らせるチャイムが鳴り響き、3日間に渡る長い戦いは終わりを告げた。

しかし、僕らの戦いはこれで終わりではない。来週にはテストが返却され、教室は再び阿鼻叫喚の地獄絵図へと変わるであろう。

「果たして僕らは生き残る事ができるのかーっ！！」

「さっきから耳元で喧しいんだよ」

「いたっ」

いつの間にか近くでナレーションを始めていた美月の頭にチョップをかます。

「何すんのよ」

「こっちの台詞だ。いきなりなんだよ」

「テストどうだったのかなーって思ってた」

「テスト？」

あんなものは日々の授業をしつかり聞いてノートをとっていれば9割は余裕で取れる。いちいち勉強してないだの習ってないだの喚く奴等は今少し授業態度を改めるべきだ。

「うわーガリ勉君の発想」

「うるせえ、オマエはどうだったんだよ」

「まあ余裕？みーたーいーなー？」

やたら語尾を上ずらせた自信満々な態度がハナにつく。

「そついうんは俺より学年順位上げてから言えバカ」

「ぐっ……何も言い返せん……」

勝ち誇っていたかと思えば急に落ち込んだり、忙しいヤツだな。

「これ武信に返しといてくれねえか。どうせこの後会っただろ」

自分の席に戻ろうとする美月に鉛筆を投げて寄越す。

「ん、いいけど。もう帰るの？」

「残っててもやる事無えしな。帰って寝る」

席から立ち上がり、廊下に出る。水道の窓から射す夕陽が乱反射し、電気の点いていない廊下に光を運んでいる。

「そつだ、やつち君」

振り返ると、鞆を腕に引つ掛けた美月が反対側の入り口から顔を出した。

「妙なあだ名付けんな。どうした」

「最近このあたりで不審者うるついでるらしいから、気をつけてね」

「ああ？そんなもの返り討ちだ」

「・・・ほんとに、気をつけてね。それじゃ」

美月は踵を返すと、肩で切りそろえた髪を靡かせて階段へと歩いていった。

日も落ちかけた午後7時前。玄関の戸を開けようとして、鞆に鍵を入れっぱなしだったことに気づいた。インターホンを鳴らす、中からの反応は無い。まだ出かけているんだろうか。

試しに兄貴の携帯にかけてみる。呼び出し音と同時に、どこからかデフォルトの着信音が鳴り響く。

「んだよ。いるじゃねえか」

着信音は居間から聞こえているようで、庭に回ると確かに灯りが点いていた。カーテンを閉めるどころか、窓すら全開になっている。

「無用心すぎんだろ・・・ただいま。呼び鈴鳴らしてんだからさっさと出て・・・」

虫の声さえ聞こえない程の静寂。その中で無機質なコール音だけが鳴り響いていた。

居間には、母親と兄貴が血を流して倒れていた。2人も身じろぎ一つもせず、まるで死んでいるかのような様相だった。

「どっつなっつんだよ、母さん！兄貴！！」

3月20日。車中。

「起きろヤス、着いたぞ」

右側から聞こえる声に返そうとするが、意識がはっきりとしない。

「・・・糞が、気分悪い」

今の夢を出来るだけ記憶するよう努めたが、その大半は頭痛と吐き気に飲み込まれる。

「また例の夢か？」

「みたいだな」

サイドブレーキを引き、車から降りる優輝。

「何か思い出せそうか？」

施錠している優輝を尻目に、一足先に石段へと足をかけた。

霊園に足繁く通うというのもなんだか気味が悪いが、向こうがここを指定したのだから仕方が無い。

「いやア、進展ナシだな」

「難儀するな」

大した段数の無い石段を登りきると、街中へと吹きおろす風が俺達を出迎えた。薄着をするにはまだ少し早いようだ。

「それでも無えさ。このあたりで待つて貰えるか」

石段すぐ正面の小さな鳥居の前に優輝を残し、右へ曲がる。ここから2区画先のデカイ木を左に曲がった所。そこに居る筈だ。

「よオ」

警官2人に挟まれ、両手の皺を合わせて目を瞑る仁に声を掛ける。

「シャバの空気はどうだったよ」

「普通だ。何も変わりはない」

「そオかい。その警官二人、先に車回しといてくんねえか。コイツに話がある」

「しかし、自分達は被疑者から目を離すなと」

「見てた事にしときゃいいだろうが。5分でいい、早く行け」

警官は互いに目配せし、

「・・・了解しました」

鳥居の方へと歩いていった。

「どうした保明、まだ私に聞くことがあるのか？」

「ああ」

「取調べは先日全て終わったと聞かされたが」

「アンタが出所してからのな。心配すんな、個人的な話だ」

俺はシガーケースを取り出し煙草に火をつけた。

「吸うか？向こうじゃ1日1本らしいじゃねえか。拷問だな」

「遠慮しよう。保明ももう煙草を吸う年になったか」

「アンタが捕まる前から隠れて吸ってたさ。兄貴もな」

「なっ……」

珍しく驚いた表情を見せる仁を横目に、シガーケースをそのまま墓に供える。

「ガキなんてどいつも同じだ。でかくなるにつれて、隠し事も増えるもんさ。アンタだってそうだろ？」

仁は何も言わず、ただただ俺の瞳に真意を探るような目線を送っていた。俺は吸殻を安っぽい携帯灰皿に仕舞い、その視線に応じる。

「聞かせて貰おうか。あの日の事も、アンタが捕まった理由も。全部な」

「何から、話したのか・・・」

仁はコートのポケットに両手を突っ込み、小さく溜息をついた。相変わらず北風は休む事無く吹き続け、柔らかな日差しが寒さを幾分か和らげている。

「そオだな。本題に入る前に、まず立体駐車場で起こったワケわかんねえ現象についてだ」

「保明が優輝君を助け、犯人に向けて発砲。しかし発砲した弾が自分に命中した。それだけだな」

さらりと流されそうになったが、この話をここで終わらせるわけにはいかない。

「ああ？どう考えても説明つかねえ部分があんだろつが。その仕組みを教えろって話だ」

「ある程度の説明は出来るが、恐らく理解出来ないと思うぞ」

「構わねえ。知ってる事全部話せ」

「保明は今朝、何を食べた？」

毎回話の飛躍が凄まじいヤツだ。意味の無い質問のように思えたが、

関連があると信じて真面目に答えることにする。

「残りモンの唐揚げだ」

「それをどうやって食べた。箸か？フォークか？」

「箸だな」

「何個食べたんだ？」

「そこまでは覚えちゃいねえ。10個も無かった箸だ」

「そうか」

「ああ」

そこで会話は途切れた。葉の擦れる音がえらく耳に障る。

「・・・バカにしてンのか？」

「大真面目だ。つまり保明は今朝、箸を使って唐揚げを食べた。具体的な数は覚えていないが、10個程度食べてきたわけだな」

「だからどうしたよ」

「それが保明の負傷した理由と一緒になんだ。これら二つの事実は現在において過去であり、既に確定した事象だ。絶対に覆らない。そして未来とは未確定だからこそ未来なのであって、未来が既に確定している場合、それは過去と同義だ」

「つまり俺が怪我するって事が、あの時点で決まっていたって言うてえのか」

「そうだ」

言葉も無い。

「本来なら、保明は犯人の銃弾を受けて倒れる筈だった。それがどういうわけか、保明はその弾を全て避けてしまった。これでは保明が銃弾を受け倒れるという結果が変わってしまう」

「それで俺の撃った弾を一時的に消して、矛盾の出ねえように再び出現させて俺の足と腹にブチ込んだってワケか」

「理解が早くて助かる」

「これっぽっちも理解しちやいねえよ。おかしいだろうが」

「弾が消えたことがそんなに納得いかないか？この世界には説明できないエラーのような事象がいくつもある。乗客を乗せた飛行機が空で忽然と消えたり、アメリカの消磁実験もそうだな。それらについて、保明は納得のいく答えを出せるのか？」

思わず齒噛みする。

「今回の事象はそれらのケースの1つに過ぎない。私達の知らない場所で、こういうことは頻繁に起こっているんだ」

「仮にも科学者だったヤツがんな事認めていいのかよ」

「科学が発展するにつれて、納得出来ない事も増えていくものだ」
煙に撒かれているような気がしてならないが、これ以上追求しても時間の無駄だ。

「俺が怪我するとわかっていても、わざわざここに来て助言したのかよ」

「ああ」

「あの時も、母さんと兄貴が殺されること、知ってたのか」

「・・・保明、お前は何処まで覚えている」

「どこまでって、何の話だよ」

腹の探り合いをする前に、こちらの手の内は見透かされているようだ。

「保明が入院していた病院で医師から話を伺った。PTSDを患っているそうだな」

「なんでテメエが俺の話の話を聞けんだよ」

「手段などいくらでもある。今回は保明が籍を抜いていなかったのが手助けになっただな」

「チツ・・・」

完全にぬかった。こんな事態をそもそも想定していなかったワケだが、書類だ何だと面倒な手続きを避け続けたのが裏目に出ていた。

「確かに俺はあの日の事をよく覚えちゃいねえ。俺が発現したのもあの時らしいが、それすら曖昧なんだ」

「・・・本当に、すまないと思っている」

「俺が欲しいのは謝罪じゃ無エ事くらいわかなだろ。俺が欲しいのは」

「知ってどうする」

風が止んだ。

「お前が事件を覚えていないのは、お前が忘れたいと望んだからだ。そこに信じたくない現実があったからだ。それを二度と思い出さなように、わざわざ自分で頭の奥に閉じ込めた」

「無意識に自分が護って来た物を、保明は自分で壊すと言うのか？」

「・・・嫌なんだ」

「アンタは母さんも兄貴も、誰も殺しちゃいねえ。それだけは覚えてんだ」

「でも”現実”は違った。アンタは罪を認めて殺人犯のレッテル貼られて、俺はその息子として世間様から同情の目で見られんだ。俺ン中ではアンタも俺も被害者だった。だけど世間はアンタを加害者だと言って聞かねえ」

「俺の見てきた物全部否定されたんだよ。もう何も信じられなくなつちまつてなあ。終いには俺ですら、本当はアンタが殺したんじゃないかねえかって疑いはじめた。そう信じることで俺の平静が保てンならそれでもいいって思ってた」

「でも実際はどうだよ。久々に逢ってみたら俺の心配はする、俺等の事は助ける。”この手で助けられる命があるなら助けたいと思うのは不思議じゃない”だと？ふざけンな」

「俺がどれだけ振り回されたと、思ってんだ。テメエは・・・」

息が切れ、足元がふらつく。頭がしめつけられるような痛みを発している。

「保明・・・」

「いい。自分で立てる」

肩膝をついた俺を起こそうとする手を拒む。

「わからなくなつたんだ。アンタが殺人犯なのか、俺の父親なのか」

「曖昧なままなのが、嫌なんだよ・・・」

「 当時、私達はある研究をしていた」

2年もの間閉ざされていた口が、ようやく開く。

「精神干渉型能力者の能力構造の解明、及びその再現だ。その研究には結構な人数が動員されてな。それに私と母さん、徳明も参加した」

「私達は再現する側に回された。保明が以前話していた母さんの論文を元にしてな」

「結果としては成功した。能力者の精神干渉モデルとはかけ離れていたが、それに近い結果を出せるものを作り出す事が出来た」

「それが例の人払いつてヤツか？」

「いや、もつとたちが悪い物だ。指定した範囲内の人間一人ひとりに自らの意思と関係なく、外部からの命令を実行させる装置。すなわち」

「・・・集団洗脳装置か」

「そつだ。小規模ではあったが、ある程度複雑な命令でも実行させることができた」

「それが発展していけばどうなっていたか、想像に難くないだろう。人間を生き人形に作り変える装置など、倫理に反する」

「私達のグループも人としての道は踏み外せなかった。会議の結果、その装置は完成せずに研究は白紙、装置は基礎から全て破棄という筋書きになった」

「尤も、人の口に戸は立てられないものでな。その装置が完成したという噂が別の研究チームへも伝わっていたようだ。思えばその時点で形振り構わず破棄しておけば、違う結果になっていたかもしれないな」

「破棄する当日、動作履歴を確認したんだ。見覚えの無いものが一件追加されていた。日付は装置破棄当日の朝。実行日は本日午後18時30分となっていた。命令内容は・・・」

「装置開発に直接関わった者の殺害、及び事実の隠蔽だった」

「家に電話を入れたときにはもう手遅れだったよ。あの時ほど自分の行いを悔いた事は無い」

「それでアンタが家に着くよりも先に、俺が帰って来ちまったわけか」

「ああ」

「だとすると、どうしてアンタは生きてる。真ッ先に狙われるじゃねえか」

「これを持っていたからだろうな」

仁はコートのポケットを漁り、見慣れない規格のディスクを取り出した。

「それは？」

「MOディスクだ。装置の核となる重要な情報を予め抜いておいた。具体的には装置の座標・範囲指定の拡大と、複雑な命令を与えるために必要なソースコードをな」

「その結果、被害は井上家一世帯のみで、なおかつ犠牲も最小限に・・・」

「最小限だと？」

「自分の家族が殺されてんだぞ！？それで最小限だツてか！？ふざけンじゃねえ！！！！」

「・・・何とでも言うてくれ。私には言い返す資格が無い」

「クソがツ・・・！！」

「私達全員がこうなることは覚悟していた。しかし、自らの研究に殺される事になるうとはな」

「それで、母さん達を襲った奴は誰なんだ」

「私の研究チームの一人だった男だ。彼も母さん達とほぼ同時刻、拳銃で自殺している」

「あの場に駆けつけた時、既に母さんも徳明も事切れていた。そこに私が近づいた事で、彼の”射程”に入ったんだ。それを私に引き付けて、そのまま自宅から離れた」

「その引き付けた先で、アンタを殺すより先に自分で頭を撃ちぬいたってワケか」

「私にもそのあたりはわからない。ソースコードを抜き出した事も筒抜けだったのか、あるいは抜き出しによって生じたバグなのか」

「そこは問題じゃ無え。どうしてアンタが罪を被った」

「私達にとって最も安全に済ませられるからだ。保明は事の真相を知らずに叔母の家に保護され、世間の目にある程度晒されている事を考えても、危険はほぼ無い。私に関しても刑務所に入っている以上、下手に手出しは出来ないからな」

「元は自分の撒いた種だ。無関係の人達を巻き込むわけにもいかなかった。それが自分の息子ともなれば尚更、な」

仁は再び俺を見据えると、ゆっくりと息を吐いた。

「これがお前に隠していた全てだ。もう私から話せる事は何も無い」
気づけば風が寒さと一緒に雲も運んできたようで、空が灰色に塗りつぶされている。一雨来そうだ。

「保明の記憶の空白は埋まったか？」

「残念だが足りねえな。ただまあ、なんつーか」

記憶が飛んでいるせいか何やら釈然としないが、思っていたよりも正直に話してくれていたように感じる。

「悪かった。疑ったりして」

頭を下げた。いつか俺の記憶が完全に戻ったら、もう一度コイツに謝らないといけないな。

「いやあ悪いなお巡りさん。結構待たせちゃまったみたいで」

警官はただ一度頷くと、仁を護送車へと乗せた。

「オイ」

「どうした保明、まだ何かあるのか？」

「このMO、本当に中身は空なんか？」

「後で確認してみる。データは何も残ってはいない」

「そオかい」

「今の話だけじゃアンタを出してやる事も出来ねえし、この先も出来るかわからねえ。ただ、出所の時ぐらいは迎えに行つてやるよ」

「すまないな」

「いちいち謝ンな。それじゃ達者でな、父さん」

「・・・保明も、元気でな」

ひとしきり会話を終えると、仁を乗せた青い護送車は坂の向こうへと消えていった。

「親子の蟠りは解けたのか？」

軽く背伸びをする優輝。

「大体はな。聞いてみりゃ難しいようで単純なモンだった」

「とりあえず飯でも行くか。近くにうまいラーメン屋を見つけたんだ」

「へえ。言ツとくが、俺は味にうるせえぞ」

「臨むところだ」

「臨むのはラーメン屋の店主だろオが」

結局、今日わかったのは二つだけ。一つは、思いのほかラーメンが旨かったという事。

もう一つは、アイツが俺の父親だって事だ。

033 - 父子のダイアローグ3

3月20日、13時15分。 武警隊舎前。

思ったよりも会話にエネルギーを消費していたらしく、ラーメンとライス、餃子一皿を難なく胃袋に収めた俺は、優輝の運転で隊舎へと戻ってきた。

「降りねえのか？」

「繭が制服取りに行くらしいからな。迎えに行ってくる」

「あああの糞ガキな。元気してんのか？」

「人の妹捕まえて糞餓鬼は無いだろう・・・来月成橋高校に入学だ」

「ンだよ俺の後輩になンじゃねえか。よろしく言っといてくれや」

「ああ。それじゃあまた明日な」

「じゃあな」

優輝を見送り、自室へと戻る。

「どづしたモンかね」

飯を食ったら薄れるとも思ったが、やはり仁との会話の違和感が抜

け切らない。

ひとまず顔を洗い、殺風景な部屋の隅に佇むベッドに腰掛ける。

「ああイライラする。何なんだ畜生が」

奥歯に魚の小骨でも引つかかっているかのような、なんとも煮え切らない気持ち。

「アイツが丸々嘔吐してたか・・・いや」

会話そのものを疑うのはナンセンスだ。この違和感の原因は会話そのものじゃなく、そのどこかにおかしい部分があったからだと思う。

「話自体に妙な箇所は無かった筈なんだが」

街中で遭遇した時ですら隠していたことを、あまりにもあっさりと話しすぎていた感があったが、話の筋は通っている。

俺の家族が襲撃された理由。集団洗脳装置を巡りたいざごぎ。関わった人間を全員消してまで手に入れるべき機械。いや、殺されたのは井上家一世帯と言っていたな。

「調べてみるか」

ベッドから立ち上がり、これまた隅に置かれたパソコンの前へと移動する。

「まあ、見つからねえわな」

個人で調べられる範囲では手が届きそうに無い。4課で再び調べる必要があるな。

ふと、一家心中の記事に目が留まる。

「そついや、殺された事になってる通行人つてのも研究チームの一人だったツけか」

被害者名・三橋要。日財系能力研究所勤務。妻は居らず、俺より5つ下の娘が一人。拳銃により側頭部を撃ち抜かれ即死。使われた拳銃は井上家殺害で使われたものと同じ。

日財系能力研究所について調べてみるが、事件から3週間後に研究所ごと解体されていた。

作ったモノがモノだけに、利用しようと思む組織を考え出すとキリが無い。

「チツ、話がデカ過ぎンだよ」

背もたれに体重を預け、腕を弛緩させる。

仮に政府や警察が装置の残骸を回収し隠蔽していたとしたら、それこそ俺の手に負えない。

「警察・・・？」

仁が出所した直後から追い回していた組織。警視庁公安部。

「だったらなんで易々と解放した」

公安の仁に対する尋問はこちらにも開示されていたが、一連の事件との関与も否定され、それらしい質問内容も無かった。強いて挙げらるなら人払いに関する事程度か。

あのMOの中身を公安に引き渡す目的だったなら。いや、それならどうして公安から逃げる必要がある。

アイツが出てきてやった事といえば、公安から身を隠しつつMOの中身を消去したと、俺に助言したぐらいで……。

「助言、か……」

”保明が優輝君を見つげなかつたら優輝君は潰されていたし、保明が彼に電話をしなかつたら、彼も死んでいた”

俺がちよっかいをかけたおかげで優輝は死なずに済んで、ジョニーも無事だった。これは恐らく、俺が未確定の未来を変えたという事だ。

”未来とは未確定だからこそ未来なのであって、未来が既に確定している場合、それは過去と同義だ”

なら、どうして俺はそれを変えられた。仁の視た未来を、どうして捻じ曲げる事が出来た？

いや、問題はそこではない。ずっと感じていた違和感の正体が浮き彫りになってくる。

”本来なら、保明は犯人の銃弾を受けて倒れる筈だった。それがどういうわけか、保明はその弾を全て避けてしまった。これでは保明が銃弾を受け倒れるという結果が変わってしまう”

優輝とジョニーの時は大丈夫で、どうして俺は怪我をした？

”それで俺の撃った弾を一時的に消して、矛盾の出ねえように再び出現させて俺の足と腹にブチ込んでワケか”

俺の行動は、何に矛盾した？

携帯が振動している。放っておいて深く考えたかったが、どうやらジヨニーから電話のようだ。

「あアもしもし？今忙しいんだが」

『ヤス君、落ち着いて聞いて欲しい』

12時50分。護送車内。

井上仁に乗せた護送車は、街へと続く緩やかな坂道をひたすらに下っていく。

当然ながら車中の会話は無く、降り出した雨が乾いてひび割れたアスファルトを濡らしていくように、冷え冷えとした空気が漂っていた。

仁は目を閉じ、ここ2週間の出来事を思い返す。

自分は本当にやり遂げられたのだろうか。やり残しは無かっただろうか。そんな漠然とした不安が車に乗った直後から押し寄せ、仁の思考を侵食していく。

どの道、息子との会話を終えた時点で仁はゴールテープを切っている。ここで後悔したところで、今は何も変えられない。暗い感情を払拭するように、仁は冷え切った手で額を拭いた。

不意に車のスピードが緩み、徐々に左へと寄っていく。どうやら前方に誘導灯を持った者が居たようで、護送車はゆっくりと路肩に停止した。

「ご苦労様です。ここから乗せ換えとなりますので、囚人の移動をお願いできますか」

「乗せ換え地点はもう少し先の筈ですが？」

「そちらの到着が遅れているようだったので上に確認を取ったところ、この先の墓地に立ち寄りされていると聞きましたので。乗せ換え地点を変更させていただきました。変更通知が届いているはずですが？」

「・・・これは失礼しました。変更通知を確認、引継ぎをお願いします」

灰色の目だし帽を被った男の指揮の元、仁は黒塗りの護送車へと乗せ換えられた。

「協力ありがとうございます。完了手続きの方はこちらでしておきますので」

手際よく乗せ換えを終えた目だし帽の男は警官へ会釈をし、助手席へと乗り込んだ。短いクラクションを合図に、黒い護送車は坂を下り始める。

「やっぱりこういうのって緊張しますね」

目だし帽の男は苦笑いを浮かべ、手錠の鍵を仁へと投げて寄越した。

「転送していただいたデータの中身は確認できました。MOそのものはどうしました？」

「フォーマット後、物理的に破壊した。ダミーを保明に渡したよ。そっちも中身はフォーマット済みだ」

「抜かりないようで」

「君達が来たということは、まだ私の役目は終わっていないのか？」

「いいえ。貴方にはこの二週間、やるべき事はしっかりやって頂きました。ハンドアウトの方は役に立ちましたか？」

「感謝しているよ。おかげで怪しまれずに済んだ」

「そつでしようね」

男は何が可笑しいのか、終始にこやかに笑っている。

「保明君にはどう説明したんですか？まさか本当の事を話したわけではないですよね？」

「基本的には全て真実を話したよ。核心に触れるような部分はぼかしているが」

「結構な冒険しますね」

『至急至急。警視庁から各局。東京成橋管内』

警察無線らしき音声がノイズとともにカーステレオから流れ出る。

「今頃気づいても手遅れなんですがね・・・」

目だし帽の男は帽子を深く被りなおし、

「ここでまた乗り換えます。すみません慌ただしくて」

一足先に車から半ば飛び出す形で降車した。

護送車が停止した後方に、シルバーのセダンが止められている。目だし帽の男は手早く乗車を済ませると、降りてきた仁をすぐさま助手席へと招き入れた。

「適当に山回ったら例の倉庫に停めといてくれ。それじゃ」

護送車の運転手に指示を飛ばすと、護送車は成橋山に面する道路へ、セダンは国道へと発車した。

「喉渴きませんか？何か飲み物買っていきましょうか」

「そんな悠長なことを言っている場合でも無いのではないか」

「そうですね。あ、喉渴いたら後ろのポリタンクから勝手に飲んじやあっていいですよ。まあ中身ガソリンなんですけど」

男の冗談に付き合う様子も無く、仁は会話を再開した。

「これで彼らは助かったのか？」

「貴方のお陰でね。優輝君と保明君はしばらく大丈夫だとは思いますが。ただ彼等ああいう仕事してて、しかも能力者ですから」

「保障しかねる、というわけか・・・」

車は国道から進路を変え、再び成橋山方面へと向かう。

「しかし意外でした。まさか貴方が保明君に本当のことを話すなんて。てつきり嘘の上塗りをするのかと」

「もうこれ以上、保明に嘘を吐きたくない。私のせいで息子の人生を台無しにしてしまったんだ」

助手席から木々を眺める仁の目はどこか虚ろで、もっと遠くを見ているような印象を受ける。

「貴方が保明君に話した事で、彼が真実に辿り着くかもしれない。その時は」

「話すさ、今度こそ全部な。どちらにせよ、何れ直視しなければならなくなる時が来る」

「そうになると俺も忙しくなるんで、出来れば避けたいですね」

男は再び苦笑した。

「この二週間で、向こう側に動きは？」

「これといって特には。ですが気になる事が二つほどありまして。両方とも貴方が絡んでいたのを知っていると思います。まず一つは、人払いを使用した形跡が見られました。こちらに関しては大方の予測はついていますが」

「私を狙っていた連中だな。恐らくは装置の完成が目的か、あるいは」

「どの道ろくでもない連中に変わりありません。聞いたところ保明君の予測とはいえ、貴方殺されかかったらしいじゃないですか。要警戒ですね。そしてもう一つ。寧ろこちらの方が警戒すべき事ですが」

舗装された道路から砂利道へと入る際、車が軽く跳ねる。

「すみません運転下手糞で。それでもう一つというのが、ヘルメッ

トの女が言っていた内容です」

「脚本家”か・・・」

男は溜息を吐き、

「どこから洩れたんでしょうね。こいつのお陰で武警の一部とその周辺に脚本家というワードが知られました。まだ修正可能ではありませんが」

「円卓の騎士の名を騙っているらしいな」

「まあ、表向きには規模もわからないテロ集団の総称ですから。ですが彼女は少々、目立ちすぎましたね。捜査の攪乱という意味ではいいかもしれません。彼女に関しても現在調査中です」

車は砂利道を外れ、木々の間を縫うように進む。空を覆う葉の群れが光を遮断し、時間の感覚を薄れさせる。

「その他にもいろいろ障害はあるみたいですが、それ程脅威では無いみたいです。曖昧な報告ばかりですみませんね。何せ使えばしりですから、俺」

「充分だ。一時的に刑務所から出して貰っただけでも、感謝に余る」

「我々の今後の目的としては、最優先で脚本家の位置を特定すること。次いで人払いの無力化及び解体、あとは木戸さんの解放ですね。っと、このあたりでいいかな」

男はあたりを確認すると、広場のようになっている場所に車を止め、

エンジンを切った。

「ここに何かあるのか？」

「いいえ、何も」

男は仁の質問を適当にあしらひ、

「お聞かせ願います。今からMOのソースを再現した場合、装置は復元できますか？」

「可能だが、かなりの時間がかかる。プログラムを一から組むとすれば尚更な」

「具体的には？」

「どれだけ早く見積もっても三ヶ月だな」

「ではもう一つ。ソースコードは何十にも暗号化されているそうですが、その複合方法を知っているのは、貴方だけですか？」

「・・・ああ」

「それを聞いて安心しました。しかしながら」

「念には念を入れないといけません。貴方がデータを消去したうえで、MOそのものを破壊したようにね」

外気が漏れ出したかのような冷たい空気が車内を包む。

「・・・私は、これからどうなるんだ」

「貴方がそれを聞きますか」

男が薄く笑う。

「先程申し上げましたとおり、貴方にはやるべき事を全てやって頂きました。この意味、わかりますよね？貴方は、井上仁はここでおしまいです」

男はマッチを擦り、煙草に火をつけた。

「直火焼きと蒸し焼き、どっちがお好みで？」

『夜11時のニュースをお伝えします。今日午後2時過ぎ、東京都成橋山の山中で乗用車が燃えているのを近くを通りかかったダム作業員が発見し警察へ通報。運転席に人は居らず、助手席に乗っていた遺体は焼失が激しく、現在警察が身元の特定を急いでいます。続いているニュースです・・・』

case . 09 end

034 (前書き)

今回は本編に直接関係しない話です。読み飛ばしていただいてもストーリー進行に支障はありません。

或る日の7課にて。

「いいか？チャンスは一度だ。絶対にしくじるなよ」

優輝は頬を伝う汗を拭くと、古めかしいトランシーバーへと声を向けている。

『こちらヤス。早いとこ片付けちまおうや』

『こちら直毅。準備OKだオーバー』

『はやあく』

各々が配置についた旨を告げる。

『……こちら武信。報知器は止めたけど……』

「どつした武信。歯切れが悪いぞ」

作戦当初から嫌な顔をしていた武信が抗議の声を上げた。

『……やっぱり僕達だけでやるのはやめたほうがいいんじゃないかな』

『今更何言っただよ。ここまで来て引き下がれねえだろうが』

『怖気づいたか武信ちゃんよお』

『・・・なら直毅代わってよ』
『嫌だ』

『・・・即答かあ・・・』

「無駄口を叩いてる暇は無いぞ。カウント開始、3」

皆が皆、導線に繋がるスイッチを握り締める。

「2」

この作戦の成功を祈りつつ、握り締める。

「1」

スイッチに親指をかけると同時、

「点火あ!!--」

某日、7課会議室。

暇を持て余した7課一同は、相も変わらずテレビゲームに興じていた。

「死ねや直毅イ!!!」

画面左上から右上の直毅に奇襲をかけるヤス。

「残念だったなあ!こっちにやアーマーがあんだよ!!鉛筆銃を食らいやがれえ!!!!!!」

「はい二人ともさよならー」

「リモコン爆弾だど!?汚エぞひよこオ!!!」

「いや、俺よりも黄金銃持ってトイレに立て籠もってるぐんまの方がひどくないかい」

画面右下には、弾を回収して回るぐんまの姿が映し出されている。

「ホッヒヒー」

「そして俺はダクトから始まるしよお。おいぐんま、降りるまで絶対撃つなよ」

「わあかってる」

直毅は水色に塗られたダクトを抜け、洋式便器の上へと着地した。その瞬間、画面右上が真っ赤に染まる。

「テメエ撃つなっつたろうが！ぶっ殺されてえのか！！」

「殺したのは俺だよお」

「見りゃわかんだよ！！なんで撃つた！！！」

「降りるまで待つてから撃つた。俺はわあるくない」

「いや確かにそういったけどよお。もっところ、なんつつか・・・わかんたろ！？普通部屋出るまでは待つたろ！？？」

「わあるくないあいい」

「しかもまたダクトから始まってんじゃねえか！！あゝあゝイライラさせんなFxxk！！！」

直毅がコントローラーを投げた衝撃で、画面に無数の横線が入り、BGMに乗せて不愉快なノイズが混じる。

「オイ止まっちまっただろオが。大人気無えぞ直毅」

「そーだそーだ」

「ホヒヒー」

「こいつらっ・・・！！！」

言い争う声が外にも聞こえてきたのか、買い物袋を抱えて入室した優輝が割って入る。

「しょうもない事で争うのはやめろ。ほら」

袋の中からジュースを取り出し、直毅に手渡す。

「ん。やっぱりコーラは三五缶に限るぜ」

「すぐ機嫌直るんだな・・・それとこの部屋、相当煙たいぞ」

「・・・換気扇、完全に壊れちゃったからね」

傍観を決め込んでいた武信も輪の中に入る。

換気扇のファンはいつからか回ることを放棄しており、室内には煙草の煙が充満していた。

「なーんだろ、断線したかな」

「ひよこ、調べられるか？」

優輝の言葉にやってみると応じ、目を閉じるひよこ。

「断線は・・・してないね。うんうん。あー、なるほどなー・・・
あー・・・はいはい・・・」

後半に差し掛かるにつれて明らかにトーンダウンしていく。

「声だけじゃ伝わんねえよ。どうなってる」

「奥に何か詰まってるみたいだわ。俺はトイレ行ってくるから誰か調べといて」

そう言い残し、ひよこはそそくさと部屋を出て行った。

「調べるも何も、あいつ一人で事足りるじゃねえか」

直毅は長机の上に載せた椅子に登ると、換気扇に手をかける。

「……でけえネズミでも居やがるのか？」

手をかけると同時、換気口の奥のほうへと駆けていく小さな足音が響いた。

「ああ、確かに何か詰まってるな。ゴミ袋みてえな……優輝、ライト貸せ」

換気口の遙か奥に、昔普及していた黒いゴミ袋が引っかかっているようだ。

「まったくよお。換気扇にゴミ袋なんか詰まるか普通？」

換気口にマグライトを突っ込み、奥を照らす。ゴミ袋が風に揺られたように蠢いている。

次の瞬間ゴミ袋は形を崩し、海岸に打ち寄せる小波のような音を立てながら光へと群がってきた。

「うおお!？」

黒い波の動きよりも速くライトを引き抜き、換気扇を閉めた直毅が椅子から転げ落ちる。

「おい大丈夫か？」

一同が直毅の周辺へと駆け寄る。

「やべえマジやべえ。やべえつつかパねえ。マジパねえっす優輝さんパねえ」

「落ち着け。今の音はなんだ」

「足音。つつか羽音か?とにかくやべえ。ゴミ袋じゃなかった」

「前置きはいいんだよ。何だったんだそりゃ」

「ゴキブリの群れだった」

数秒の静寂。皆が言葉を失っている間も、会議室の換気口に巣食う”G”の生活騒音が響いていた。

再び買出しへと出かけた優輝の代わりに、直毅がひよこに電話をかける。

『・・・もしもし』

「てめえ何が居たかくらい教えてくれても良かったんじゃないのか。おかげで腰ぶつけちゃった」

『・・・すみませんでした』

普段とは打って変わり、弱弱しく武信のような話し方になっているひよこ。

『俺が虫嫌いなもの知ってるよね』

「そういう問題じゃねえだろ。逆に聞くが、アレが好きな奴なんか居るか？居ねえよな？」

『・・・居ないっすね』

「だろうが。とにかく今すぐ戻って来い」

『断る』

「ああ!？」

『Gが居る部屋になんか戻りたくないって』

「ふざけんのも大概にしろよ？これから俺等で駆除すんだよ。お前も手伝え」

『馬鹿じゃねえの!？業者呼べよ業者』

「金の無駄だろ」

『全然無駄じゃないから！下手に刺激しないほうがいいって絶対！』

「もういい、お前がチキンなのはわかった。これからはひよこをFxxkin Chicken野朗、略してファミチキ野朗と呼ぶ」

『ミはどこから来たんだよ・・・なんでもいいや、とにかく業者さんに頼もう』

「優輝が例の煙で撃退するアレを買いに行ってるからよお。もう遅え」

『は・・・まあ頑張ってるね。俺はそこらへんで時間潰してるからさ。じゃーねー』

「おい待つ・・・切りやがったぞあいつ」

「かあしこい判断」

「ほんと使えねえ野朗だ。ジヨニーも居ねえし、俺等だけでやるしかねエな」

「.....」

武信が俯き、肩を震わせている。

「どつした武信」

「・・・ひよこなのにチキンだつて・・・成長しちゃった・・・」

「オマエの笑いのツボがわかんねえよ・・・」

「よし、みんな準備はいいか」

優輝が長机に袋の中身を広げる。

「作戦の内容を説明する。まずは14階の見取り図を見てくれ」

スクリーンに映し出された地図にレーザーポインターを照射しながら説明する優輝。

「14階はこの会議室を含め、9部屋で構成されている。換気扇の数は会議室に2箇所、武器庫に2箇所、あとは各1箇所。そして廊下に3箇所。そこで吸い上げられた空気は換気口を伝い、階段正面の空気清浄室へと送られている。ちなみに空気清浄室に換気口は無い」

「つまり全部で13箇所つてわけか」

「そうだ」

「待て。点火はどうすんだよ。俺等に走り回れツてか？」

「心配いらん」

優輝はポケットから黒いコードとスイッチを取り出し、同じく長机の上に置いた。

「3課からの借り物だが、圧電素子に導線を取り付けたものだ。電子ライターの着火部分と思ってくれて構わない」

「部屋の換気口にこの缶タイプの駆除剤を設置し、圧電素子で同時に着火。煙で空気清浄室へとGを誘導する。大元の換気口に予めゴミ袋で蓋をし、Gをそこに集める」

「……そこからどうするの」

「その袋を」

「……袋を」

「武信が」

「……僕が？」

「捨てる。以上だ」

「ちょ、ちょっと待って」

慌てて止める武信。

「どっした武信」

「……僕がやるの？」

「ああ。何か問題が？」

悪びれる様子も無く、汚れ役をさらっと押し付ける。

「袋からGが漏れたらどうするつもりだ。それを押さえ、袋を縛る者が居ないとこの作戦は成立しない。重要な役だ」

「・・・それ、僕じゃなくていいんじゃないかな」

「何を言う、ヤスや直毅に任せて失敗したらどうするんだ。お前達出来るか？」

ヤスと直毅が一斉に目を逸らす。

「ほじ」

「・・・ほら、じゃなくてさ。ああそうだ、ぐんまに任せよう」

「こいつは戦力外だ。何をしでかすかわかったものじゃない」

「ホッヒヒー。こおれカチカチうるさいよお」

圧電素子を鳴らして遊んでいるぐんま。

「・・・じゃあ優輝が」

「指揮官を最前線に立たせると言うのか貴様」

「・・・わかりました」

観念したようで、武信はがっくりとうなだれた。

「これよりG駆除作戦を開始する。各員持ち場に就き駆除剤を設置後、指示を待て。では散開！！」

武信がゴミ袋を抱え、それ以外が駆除剤とスイッチを持って会議室を後にした。

そして話は冒頭へと戻る。

カチツという小気味のいい音と共に、換気口に設置された缶の上部から煙が立ち上った。

『点火完了。結構煙出るなこれ』

『こつちも問題無エな。任せたぜ武信』

『・・・はあ』

『煙がヤあバい』

「こちらも着火した。あとは待つだけだ」

Gが集団で移動する異音が会議室から遠ざかっていく。

『うわあああ!?!?』

耳をつんざくような絶叫がトランシーバーから漏れているが、皆聞こえないふりをした。

「・・・いつの時代も、犠牲というものは尽きないものだ。許せ武信」

『やばいって！！ゴミ袋から溢れっ・・・やめろおおおおおおお！！！！』

「おい大丈夫か！？応答しろ武信！！」

無線機からの返事は無い。

「糞っ・・・」

慌てて廊下に出る四者だったが、時既に遅し。空気清浄室の開放たれたドアからは、Gの大群が新鮮な空気を求めてこちらへと向かってくる。

「総員退避しろおおお！！」

「畜生が、死んでたまるかよお！！」

「Jesus Fxxkin Christ！！」

「よーゆっ」

ぐんまが残っていた駆除剤全てに火を点けると、Gの群れは階段へと引き返していった。

「ざっけんなくんま！！窓開ける窓！！」

行き場を失った煙が14階一帯を覆いつくし、メンバーの視界を遮る。

「こちら優輝、会議室の窓は開けた。応答願う」

『こちら直毅。視界良好。ガスマスクはやはり素晴らしいものだ』

『こつちも窓全開だ。ツたくいい加減にしるよぐんま』

『ホヒヒー』

「とにかく作戦は完了した。あとは散らばったGの死骸を回収するだけだ」

『武信はどうすんだよ』

「しばらくすれば起きるだろう。後で労ってやらないとな」

『なあ、仕留め損ねたGって、階段に向かったよな？』

「ああ、もう瀕死だろうな。それがどうかしたか直毅？」

直後、階下で女性職員と思われる悲鳴が上がる。

『・・・ヤバくね？』

『オイ優輝、外見てみる』

「外・・・？」

見下ろすと、真っ赤な大型車が数台、サイレンを鳴らしつつこちらに向かってくるのが確認できる。

『ありやなんだ』

「消防ポンプ自動車だな」

『正式名称を聞いてるんじゃないよ。優輝、消防署に連絡したんか？』

「・・・」

『テメエ都合悪くなッてだんまり決め込んでんじゃないぞ！どうすんだよ！！』

「どうするってお前・・・それは・・・」

その後、駆けつけた消防隊員と騒ぎを聞いたジョニーにこっ酷く叱られたの言うまでもない。

結局財ビル内の換気口ほぼ全てにGが蔓延っていたことが判明し、G駆除業者の手によって換気扇問題は解決した。

一連の騒動終息後にひよこが差し入れとしてファミチキをしこたま抱えて入室し、一同の失笑を買ったのはまた別のお話。

3月23日、11時。7課会議室。

「おはよーさん」

眠い目を擦りながら会議室に入る。頬杖をついて椅子に腰掛けるヤス、新聞を読んでいる優輝、銃を磨く直毅、なんとなくジヨニーの動きを観察している武信、先日帰国してからずっとへらへらしてるぐんま。いつもの光景だ。

「遅すぎるぞ。もう少し社会人としての自覚を持ったらどうだ」

「非常時はマツハで来てるやん」

「なら常に非常時だと思って動け。大体ひよこは最近たるんでる」
俺個人としては頑張っているつもりだったが、あまり伝わっていないらしい。

「まあまあ、説教もその辺りにしておいて。会議始めるよ」

ジヨニーが手を叩き、それを合図に皆がスクリーンへと目を向ける。

「まず、井上仁が連れ去られた事件についてまとめよ。事件発生は三日前の3月20日、13時5分。網走行きの護送車に偽装した車に誤って仁さんに乗せ換え、犯人グループはそのまま逃走」

「なんでそう易々と騙されちまうかね・・・」

頬杖をついたまま無然とした表情のヤス。

「乗せ換え地点変更通知の偽装データが送信されてたんだ。一見すると本物のそれと変わらないほど細かく作られていた」

「無能なお巡りが多いこつたな。どうなってんだ最近」

「・・・そのお陰でわかったこともあるんだよね？」

「そうだね、通知の偽装が完璧すぎるんだ」

スクリーンに偽装通知文書が表示される。

「内容はもちろん、ナンバリングまで正確だね。こうなってくると本部に照会をとらない限り偽者とは判断できない」

「・・・内部犯もあり得るって事？」

「身内を疑いたくはないけどね。クラッキングで外部に情報が洩れた形跡も今のところ見つかってないから、警察が躍起になって調べているそうだ」

「仁に乗せた車はそのまま成橋山付近へ向かったらしい。黒い護送

車の目撃証言はここまでだね」

「そして同日14時10分、仁は成橋山山中の乗用車内で遺体となつて見つかった……。これが捜査初期の情報だね」

ジョニーはここから更に、と付け加え、

「現場のタイヤ痕から見るに、仁は山中に入る前に乗用車に乗せ換えられていたようだ」

「警察の目を護送車に向けて、その隙に山中まで乗用車で移動したつて事だよな？」

「多分ね」

どうしてそんな回りくどい方法を取った上で仁さんを殺す必要があったんだろうか。

「やっぱり解せんな」

それは優輝も同じだったようで、

「仁さんを殺害するだけならば、護送車に乗せた時点で達成できた筈だ。それをわざわざ山で焼き殺し、なおかつ人目につく場所で放置など」

「遺体の状態はどうなつてたんだっけか？そつちも相当お粗末だったと思っただけどよお」

「うん。まず乗せ換えミスから乗用車発見までは約一時間だったよ

ね？ただ、それにしても遺体の焼失が激しすぎる。車内にあったコートの燃えカスや毛髪から、井上仁本人と判断されたわけだけど」

「まあ、すぐにボロが出んだろうな」

そう。度重なる不祥事という事で伏せられてはいるが、恐らく乗用車で見つかった焼死体はフェイクで、仁さんはどこかに拉致されているというのが今の7課の考えだ。

「肝心の当人はどこ行っただって話になるけどな」

「さあな。大方の予想はついてんだが」

「井上仁の話を丸々信じるなら、例の人払いとかいう物騒なモン抱えてる連中の仕業だろ。MOだけを狙って街中で襲撃掛けたとすりゃ、殺そうとした理由も合点がいく」

「仮装も得意のようだしな」

SITの真似事に護送車の偽装。なかなか手の込んだ連中だ。

「突っ込んだ仮説を立てんなら、そいつらの目的は集団洗脳装置の再現だろうなア」

人の意思とは関係なく、機械の命令によって人間を動かす装置。それがもし第二次大戦中に完成してたら歴史も変わってたかもなーとか考える。そんな事を考えてしまう程現実味が無い話だ。

「それならちゃっちゃとそいつら捕まえねえとヤバいんじゃない？」

「焦んなよ、まだそいつらが仁を攫ったと決まったワケでも無え。加えて言うなら、アイツはそんなモン作るくらいなら・・・」

閉口するヤス。

「まあ、連中の素性すらわからねんだ。今はそれを調べるしか無えな」

ヤスがスクリーンのリモコンを操作すると、いくつかの記事が表示される。

「仁の居た研究所のその後は前話したとおりだが、何の研究してたかすら隠されてる。ともすりゃ、日財側で残骸を所有してる可能性も否定出来ねえワケだ」

「俺はしばらく4課行って当時研究所で働いてた奴等を割り出してくる。行くぞぐんま」

「めえんどい」

「ブツ殺されてえのか teme 仕事だぞオラ」

「すみませんでした」

ぐんまは立ち上がると、ヤスと共に扉へと足を向ける。

「なんかわかったら携帯に電話くれや。ンじゃな」

「ホヒヒ」

そう言い残すと、ヤスとぐんまは廊下にフェードアウトしていった。

「いや、まだ会議終わってないんだけどね……」

「今回は許してやってくれ。あいつにも思つところがあるんだろう」

「で、俺等はどうすんだよ」

「どつするってもね……」

分かっていることと言えば、仁さんが死んだように見せかけて攫われた（と思われる）事ぐらいだ。毎回手がかりが無さすぎる。

「武信は今回の事件について、どう思っている」

「……ごめん、何？」

「まーた話聞いてないもんこいつ」

「……いや、考えてたんだ。偽の死体を用意してまで、仁さんを死んだ事にしたかった人たちの事」

「それが例のSITもどきなんだろう？」

「……多分、そうなんだけど……」

まだ何か言いたそうな武信だったが、それきり口を閉ざしてしまつ。

「ひとまず俺達は、仁さんが攫われたという前提で調査を進める。
ひとまず警察の資料を漁りに行くぞ」

優輝が新聞を閉じて立ち上がる。

「あいよ。俺等は何行ってくるけど、ジョニーどうするん？」

「僕は遠慮しておくよ。最近本業の方が忙しくなっちゃったからね」

「う」苦労さんだな。おら行くぞ武信」

「・・・え？ああ」

「いつてらっしやい」

歯切れの悪い武信を引きずり、俺達も会議室を後にした。

考えこそ口に出さなかったが、今思えば武信は気づいていたのかも
しれない。仁さんの死が偽装された理由を。偽装した連中の意図を。

昔々あるところに、一人の幸せな少年がいました。

少年は家族にも、友達にも、お金にも、何一つ困ること無く暮らしていました。

そんな少年が高校生になったある日、少年とその家族が乗っていた車が事故に巻き込まれました。

幸せな少年は、一度に家族と自分を無くしてしまいました。終わり。

・・・以上。幸せだった少年の話は、ここで終わった。一人の人生が終了したところで社会は何も変わらない。

今もどこかで誰かが幸せそうに笑い、その裏では誰かが血を流す。

もしも血を流した誰かが死んだとして、そいつ以外の世界は何事も無く、ただ廻り続ける。

終わった話は、終わったまま続く。

3月30日、13時20分。車中。

住宅街を抜けフロントガラス越しに見えたのは晴れ渡る空、白い砂浜、打ち寄せる波。

あと4ヶ月もすれば涼しげな海岸線を歩いてみようという気になりそうなもんだが、生憎季節は春の終わり。涼しげどころか、ただ寒そうな印象しか受けない。

「まあた無駄足かよ。武信、運転変わる気ない？」

「・・・まだ交代して五分も経ってないよ」

訳あって俺と武信は現在、九十九里浜まで来ている。勿論ただのドライブではなく仕事でだ。

ヤスとぐんまの調査の甲斐もあり、仁さんの所属していた研究所メンバーの一人がこの付近に住んでいるという情報を掴んだ。

例の如く、こういう一般人への接触は俺達2人が選ばれる。理由は無害そうだから、という事らしい。

アロハ着せたら完全にチンピラになるぐんまとバナナみたいな髪

色してる直毅は論外として、そもそも4課に籠りっきりのヤスもダメ、わりかし常識人の優輝も身長が高すぎるという理由でダメ。本人にその気が無くても高圧的に見られるようだ。目つきも鋭いしな。そんなこんなで消去法的に選ばれた俺と武信が、片道2時間近くかけて潮風吹き荒ぶ東の街へと足を運んだというわけだ。そして現在、俺達は東京へとUターンしている最中である。結論から言つと、俺達が知っている以上の情報は得られなかった。

「まあ仁さんのチームとは別のところで働いてた人だったしね。あーガソリンもつたない」

「……それでも会議室で暇するよりはいいでしょ。次の交差点右に曲がって」

「へいへい」

海岸通り沿いを脇に逸れ、再び住宅街へと進入する。

「……ちよつと待って、ブレーキ」

交差点の手前で停止するのもまずいので、少し進んだ電柱の影に停車する。

「どした、トイレ行き忘れた？」

「……いや、そういうんじゃない」

「おいおい何処行くんだよ」

車を降りて来た道を引き返す武信を追う。その理由はすぐにわかつ

た。

「あー、ありゃもう駄目だわ。手遅れ」

車に轢かれたらしい三毛猫が力無く路上に横たわっている。

中学生の頃にも、同じようなことがあった。あの時は確か美月と優輝と一緒にだったっけな。

「……埋めてあげようよ。海も近いし」

本来俺達が保健所に引き渡して処分してもらうべきなのだろうが、それだけのために保健所に連絡するのも面倒だった。何より轢かれた猫をそのままにしておくのも、見ていて気持ちがいいものではない。

俺は駆け寄ろうとする武信を呼び止める。

「……かわいいそうだよ」

「わかってるって。ちょい待ってな」

俺は車のトランクからコンビニのビニール袋を引っ張り出す。

「……手袋ならもう持ってるけど」

猫はパツと見で外傷も無く、ここが道路のど真ん中でなければそのまま起き上がって走り去りそうなかんじだ。

「あの猫、綺麗な毛並みしてるだろ」

「……うん」

「死んでるんだぜ、あれ」

「……………」

「ごめん冗談だつて！タイムタイム！」

俺を無視して猫に近づくと武信の肩を掴む。

「…………何」

「あのな、猫の轢死体って結構エグい事になってたりするんだよ。あれ片側は綺麗に見えるだろ？でもひっくり返すとんでもない状況になつてる事も少なくない」

「…………具体的に？」

「うーん、蛆がわいてたりとか、傷口が広がって持ち上げた瞬間中身が出てきたりとか色々な」

むしろ形を留めてる轢死体のほうが珍しい気がする。

「…………でも、そのままにしておくの？」

「だーからビニール袋持ってきたんでしょうが。おいちゃんに任せなさい」

「…………どうして博多弁…………」

武信を押しつけて猫の前にしゃがみこんで、袋に両手を突っ込み、

下になっているところに背中側から手を差し入れる。棒のように固まってしまった四肢を見るに、轢かれてから随分経っているらしい。

「……どう?」

「綺麗に轢かれちゃったみたいだねー。幸い目立った傷もなさそう」

そのまま猫を持ち上げる。もう死んでしまっただけからかなり時間が経っている事を鑑みても、大人の猫の割にかなり軽かった。食い物探してる最中だったんだろうか。

普段ならこのままビニール袋に入れて運んでやるのだが、持ち上げた瞬間からどうしようもないほど悲しく、絶望的なまでの怒りがこみ上げてくる。

「……ひよこ?」

俺の異変に気がついたのか、心配そうな顔を向けてくる武信。気づきたくないことに気づいてしまった自分を恨む。

「武信、交番行くぞ」

「どうしたのさ突然」

「こいつ轢かれて死んだんじゃない」

眠るように目を瞑る猫は驚くほどやせ細り、そして干からびていた。

「血が、抜かれてる」

16時20分。7課会議室。

「・・・これで報告終わり」

「んだよ、結局ハズレじゃねえか」

「まだ聞き込み人数も少ないし、最初はこんなもんかねー」

「焦らず地道にやるしかないな。それじゃあ今日は解散だ」

優輝が立ち上がると、他の面々もそれに倣い帰り支度をはじめめる。

「よっしゃ、ラーメン食いに行くか」

「まだ少し早いだろう」

「ただ座ってるだけってのも結構エネルギー消費すんだよ。ひよこと武信も行くだろ？」

「・・・僕は別にいいけど」

「あー悪い、俺パス」

「おいおい最近付き合い悪くねえかひよこちゃんよお」

「ちゃん付けやめろっての。ちょっと調べたい事あるし、図書館行ってくる」

「何しに」

「さっき話した猫に関して少しねー。ああいう事する奴って大抵味を占めて何回もやるでしょ？過去にも同じような事件あったか調べたくなつてさ」

「んなもん調べてどうすんだよ」

「腹立たない？一刻も早く犯人捕まえて殺された動物と同じ方法で痛めつけたくない？」

「いや怖えよお前」

「冗談だつて。そんなわけだから、お疲れさーん」

直毅の抗議の声を背中に受けつつ、会議室を後にする。猫に関して当然許せないが、血を抜くという行為自体が少し引つかかった。以前木戸が投げた砂時計。さりげなく拝借しておいたが、あの中に入っていた液体も、確か。

3月7日。成橋工業大学研究室。

「こんちわーっす。昨日預けたあれの調べつきましたー？」

大学の研究室に俺の声が響き渡る。

研究室の面々は皆作業に没頭しており、挨拶は耳に届いていないようだった。

「ああひよこさん、どうもです」

そのうちの一人が顔を上げ、挨拶を返してくる。手入れしてないのが一目で分かるボサボサの黒髪で、同じように手入れされてない白衣を身に纏った、眼鏡をかけた表情の無い女性。

「葵さんちーっす。どうですかね？出所とわかりました？」

仙道葵。3年前くらいから色々世話になっている、俺の命の恩人。

「まだ全然。でもこれ凄いです。今まで見たどの液体爆薬とも成分が違うし、性質も全然違う。おもしろいですよこれ。どこで手に入れたんですか？」

「ああ、やっぱり爆薬だったんだそれ」

興奮しているような話し方だが、いかんせん無表情なせいでいまいちこちらに伝わってこない。

「ちょっとねー。仕事中にコソツとね」

「そついうのって絶対勝手に持ってきちゃダメですよね」

「いいのいいの。いや本当はダメなんだけど、砂時計一つ無くなつたところで事件になーんにも支障出ないから。多分だけど」

葵さんの疑念に笑顔で応対する。

「適当ですね・・・まあそのお陰で私達も色々面白いもの調べられるんですけど」

「んで、結局進展は無しですかい？」

「いえ、一つだけわかったことが」

「おー、どんなどんな？」

「この液体から、血漿蛋白質が検出されました」

「けっしょう・・・なんだって？」

「・・・それはつまりどういことぞいましてしょうか」

「この爆薬から血液に含まれる成分が出てきた、って事です」

3月30日、19時。成橋区立図書館。

警察の資料室でも良かったのだが、あそこは手続きが非常に面倒くさい。その点区の図書館なんかは、新聞記事のバックナンバーが誰でも簡単に閲覧できるようになっている。非常にありがたい。

「・・・思ったより多いな」

動物の血が抜かれて死んでいるのが見つかったのは今日だけでなく何年も前から色々な地域で起こっているようだ。

一番古いもので4年前の8月、場所は栃木。その他関東を中心に発生。事件は1年近く続き、2年程間が開いて去年の暮れあたりから再び同様の事件が発生。通算すると今日までで28件、そして今日で29件目か。

血を抜かれた動物の種類も様々で、野生の兎から外飼いの犬まで幅広い。そもそも同一犯かどうかもわかっておらず、ちょっとした不思議現象として紹介している記事すらある。

「キャトルミューテイレーションかよ」

人が狙われたのなら警察も動くだろうが、それが動物となると途端に腰が重くなる。世の中の理不尽さを感じた。

パソコンの入った鞆を抱え、もうすっかり日も落ちた寒空の下へと向かう。長時間同じ姿勢で座っていたせいか寒さが足腰に沁みる。大体動物の血なんか何に使うのだろう。魔方陣描いて悪魔でも呼び出す気だろうか。

「・・・アホくせー」

自分の思考に自分でツッコミをいれる。そんな事考えるまでもなく、解答は既に自分の中にある。

しかし答えが分かったところで、その過程がわからなければ意味が無い。具体的には、血を抜いた目的とその犯人。そしてそれらの関連性。なんにせよ、”再び”人間がターゲットになる前にどうにかしなければならぬ。

そして俺の動きは、誰にも知られてはいけない。あの砂時計を隠したように。

だって、これは報復だから。すごく稚拙で、全く幼稚な俺の仕返し。幸せだった少年の自分勝手な復讐劇に、観客は必要ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5757s/>

R.A.G Rebellion Against God

2012年1月12日00時51分発行